

無様屈服ワンちゃんばかりのこの世界で俺は巨乳好き

飛び回る蜂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

起きたらメスガキ物同人世界ってどういうことなのだよ

ようぐそうとほうとふ様より、メスガキ先輩のイラストを描いて頂きました。

この場を借りて厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございます！

こはや様より雛ちゃんのイラストを描いて頂きました。

この場を借りて厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございます！

ようぐそうとほうとふ様より、メスガキ先輩のイラストを描いていただきました。なお、イラストは作中でこういうことがあったという訳でなく、また作中の展開との関係性はございませんので、その点をご了承頂きますと幸いです。

この場を借りて厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございます！

ようぐそうとほうとふ様より、東夕貴ちゃんのものイラストを描いて  
いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます、誠にありが  
とうございます！

## 目次

### 本編

腰へこ犬に俺はなれない	1
バイト中に知り合いが来ると気まずい	9
属性のカバー範囲が広いのはいい事ばかりじゃないと思う	21
甘いものはいつだって心のオアシス	29
吉夢も悪夢もいずれ醒めるもの	39
気分は天気引つ張られる	52
夏の魔物はいつもそこにいる	65
親との電話を人に聞かれるのなんか気恥ずかしい	77
やり込んだ対戦ゲームは有利取りやすい	92
遊園地で大人ぶりたい子供心	105
事実と小説、どっちの奇も面白ければいい	117
距離感是人それぞれ	129
シンクロニシティなんてないったらない	140
大人になるほどありがとうが照れくさい	154
恋は酸っぱく愛は甘いなら友情はなんだろう	170
番外編：サンタがいるかは諸説ある	182
たとえ世界崩壊の日でも俺は犬にはならない	197
エピローグ	212
IF：feat. 東 夕貴	
IF：俺はただ東へ向かう	232
西へ東へあたふたと	241
東屋にはノスタルジーが隠れてる	252
東雲はもう近くに	263

東へ。(最終話)

とりとめのない後日談編

後日談1 東夕貴の不安

後日談2 優しさの味は絆から

273

284

294

## 本編

### 腰へこ犬に俺はなれない

この世界は変わってしまった。

何が？と言われてしまえば「全て」と答える他ない。

どうして？いつから？どのようなようにして？誰によって？

そんな誰も知ることが出来ない疑問は既に忘却の彼方。

俺に出来ることは、ただこの世界を受け入れることだけだった。

寂れた公園の細道を歩きながら、ベンチに座るやや生え際が後退した、どこか苛立たし気なスーツの中年を見やる。

そんな彼に歩み寄っていく人影が現れた。

ああほら、来たぞ。この世界の「常識」が――

「あれ〜？おじさん一人でどうしちゃったの？」

「……ああ、いや。少し頭が痛くってね」

「ふくん？そうなんだあ。ねえ、お仕事はどうしたのお？」

「いつ、今は休憩中なんだよ！」

「……ふう〜ん。お昼から公園で時間潰しねえ？かわいそ〜」

「(ピキッ)お、お嬢ちゃん。あんまり大人をからかうもんじゃないぞ。それに僕は時間を潰しているわけじゃ……」

「あれえ？怒っちゃったあ？子供相手にムキになっちゃったあ??」

「……」

「あれあれえ？怒っちゃったのお??ねえなんか言ってみてよお??お・  
じ・さ・ん?。」

「ごっ、このガキ……」

「キヤー！こわーい！ガキだつてえ！子供相手に凄んで悲しくないのお？」

「ぐっ……」

「ごっ♡ザコ毛根♡甲斐性なし♡子供に口げんかで負けて恥ずかしくないのお？」♡」

「はあ!?負けてないが!?!?!」

—— 僕は、ついていけそうもない。

—— 「メスガキ」がやたらに多いこの世界のスピードに。

仔細はこの際省くが、気づいた時にはこの世界の在り方は大きく変わってしまった。

ざつくばらんに言えば、「この世界はある日を境にメスガキ物エロ同人みたいな世界」になってしまったんだ。

いやそうはならんやろ!!

百歩譲って超能力に目覚めるSF世界になるとか、魔法が使えるようになるファンタジー世界になるとかそういうのでいいじゃん!!

!!  
よりにもよって「メスガキエロ同人世界」ってなんだよ!!バカかよ

!!  
初めてその現場を目撃したのが、大学の講義に出ようと家を出た直後だった。

随分体格のいい男と、見た目10くらいの子供が向かい合って話していた。

方や眉間に皺を寄せ、青筋を浮かべ、今にも子供に殴りかかりそうな男。

方やそんな大人の表情をもとせせず、ニヤニヤと嘲笑を浮かべて

小馬鹿にする幼女。

「ぎくこ♡お飾り筋肉♡威勢だけ♡童貞♡」

「あゝあゝ!?!てっ、ためえガキの癖に……!!」

思わず止めに入ろうと思ったが、俺はその足をすぐに止めた。  
何故か。決まっている。

その男が腰をへこへこさせていたからである。

(あつ、そういう性癖の人なんだ)

俺はその場をそっと離れ、講義へと向かった。

それからというもの、道行く先でやたらとこういう出来事を見かけるようになった。

「やーいロリコン♡」

「だっ、誰がお前なんか……っ!!」

「キツモ♡子供相手に盛っちゃって恥ずかしくないのお?」

「ちがつ、これは……うっ、うるさいっ!!」

「あつは♡無様でワンちゃんみたい♡ねえワンって言いなさいよ♡言え♡」

「クウッン……」

今やこんなことが身の回りで日常的に起きるのだ。気が狂うっ!

残念なことにもこの世界での【男:メスガキ】の勝率は確認しているだけでも驚異の【0:10】。

この世界の男は「メスガキ」には勝てないようになっているらしい。



そんなことある？

何より恐ろしいのがこの世界、メスガキ達の頭脳は大人の名探偵ばりで、その語彙力をもつてしてワンちゃんを躡けている。

豊富な語彙力と罵倒で、言葉巧みに精神を屈服させる技術がこの世界の子供にはあつちやうんだなあこれがあ！いやあつてたまるか。

きっとそれが刺さる人間にとってこの世界は、ある種夢のような世界なんだろう。

道を歩けば幼女メスガキに当たる。なるほど、くる人にはくる世界だろうさ。

だがそもそも俺にそんな性癖はねえんだよツ！！

俺はお姉さん系が大好きなんだよツ！！

死ぬときは、でっけえおっぱいに埋もれて死にてえ！！

子供相手など冗談じゃない。俺は2つ年上のおっぱいがデカいタレ目のダウナー系お姉さんと結婚するんだ。

年下は範囲外だし、未成年に手を出してムシヨ行きなど死んでもごめん。

じゃあ同じく巨乳好きだった俺の友人達はどうなったのか？

確認したところ、無様屈服腰振りワンちゃんになったわけではないが、最近「分からせ」という言葉を使うようになった気がする。

今後の付き合いは要注意だ。

さて、今は買い物帰り。

無様犬に成り果てたハゲを放置し、帰路へと向かう。

「あつれえ？お兄さんこんなところでどうしたの？」

うわ出た。

無駄に軽装のランドセル背負った幼女だ。

などとは言ったが、別に知らない子じゃない。近所に住む女の子の雛ちゃんだ。

姉が俺と同じ年で、同じ中学だったそのよしみだ。もつとも、そこまで付き合いがあった訳じゃないが。

軽くしゃがんで目線を合わせる。

侮るなかれ、子供とのコミュニケーションではとても大切なことだ。

「よつ、雛ちゃん。買いもん帰りだったんだが、珍しい犬を見かけてな」

「ワンちゃんっ!?どこどこっ?ワンちゃんどこっ!」

「あー……さつきまでいたんだけど、どっか行っちゃったかな(警察とか)」

腰へこワンちゃんのレア度は別に高くないけど、まあそういうことにしておこう。

この世界の警察が屈服マゾ犬にどんな対応をすかなんて知らん。だがこのご時世、公然の場で子供に大声で怒鳴り散らかし、しかも立つもん立ててたら捕まったっておかしくないだろう。というか捕まれ。

「なーんだ、ざんねーん。ねねっ、お兄さんこれから暇?遊ぼっ!」

「悪い、この後ちよつと用事が立て込んでんだ」

この子を嫌っているわけじゃないが、この流れはあまりよろしくない。い。

この世界の「メスガキ」カテゴリの属する子供の「遊ぼう」は素直に受け取るのは良くない。

最悪2〜3人に囲まれて殺されてもおかしくない(社会的に)。

「ええ〜!!前も用事って断ったじゃーんっ!」

「すまんって。ほら、可愛い顔膨らますな。フグになっちまうぞ」

なまじ知り合いの妹だけに心苦しいが、すまん許せ。

君子危うきに近寄らず。触らぬ神に祟り無し。メスガキに不用意に近づくことなかれ。

雛ちゃんは、ぷひゅー、と空気を吐き出してフグをやめる。

「うー……分かった。それじゃ、私も帰るっ。またねっ！」

「おー、またなー！前見て走れよー！」

手をブンブンと振りながら、子供らしい笑みで走り去っていく。

そんなあの子を見ている俺はというと、どことなく憂鬱な気分だった。

「……あの子も、メスガキ、というやつなんだろうか」

人の性癖のことをあれこれ言いたくないが、だからこそ身の回りの人の性癖の開示などされたくはないというもの。

ひよっとして、俺が知らないというだけで、あの子もそこのへっぴり腰犬を調教しているのだろうか。

この世の中では俺の方が異質なのかもしれないが、見知らぬ他人を罵倒するあの子を見たくないと思うのは情けない事だろうか。

あんなに元気いっぱい明るい子供が、陰では情けない大人ワレンチャンを生産していると思うと……

「なんか、やるせねえ……」

午後の講義の無い、幸せな一日。

それでも俺は、この世界を嘆かずにはいらなかった。

「……ただいま」

からっぽの家に、私の独り言が響く。  
もうじき夕方なのに、家には誰もいない。

「……またお金と手紙だけ」

リビングを覗くと、机の上には見慣れた千円札と、スーパーのお弁当。  
当。

明日の朝と昼の分は自分で買いなさい、という暗黙の了解。  
それを見ているのが何だか苦しくって、私は部屋に駆け込む。  
自分の部屋に着く。

ランドセルを床に放り投げ、ベッドに飛び込んで布団にくるまる。

「……」

寒い。

この家は何もかもが、冷たい。

「……お兄、さん」

唯一あったかいは、今日会ったお兄さんとの思い出だけ。  
その他には、なんにもない。

それだけが、胸の中でポカポカしてる。

「帰りたくなかったよお……」

最近不審者が多いというお知らせもあって、あまり一人で歩きたくなかった。

でも今日は友達も皆帰っちゃって、私は一人だった。今日はなんだか、それが無性に怖くて、心細かった。

だから、お兄さんを見かけて、つい近づいてしまった。

お兄さんは優しいけど、あまり子供と一緒にいたがらない。

なんとなく分かってはいるんだけど、それでも一緒にいたかった。この冷たい家にいたくなかった。

### 『雛ちゃん』

名前で呼んでくれたことが嬉しかった。

私の名前を呼んでくれる家族は、ロクに家に帰ってこないから。

両親は仕事で帰ってくるのはいつも深夜。

学校行事にもあまり来てくれないから、あんまり好きじゃない。

お姉ちゃんは早めに帰ってきてても、疲れてるからかすぐに寝ちゃう。

しかくしけん？とかで今が大切な時期だと言ってたけど、もっと構って欲しい。

「……寂しい」

明日も、お兄さんに会いたい。

あつたかくて、優しくて、眼を見て話してくれるお兄さんに会いたい。

バイト中に知り合いが来ると気まずい

今日も今日とて俺はこの世界で生きている。

目が覚めたら悪い夢のように消えてくれないかと願ったことも一度や二度じゃない。

その度に子供相手に腰をへこる彼らがチラついてしまうのは最早病氣じゃないだろうか。

この世界の法則について、少しだけ分かったことがある。

何故か、そう何故かこの世界では『一定年齢以下の女兒は容姿がいい』ということだ。

恐らくはこの世界の子供、メスガキの顔には何かしらの補正がかかるのだろう。

それに誘蛾灯の様に誘われた無様な負け犬ワンちゃんは、ころつと犬のように敗北してしまうのだろう。

俺はこれを『メスガキフィルター』と呼ぶことにした。

滅多なことでは使わないだろう。というか使いたくないわこんな単語。

だがそんな世界でも働かざる者食うべからず。

今日も俺はバイトに精を出している。

喫茶店のバイトは俺の心に癒しを齎してくれる。この世界で生きる上での数少ない癒しだ。

俺が勤めているのは、美味しいコーヒーとお茶請けが密かに評判の喫茶店『アンファン』。

働いて既に2年目になるこの喫茶店、俺は最高にやり甲斐を感じている。

そう、大学近辺のこの喫茶店、何を隠そうお客さんの年齢層がとてもいい。

同じ大学の先輩から、少し年上のお姉さんの来客率が他の店舗に比べてとても良いのだ。

日々大の大人が子供に罵られるのを横目に見かけ精神を削られている俺にとつて、それはもう眼福と言わざるを得ない。

そうこう言っている間に、ドアからカランコロンと来客を告げるベルが鳴る。

入ってきたのは女性客が二名。綺麗系と可愛い系のお姉様方。

「いらっしやいませ、こんにちは」

「あら、こんにちは。……今日はお兄さんがいる、ラッキーね」

「やったねっ。美味しいの淹れてねー!」

分かるか?この尊さが?エエツ?

ちよつと年上の方から感じるこの余裕、上品さ。

たまんねえなあ!

「かしこまりました、それではご案内いたします。二名様ご来店です」

その緩み切った感情をぐっと抑え、努めて冷静に、丁寧な接客を心がける。

俺がすべきは愛を説くことじゃねえ、愛してもらうことだ。

その為にも俺は可能な限り、『いい店員』であるんだツ。

「こちらがメニューです。それと、本日のおすすめコーヒーはブラジルのNO.2となっております。ごゆっくりどうぞ」

「ん、ありがとう」

「ありがとうー!」

ああ、たまんねえ……

これだからこのバイト辞めらんねえんだ……!!

仕事は主に接客対応のホールと、調理担当のメイクに分別されるが、俺は主にホールを担当している。

たまに人が必要な時は調理も行うが、俺からの希望でホールを任せ

ていただいている。

そうじゃなきややつてらんないからなこんな世界！バーカ！滅びろ運命！

案内をした後、入口周辺に戻ると再度来店を告げるベルが鳴る。入ってきたのは……

「こつ、こんにちはー」

「お邪魔しまーす」

うわ出た、制服着たロリ達だ。

とはいえ俺はそれをおくびにも出さない。

彼女達にそんな口をきけば俺の首が一発で吹き飛びかねない。

「どしたんすか、芽衣ちゃん、美樹ちゃん。オーナーなら今はいないっすよ」

彼女達は『蜜川<sup>みつかわ</sup> 芽衣<sup>めい</sup>』と『蜜川<sup>みつかわ</sup> 美樹<sup>みき</sup>』。

この喫茶店のオーナー、蜜川さんの愛娘の双子ちゃんだ。

芽衣ちゃんが姉、美樹ちゃんが妹らしい。

最近中学生に上がったとかで、反抗期らしきものに入ったことをオーナーが嘆いていたのを覚えている。

「ちつ、違ってっ。きよ、今日はお客さんっ」

「そーそー。ほらー早く案内してー?」

「はあ、そっすか。んじゃ、こちらへどうぞー」

最近、こうしてお客さんとして来店することがある。

まっ、その魂胆も俺は見抜いているわけだが。

席に案内してメニューを差し出しつつ、二人に軽くぼやいて見せる。



「そんな頻繁に来て、別にサボったりしてねっすよ？オーナーから見張るよう言われてんのかもしんねっすけど」

「ちがっ、違うのっ。えと、あの……」

二人の目的は分かってる、監視だ。

大方、オーナーから抜き打ちで行ってきて、サボってないか見て来いとも言われたんだろう。

あるいは、娘達に自分の店の自慢でもしたいのかもしれない。

「別に理由なんかいいじゃん。ねー今日のオススメコーヒーってなに？」

「美樹ちゃんにブラックはまだはえーっすよ。ラテでいっすよね」

「えー。子ども扱いはんたい」

こうしてみると彼女達は対照的だ。

方やおどおどとして控えめ、方やどこかさばさばしててダウンナーな雰囲気。

10年もしたら、きっと素敵な美人になるだろうな……間違いない。

「ほらほらお客様のご注文だぞー。ちゃんと接客しないとパパにチクっちゃうぞー」

「みつ、美樹……!?ダメだよ、そんなこと言っちゃ……っ!」

こっつ、このガキ小憎たらしい真似を……ッ!

ここのバイトが今の所人生で一番の心のオアシスなんだぞッ!

もしクビにでもなったら俺はもうお姉さま方と会えなくなるってことだろうか……ッ!!

「……はいはい。んじゃ、苦くても文句言わないでくださいよー」

「やーん。私達苦いの飲まされちゃうんだってー」

「へっ!?そっ、それって……!?!」

思春期の少年少女はそういう言い回しをどこで覚えてくるんだろうな。

ぶっちゃけ対処に困るわな。

だが、今の俺はマジレスの鬼。メスガキの罠になんか負けはしないのだ。

「一応言つときますけど、頼んだんだから飲みきってくださいよ?ブラジル、めっちゃ苦いっすからね」

「えっ」

「えっ」

「それじゃ、ごゆっくりどうぞー」

呆けた二人の顔を放っておき、注文をメイクに伝えておく。

「どうするの……?お兄さんが言ううってことは、今日のはほんとに苦いよ……!」

「だだ、大丈夫でしょ……。おにーさんの言うことだし、きっとちよっぴり薄めたりしてくれるって……」

は?しないが?大人を舐めるなよメスガキ……!」

という冗談はさておき、そのまま持つていくのは決定だ。

この苦みがいいんじゃないか。

さて、この双子ちゃんが仲良しなのは分かってもらえただろうし、この二人の性根は『メスガキ』に該当しないように見える。

だが、俺は知っている、なんなら見てしまっている。

彼女達が『調教』をしようとしているところをな……!」

あれは、俺がこの世界が改変されたとは気づいていなかった頃。  
腰へこワンちゃんを見かける度に尋常ではない程S A N値を削り  
減らしていたころだ。

今は慣れた。慣れたくなかったが慣れてしまった。

『どこかに美人なお姉さんが俺とおしゃべりしてくれるアルバイトは  
……流石にねえか……』

俺は大学に入る為に一人暮らしを始め、そしてよさげなアルバイト  
を探しがてらこの街を散策していた。

求人を探すのも考えた。だが、それじゃ勤務先にメスガキがいるか  
もしれねえ……！

今思うと冷静じゃなかった。が、その時は本気でそう思っていたん  
だから俺も中々に精神的に追い詰められていたんだと思う。

『バカ♡本気にしちゃった？ぷぷぷ、なっさけなく♡』  
『なっ……おっ、大人をからかうんじゃないっ』

道を歩いているだけでこんなのがしよっちゅうだ。

もう視界に入れるのも嫌になって若干のノイローゼになりつつ  
あったよ畜生。

そんな中、俺は見てしまったのだ。

彼女達が大人一人を相手に身を寄せ合い、恐い恐いと挑発しながら  
大人を怒らせようとしていたのをなッ！

「怖いよお、美樹……」

「私も。怖いねえ、芽衣……」

「クソッ、大人を舐めやがって……ッ!!」

などと言っていたのだから間違いない。

その男は十中八九、二人に言い負かされて無様屈服腰へこワンちゃ

んへと成りかけていたのだろう。

だが俺は、その時はまだここが『メスガキ物エロ同人世界』とは知らなかった。

俺にはその光景が『子供二人を襲おうとする不審者』にしか見えなかったのだ。

この世界の法則の一つに『男、特に大人はメスガキには勝てない』というものがある。

故に、元々男が彼女達に危害を加えることはできないのだ。

「そおりゃあ!!!」

「へブッ!」

にもかかわらず、俺はその場で手に持っていたバッグを男に投げつけ、二人を護ってしまったのだ。

男は顔にバッグをぶつけられて怯み、正気を取り戻したかのようにその場から逃げていった。

そう、俺はあろうことか……! !

メスガキを助けてしまったのだ……ッ!!

ということがあったが、俺は元気です。いや元気じゃないかもしれないわんわ。

それからはお礼だなんだとなし崩しにここの喫茶店に連れられ、今に至る。

知らずとはいえ、俺は自らメスガキと接点を作ってしまうというリスクを背負ってしまった訳だ。

だがここの喫茶店を紹介してくれたことには感謝している。

お陰で俺はここのバイトでお姉さま方と交流し、日々の癒しを得ているのだからな。

こればかりは感謝してもしきれない。

それに助けなきやよかった、とは決して思わない。万が一、億が一、

兆が一、あの子らは本当に襲われていたのかもしれない。

俺の選択は、間違つていなかった。例えばメスガキ達との関りが増えたとしても、人命を守ろうとした俺の選択は正しかったのだ。

「…………いや、考えすぎか。こんな世界だしな」

いかんいかん、思考に埋没しすぎた。

やめよう。無様屈服腰へこワンちゃんだろうがそうでなかろうが、不審者なら通報すればいいだけの話だ。

疑心に満ちた思考を止め、俺は彼女達の所にコーヒーを持っていくのであった…………

「うゝええ…………苦いよお…………」

「うおあ…………こんなに苦いのかあ…………」

舐めてた。中学生に上がったのだしコーヒーくらい飲めるだろうと高を括つてた。

苦い。それはもう苦い。

隣に座る芽衣なんか涙目だ。かくいう私もきつと、泣きそうな顔に見えることだろう。

大人はどうして、こんなに苦い物をあんなにも美味しそうに飲むんだろう。

いや、私達は大人なんだ。この黒い水を乗り超えて大人になるんだ。

「言わんこつちやない…………。備え付けのミルクと砂糖あつからそれ使  
うんすよー」

おにーさんはそう勧めてくれるが、出来るならこれはブラックのまま飲み切りたい。

あたし達はもう大人なんだぞって、他ならぬこの人に認めてもらいたい。

あたし達は前に、おにーさんに命を救われたことがある。

忘れもしない、ある日の下校中。

その日はたまたま早く帰りたい気分で、集団下校から離れた後、近道を通ろうと路地裏に入った時だった。

帰路に着く為に皆と離れてすぐ、私達は不審者に襲われた。

あまりに怖くて、その時のことははっきり覚えていけるわけじゃない。

でもその人は背が大きくて、明らかに目が血走ってて、全然冷静じゃなさそうだったのを覚えている。

『クソツ、あのメスガキどこへ行きやがった……ツ!!』

怒って激情を露わにした大人があんなに怖いものだなんて知らなかった。

恐くて、焦ってその場を離れようとしたとき、その人の目がぐるりとこちらを捉えた。

『ヒツ、み、美樹……怖いよお……!』

『わ、私も、怖いよお、芽衣……!』

『……ああ?メスガキが……クソツ、大人を舐めやがって……ツ!!』

男の目が、ゆらゆらしていて恐ろしかった。

まるでお腹が空いてる時に餌を見つけた野良犬のようだった。

私達は肩を寄せ合い、震えるしかなかった。

その男がなぜか怒りながらこっちに向かってきたとき、もう家には

帰れないのかな、なんて考えてしまう程だった。

……おにーさんが助けに来てくれたのはそんな時だった。

『——そおりゃあ!!』

『へブツ!』

どこからか飛んできたのはバッグだった。

それは寸分違うことなく、男の顔面に吸い込まれていった。

走ってきたその人は、片腕で私達を護るように私達の前に立っていた。

その背中があまりにかっこよくて、今でも目に焼き付いて離れない。

『おいおい流石に見過ごせねえじゃんか……ツ!』

彼は私達を背に、しっかりと目の前の男を見据えていた。

その視線に当てられたのか、私達を襲おうとしていた男は慌てて逃げて行った。

『……なんなんだよマジで。なんで最近こんなことばっか起きんだよ。法治国家日本どうしたんだよ……』

『お嬢さん達怪我とかない?ちよつと待ってて、警察に通報するから』

飛び込んできた彼はよくわからないけど、打ちひしがれるようだった。

けれどそれもすぐに切り替えて、携帯電話から警察に電話を始めていた。

そこからは警察が来たり、父さんや母さんが泣きながら迎えに来てくれたり、お兄さんがウチの喫茶店のバイトになったりと本当に色々あった。

あの時のお兄さんの背中が、あまりに大きく見えて。  
だから私達も、早くあんな風にかっこいい大人になりたいくて……

「あまあい……」

「おいしい……」

「ミルクと砂糖入れりや、そりやあねー」

いや無理だわ。コーヒー侮ってたわ。

んでもってミルクとガムシロップは凄い。考えた人に金賞をあげたいくらい凄い。えらいっ！

「コーヒーって苦いんだね……」

「ね……おにーさんは良く飲めるね……」

私も芽衣も出来るだけ頑張ったけど、美味しく飲んで欲しいと言われてしまえば無理は出来ないし……

「大人だって飲めない人は飲めないっすからね。飲みたいならあつさりした奴とか出しますし、なんならアメリカンとかから慣らした方がいっすよ」

無理に飲んでもいいことねーし、とやや苦笑いで言うお兄さんにちよつとドキツとしてしまった。私、不覚。

きつと芽衣も同じことを考えてた。双子だし、それに耳がちよつと赤いもん。

「お兄さんっ！つ、次はちゃんとブラックで飲みますから……っ！」

「頑張るよー。だからおにーさん見ててねー」

「ブラックがちやんとつてのもおかしいんすけど……まあ、オーナー



も喜ぶでしょうし、頑張ってください、つす?。」

どうしたら大人になれるのか、私達には分かんなくて。

コーヒーがブラックで飲めたら大人になれるって、それくらいしか思いつかなかった。

だから、ちよつとだけ変な質問もしてしまうんだ。

「……ねね、これブラックで飲めたら、おにーさんみたいになれる?。」

「え? いやーどうすかね。でもお嬢さん達が俺みたいになって、いいこと無いと思うんですけど。」

「そんなこと無いと思います……っ!。」

「わお、芽衣が珍しく早口だ。」

おにーさんは私達の憧れ、目標。

だからこそ、私達は今日もコーヒーを飲みに来る。

いつかの憧れを、ずっとこの目に焼き付けていたいから。

ねえ、おにーさん

あの、お兄さん

あたし達、頑張って大人になるからね

私達、頑張って大人になりますから

おにーさんみたいな、カッコいい大人に

お兄さんみたいな、優しい大人に

属性のカバー範囲が広いのはいい事ばかりじゃない  
と思う

確かに俺は、今までなるべくメスガキと関わらないよう日常を過ごしてきた。

じゃあそうしてたら絶対にメスガキに絡まれないのか？

答えはノーだ。幸せは歩いてはやってこないのに、メスガキはやってくる。

イカれてる？ それ、誉め言葉ね。クソがつ。

例えばカラオケに行った時。

ちよつと飲み物を取りに行つてくるかーと席を立つこともあるだろう。

そこで注意しなくてはならないのは『他の部屋を覗きこまないこと』だ。

何故か。メスガキがいるからである。

奴らは複数人で集まり、自分たちを目撃した不特定なターゲットを部屋に引きずり込むことがある。

カラオケって会員登録に年齢制限なかったっけ？ と思つたが、ここはそういう世界。

世界がメスガキに有利なフィールドを提供していると思えな  
い。

『あれあれ？ お歌も歌わないでどこ見てるのお？ ♡』

『メスガキが……っ。大人をからかいやがつて……!!』

稀に覗くとこんな光景が広がっているのだから悍ましい。

監視カメラ仕事してくれ。飾りとちやうねんど。

「レポートが進まねえー……」

さて、今俺がいるのは大学内にある図書室。

この世界におけるメスガキと遭遇することの無い、いわば安全地帯である。

安全地帯の多くは年齢制限や立ち入り制限がある場合だ。

居酒屋や、それこそ俺がいる大学構内とかだな。

だがそういう場所は得てして長居が出来ない。

絶対的な安全の保障など、それこそ自宅か実家くらいしかない。

それに奴ら、恐ろしいことに大学近辺には普通に出没する。

分かるか？　なんか同じ講義で見たことあるなーみたいなやつが、

幼女に手を引かれて人目につかないような所へ連れてかれるのを見る気持ちだ。

野郎も野郎で頑なに手を振りほどこかないのなんなの？　魂まで離してしまうからなの？

一般男性の方々には大変申し訳ないが、残念なことにはこの世界の男は幼児性愛者ばかりだ。

幼女に近づかれただけで赤面する（最大限オブラートで包んだ表現）ような男しかいない、こんな世の中じゃ。

おかしくね？　大学歩いてるだけで「分からせてやる……！」とか聞こえてくるの。

それより前に教授達は講義を理解らせてえと思ってるぞ。

大学構内は通常関係者以外立ち入り禁止だし、普通に考えるなら子供が入る余地は無いだろう。

「あれえ？　2年がこの時間に図書室なんかで何してるのお？」

「……」

うわ出た。黒基調ロリータ服の幼女だ。

大学ならメスガキはいないと思っていたのか？ いるんだなあこれがあ！

いや、なんでいんだよツツ!!

よりにもよってレポート詰まってる時にくんなよマジで……ツツ!!

……冷静になれ。

そもそも誰なんだこの子供。

見た目身長は150届かないくらいだが、教授の孫娘とかか？ その可能性はあるな。

つか図書室なんだから本読みに来てるに決まってるんだろ……

「ちよつと無視？ 返事くらいしなさいよお、ねえ」

「……ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」

「はあ？ だったら何よ。あたしが出てかなきやいけない道理はないわよ」

これは……マジで教授の娘説出て来たな。

どの教授かは知らないが、娘がメスガキになったら泣いていいと思う。

あるいは教授も犬なのか。だとしたらもう少し腰を大事にしてくれ。

「ねえ何読んでんのお？」

「教授に出されたレポート課題……宿題だな」

「……なんで言い直したの？」

そりゃ子供に難しい言葉は使っちゃいけないからな。

いつからなんだろうな、宿題が課題に変わるのって。大学からか？

「レポート苦戦してるのお？ざっこの単位取るのやめちやええばあ？」  
「苦戦つつか……この教授、出席とか採点緩い癖に、期限にやたら厳しいからな。一日でも遅れると即アウトだから余裕がねえ」

一つ一つの発言が腹立つが、万が一教授の内誰かの娘だったら後が怖い。

適当にいなしてやり過ぎすほかない。

ここで役に立つのが、今までメスガキと遭遇した際に培ってきたノウハウ。

メスガキ相手にはマジレス、素直、冷静の3つを保ち続けるのが回避のコツだ。

ここで慌てて否定や、見得を張って「負けないが!？」とか言ってしまうとメスガキ固定となってしまう。

「それ出たの4日前でしょ？なんで出てすぐ取り掛からなかったのお？」

「よく知ってるな。ほらあれだ、ちよつと調子が出なくてな」

「どーせバイトか飲み会にでも行ってたんでしょ」  
「ヴツ」

出た、鋭く俺を傷つける言葉の刃。

妙にするどいメスガキの観察眼共に繰り出されるそれはまさに致命の一撃。

その眼は現代社会に鬱屈した青年く中高年の心情を容易く見抜き、効率的な屈服への最短経路を導くという。

俺は屈服とは無縁だが、普通に傷つくからやめてほしい。

「その教授、確か去年もおんなじような内容のレポート出題してたし、

誰かに見せてもらえばあ？ 参考になる資料探せばいくらでもあるでしょ？」

「そうすつかなあ……。つか、ほんとによく知ってるなお嬢ちゃん。歳いくつだ？ 中学生くらいか？」

さては教授、結構な頻度でこの子供研究室に連れてきてんな？

大学構内は安息地帯だと思ってたが、そうでもないことが証明されてしまったな……

「……ちよつと、レデイに歳を聞くのはマナーがなつてないんじゃないかないかしらあ？」

なに眉ピクピクさせてんだこのメスガキ。

レデイ（笑）

マナー（爆）

「なあに笑つてんのよお!!」

「い、いやあ、そういうの気にするお年頃なんだなあと思つてな。悪い悪い叩く叩く、悪気はないんだ」

「だとしても先輩に向かって言うことじゃないでしょうがあ!!」

……は？

えっ、なに、そういう属性もいるのこの世界。

私は激怒した。

かのクソ生意気な後輩をどうイビリ倒してやろうかと考えていた。図書館で騒ぐわけにもいかないし、いい時間だったしひとまず学食まで連れてきてやったわけだけど……

「いやほんとすいませんって……」

「許せないのよ……私の年と身長をバカにする奴だけは……っ!!」

「いや、馬鹿にしたわけじゃ……」

「シヤラップっ!!」

言い訳など聞きたくないっ!!

悪かったわね、背が伸びなくてっ!! ちんちくりんでっ!!

「ケツ、どうせ私はチビですよーだ……新歓に出れば補導確定の女ですよーだ……」

「そりゃぐぐ愁傷様ですネ……」

しかしこいつ、学年離れてるとはいえほんとに私のこと知らなかったのか。

非常に、ひつつつっじょーに不本意だが、私結構有名だと思っただけだな。

ゴスロリ着たチビなんて滅多なことじゃないし。

「ねーほんとに私のこと構内で見ただことないの? すっごい目立つと自分でも思ってるんだけど。癩だけど」

「あー……なんででしょーね。不思議っすねー」

露骨に目を逸らしたなこいつ。

なんか怪しいけど……まーそういう人もいるのか。

「まあいいわ。これもなんかの縁だし、レポート手伝ってあげよっか？」

「いや結構です」

「凄い早口で言い切ったわね!?なんで!」

「いや、出来るだけ関わりたくないんで……」

そこまで言わなくてよくない!?

一応先輩よ私!?

「いやほんとマジで勘弁してください。ほんと吐きそうなんで……」

「泣くわよ!?チャホヤされて生きてきたからそういう反応されるとまじで泣くわよ!?!?!」

吐くほどって何よ!?顔!?顔なの!?

顔はいい自信あるわよ私!背はないけど!!

「私あなたになんかした!?初対面で吐きそうってどゆことよマジでっ!?!」

「……存在」

「あんたの親でも殺したの私……っ!?!」

「いや……先輩が悪い訳じゃないんすけどね……。世界が悪いっつーか……」

「世界とはまた大きく出たわね!?!」

嘘でしょ、初対面で存在否定されることある?

二十数年生きてて可愛い私に妬みつらみはあっても、こんな罵倒されたの初めてなんだけど!?!

「……まあなんだっていいわ。食べ終わったらさっさとレポート終わらせちやいなさいよ。なんかの縁だし手伝ったげるから」

「えー……悪いですしいっすよ」

「過去レポ探すことすら思いついてなかったのに遠慮なんかすんじや



ないわよ」

「ヴツ……」

事情は知らないけど嫌われてる……ってわけじゃなさそうだし、こんなくらいならしてあげたっていいでしょ。

こいつのやってるレポート、あたしも苦戦したっけなあ……懐かしい。

「それね、えらそーなこと言ったけどあたしも先輩に手伝ってもらったのよ。だから、まあ、ね」

「……なら、お言葉に甘えて」

「それでいいの。さっ、さっさと食べて終わらしちゃうわよ」

最近友達の集まりがどうにも悪いし、こういう出会いもまあ悪いもんじゃないわね。

新しくできた後輩に、ほんの少し手を貸してあげるとしましょうか。

……にしてもなんでこいつ、私と頑なに目え合わせないのかしらね……？

「……とりあえず、経過観察ってことで、よろしくです」

「あたしは術後患者かなにか!?!」

甘いものはいつだって心のオアシス

年上好きの俺にとって地獄みたいな世界ではあるが、決して全てがメスガキの法則に当てはまるといふ訳ではない。

メスガキの法則ってなんだよ。

例えば、学校に通う年齢の女子が全員メスガキのそれか？

これはノーだ。当然だ、そんなことになったら日本はもう終わりだ。潔く滅んでくれ。

全ての男性……ここだという男性は主に成人している男性を指すが、それらが全員腰へこ犬か？

これもノーだ。そうなったら社会的生物の定義ぶち壊れるわ。

そもその話、人間が産まれてる以上、男女間におけるメスガキを介さない関係性は確実にあるはずなんだ。

残念ながら俺が周囲の違和感に気づいてからでは、両親以外では今のところ観測されていない。なんでえ？

「ぶぶぶ♡かわいいそ♡」

「くっ……今に見てろ……」

「ほらっ♡どうして欲しいか言ってみなさいよっ♡言えっ♡」

「うう……ごめんなさい……」

俺の周りで観測できるのはこんなものばかりだ。

誰も助けちゃくれねえんだよ一人なんだからあ！

これらを踏まえて推測するに、全ての子供や大人がそうなのではなく、必要なのは恐らくきつかけだ。

お互いに『大人』や『メスガキ』に成るトリガーを踏み、その上でそれらが相対することはいわゆる『メスガキ物同人展開』というもの

は発生するのだろうか。

更に言うなら、人の心の内にそのトリガーが発生しやすいのがこの『世界』ということなんだろう。

何言ってるんだこいつ、頭おかしいんとちゃうか？

さて、講義も終わり今は帰路。

時間帯にしておよそ4時頃。夕飯には早いし、しかしちよつと小腹が空いたような、そんな時間。

バイトもないし本当なら友人を誘って遊びにでも……と思っただのだが今日に限って空振りだ。

複数人で行動していると声を掛けづらいためか、メスガキと遭遇する危険性は多少低くなる……らしい。

确实だと言えないのはそれでも出会う時は出会うからだ。熊か何か？

そういった下心込みでの遊びの誘いだったが、当てが外れた。

どちらにせよそれって根本的な解決にはなりませんよね？という疑問もある。

それにしたってまっすぐ家に帰るのも何だか味気ないし、ならばやるべきことは一つ。

「買い食いしてから帰るか」

行き先は家から程近い商店街。

大学に来てからというもの、暇があるついでに寄ってしまう。

規模はそこまで大きくないのだが、ここはいつも人で賑わっている。

学校帰りの学生から夕飯の買い出しに来た主婦、暇でおしゃべりに来た年配の人。

大きなショッピングセンターが近くにないのも理由の一端だろうか、夕方近くになると多くの人が集まる。

何が言いたいか分かるだろうか。

つまりこの場所はメスガキとの遭遇率が非常に、非常に低い。

人目が多いこの場所は必然、法に触れるようなことは起きにくいという訳だ。

こんな当たり前のことに安堵しなきやいけない現実に涙が出そうだ。

俺、こんなんじや地球を守りたくなくなつちまうよ……守れる訳じゃないけど……

人混みを避けて歩きつつ、まっすぐ俺が向かう場所。

それは商店街の中ほどにある一軒の和菓子屋。

「こんにちはー」

「いらっしやい！あら久しぶりね！」

それがここ『安城』という店だ。

和菓子を中心に取り扱っている店で、その味は最高の一言に尽きる。

中でも時間帯限定で販売しているたい焼きとカステラ。

この二つは日々開店前の行列が出来る程に人気が高い。

そして何より大切なこと。

「すみません寧さん、最近バイトとかレポートで忙しくって」

「ふふっ、気にしないで。私も最近喫茶店の方に顔出せてないしね」

店員のお姉さん、『安城 寧』さんっていうんだけどな。

もう超ッ絶可愛い……!!

こういう店ってお婆さんがやってるイメージあったけど、いやもうほんとすげえ美人なんだよっ!

背がちよつと高めで、髪が黒いロングで艶々してて、和服姿の美しいこと!

指の細さとか正しく嫺やかかって言葉がぴったり当てはまるような……っ!

しかもちよいちよいバイト先に顔出してくれる。女神か? 女神だったわ。

つい見栄張って忙しいなどと言ったがとんでもない。

この人に会えるなら秒で課題終わらして会いに行くわ。

和やかに世間話をしつつ、いくつか美味しそうな和菓子を見繕ってもらおう。

普段洋菓子も扱うバイト先なのもあって、お互いお菓子の話にはついつい興が乗ってしまう。

「はいっ、お待ちどうぞさま! また来てね!」

「あざすっ!」

夢見心地と言ってもいい時間はあつという間に過ぎ、手には少し大きめの和菓子の入った紙袋。

寧さんの紹介の仕方が上手く、日持ちするからという売りもあって毎回ついつい買いすぎてしまう。

紙袋の口を軽く開けて中を覗くと、そこには色とりどりの魅力的な和菓子が詰まっている。

本当に、いい店を見つけたなあおい……!

日々メスガキへの対策を考え、メンタルを削られている身にとって、これほどまでに安らげるような場所はない。

商店街の中には休憩スペースのようなものがある。

四人掛けの丸テーブルに椅子、花壇に沿うように配置されたベンチのある、買い物後に一休みできる場所だ。

自販機も傍にあり、まさに小休止に相応しい場所だ。

そこに足を運ぶと、時間を持って余した爺さん婆さん達がたむろしてたり、俺の様にお菓子や総菜屋で思い思いに買い物をした育ちざかりの学生たちでにぎわっている。

四人掛けを使うのも少し憚られ、隅のベンチに腰掛ける。

——一つ二つ食べて、後は家に持ち帰ろう。

そう思つて袋を開けようとした時、見覚えのある顔が傍を通る。

「あれ、雛ちゃん?」

「……!お、お兄さん!?!」

うわ出た。知り合いの幼女だ。

知り合いの幼女ってなんだよ、普通に近所の子供だよ。

「珍しいな、商店街にいるのは。というかここじゃ初めて会つた?」

「そ、そーかな? たまに来るんだけど……」

商店街で子供に会うとは考えてなかったから虚を突かれ、完全に気が抜けていた。

というより、商店街は子供一人で歩くには些か危ないのでは?と思わなくもない。

まあこの世界の法則的に、この子に害を与えられるとは思われないが。

嫌な信頼だなあ!?

「……そうだつ。ねね、今暇?」

「んー、まあ暇……つちや暇か」

参つたな、普段はなんやかんや忙しいからと煙に巻いてしまつてい

だが、この状況で『遊び』を断るのは難しい。

メスガキかもしれない相手にみすみす隙を与えたくはない。

でもどう考えてもお菓子で一服しようってとこだよこれ、もう逃げ場ねえよ。

しかし、若干ではあるが俺の予想は裏切られることになる。

「お話しよっ!」

「……ん?遊びじゃなくていいの?」

「いいのっ!」

……まあ、話くらいなら全然かまわないが。

それに、おしやべりがしたい子供を無視して家に帰る、というのも非常に後味が悪い。

どうせ家に帰ってもレポートやるか休むと称してダラダラするだけだし、少しくらい、な。

「——それでねっ、ちっちゃいけど豆電球がキラキラって!」

「うわなっつ!あれでしょ、屋上で太陽光パネルかざすやつ!」

「そうそうっ!何人かでグループ組んでやったんだけど、凄かったっ!」

お兄さんは楽しそうに、私の話を聞いてくれる。

こんなに誰かと楽しいお話が出来たのは、いつ振りくらいだろう。

「じゃああれやった?音叉使って振動させるやつ」

「おんさ?おんさって何?」

「……えっ、ひよっとして今使われてないの？Uの形した金属の棒みたいなやつ」

「知らない」

「マ、マジか……カルチャーショック……」

その日学校であったこととか、楽しかったこととか、誰かに話したことが無かったから、つい浮かれちゃってたんだと思う。

でも、他のみんなはきつと、毎日そうしてる。

私だけが、違う。

「こないだテストねー、私100点だった！しかも5教科中4教科！」

「おお！雛ちゃん凄いなあ、やるじゃん！」

「ふふん！そうでしょー！しかもね、算数の最後の問題がひっかけ問題で、解いた人は先生が褒めてくれてね！それで……！」

それでも今だけは、本当に楽しかった。

この時間が、ずっと続いて欲しかった。

叶わないとは思うけど、一人ぼっちでいるよりずっとずっと幸せな時間だったと思う。

できるなら、お母さんやお父さん、お姉ちゃんともこうやって、過ごしてみたいなあ。

お話するだけの時間が、欲しいなあ。

「……つと、悪い。ちよつと電話出てもいい？」

「えー!?……しようがないなあ」

ちよつとやだったけど、でもわがまま言って迷惑をかけたくなかった。

でも、やっぱりもうちよつとお話してほしかった。

「ごめんね。……げっ、先輩から……もしもし」



『出たわね。今時間ある?』

「大丈夫です。なんか用です?」

『こないだのレポートで伝え忘れてたわ。使ったサイトのURL、特にデータとか載ってるやつはちゃんと参考文献に載せなさいね』

「あー…….そういう書いてねっす」

普段私に見せてくれるような明るい顔じゃなく、どっちかというと嫌そうな顔。

私が見たことない表情。

私には見せてくれない、顔。

『やっぱりね。それとあの教授、本のデータだとなんも言わないけど、ネットの情報になった途端すっごい厳しいわよ。根拠薄いつて判断したら即減点だから』

「……マジです?」

『マジマジ。見たたサイトのURLメッセージで送るから後で足しときなさいよ。よかったわねえ♡頼りになる先輩がいてえ♡』

「うっぎ……」

『えっ、今先輩にうざいつて言った?ねえちよつと!!今あんたうざいつて言ったあ!?!』

話してる人の声は聞こえないけど……

今のお兄さん、凄く、楽しそうにお話してる……

「うっぎ」

『あんた後輩の自覚ある??レポートのミス指摘して罵倒とかなんなの?バカなの?死ぬの?』

「ご指摘あざまーす」

『か、感謝が羽根の様に軽いつ…….まあいいわ。そんなことよりあんた、今日この後空いてる?』

「ん…….まあ一応」

私、やっぱり迷惑になっちゃってるのかな。  
ずっとおしゃべりばかりで、嫌な子だと思われてないかな……

『こっち講義終わったから飲み行くわよ。私一人だとたまに門前払いからの通報コンボ食らうから付き合いなさい』

「いやです。じゃ、お疲れ様です」

『せめて断り文句はもうちよい捻れ——っ！』

「うるさっ。分かりました分かりました、また連絡しますんで。……ごめん雛ちゃん、ちよつとこの後用事できちやつたから行かないと……雛ちゃん？」

……なんか、もやもやする。

家にいるときと、同じ感じがする。

悲しいような、苦しいような、寂しいような。

「おーい？だいじよぶ？」

「へ？あつ、うっ、うんー！」

「そう？ならいいんだけど」

そう言うとお兄さんは立ち上がって、こっちを見てまた笑顔になる。

さつきまでのもやもやが、ちよつぴり無くなったような気がした。

「よし、んじや家まで送るよ」

「え……いいの？」

嬉しいけど、迷惑じゃないかな。

お兄さんは優しいから、ほんとには嫌なの、我慢してないのかな。

「一人で帰すわけにも行かないし。それにさ」

そう言うとニツと笑って、凄く素敵な笑顔で。

「俺、もうちよい話したい気分なんだ。だからもうちよい話そうぜ」  
「……………うんっ！」

まるで私がお話したかったのを分かってたみたいになんて  
言ってくれるお兄さんがかっこよくて。

また私は、お兄さんに甘えちゃうんだ。

「……………よし！これをあげよう」

「わっ、これ安城さんのおお馒头？」

「家で食べたら雛ちゃんの家族に怒られるかもだし、歩いて話しながら  
食べちゃおうぜ」

さつきはお兄さんのいろんな顔が見たいなって思ったけれど…………  
お兄さんは笑顔が一番素敵、だよ。

## 吉夢も悪夢もいずれ醒めるもの

以前『メスガキ物同人展開になるきっかけ』について考察したが一つ疑問が残る。

この世界が『大人(雑魚)』になるトリガーが発生しやすい世界だとして、何故俺に対してメスガキによるアプローチが発生するのだろうか？

そもそも俺に年下趣味は無い。犯罪者になりたくない。

未成年相手に致しましたとあつては、二度とお天道様を拝めない程の社会的制裁が待ち受けることは想像に難くない。

これは至極当然の話だ。

だが、俺自身がメスガキ、ひいては『同人物展開』のターゲットにされたことは嫌という程ある。

今でこそ関わらないように行動範囲や時間を変えたりすることで接触を抑えているが、以前はそうではなかった。

カラオケやゲーセンに行けば。

大学に通えば。

ちよつと近道しようと路地裏を通れば。

休日に電車を使えば。

何と無しに公園に寄れば。

道を歩けば。

それらのどれか一つでもしようものなら、そこには超高確率で大人を敗北させようとするメスガキがいる。

この恐怖が分かるだろうか。

彼女達が防犯ブザーの一つでも持っているようものなら、接触＝負け(社会的敗北)は免れ得ないという恐怖が。

そのエンカウント率と危険度は、ロンダルキアのブリザードみたい

だと言えば分かりやすいだろうか。

子供に話しかけただけで、朝の挨拶をしただけで通報されるようなこのご時世。

彼女達の指先とご機嫌一つで地獄に落とされるそれを恐怖と言わずしてなんと言うか。

そしてそれが『猫撫で声で向こうから話しかけてくる』んだ。

『ねえ♡おにーさん♡見て見てえ♡』

第二の爆弾か？

そういう時は決して見てはならない。

なぜならかなりの高確率で薄着の子供がいるからだ。

見た時点で社会的死はほぼ確定なので、無視して通り過ぎるのが最善だ。

『…………ちえっ』

このような声が背後から聞こえてきたら離脱はほぼ成功すると言っている。

だが稀に泣き真似をする狡猾なメスガキもいる。

『なんでえ……………なんで見てくれないのお……………？』

これも無視でいい。

なぜなら、メスガキに絡まれている時点で既に『同人物展開』は始まっており、周囲から人影が消えていることが殆どだからだ。

世間体を気にする必要はない。全て振り切れ。

子供の泣き声は無視する層と笑わば笑え。

そんなこと言ってもらえない程に、俺の中で『女児』という存在が恐怖の対象になりつつある。

どうしても見捨てられないのなら、何故か同じタイミングで近場に

ポップする大人（へこ犬候補）の傍を通るように歩こう。

理屈は分からないが、基本的にメスガキと大人はニコイチであることが多い。

そうすれば勝手にそっちに流れることがほとんどだ。

『! ……面白そうなの見つけちゃった♡』

ハンター試験で品定めしてそうなセリフが聞ければもう問題はない。

背後で腰へこマゾ犬が一匹増えるがそんなことはどうでもいいんだ、重要な事じゃない。

何故俺に対してこういったアプローチが発生するのか、そのプロセスは結局わからないままだ。

それでも俺はこの世界を生きていかななくてはならない。

そう、結局の所一番大切なのは『関わらない、関わりを持つとうとしない』ことだ。

そうすれば少なくとも、安全に生きることは出来るのだから。

じゃあ今俺がしていることは一体なんなのだろうか。

「はいおゆ〜〜!!これで私の3連勝〜〜!!」

「クソがあーっ!!ロケラン湧き位置陣取ってんじゃねえーっ!!」

メスガキ先輩と自宅でゲームやってる。

なんで？

「知らなあーい♡勝手に隅に逃げ込んだのはあんたでしょおー?ざあ  
こぎあこ♡黄金銃持っても何もできず死ぬのはどんな気持ちい?♡」  
「こんの……っ!!年の功もいい加減にしろよ……っ」  
「は?キレそう」

こうなつた経緯は覚えている。  
情けないことに完全に俺の不手際だ。

あれは昨晚先輩に飲み行くから付いてこいと言われサシで飲んで  
いた時のことだ。  
自宅からそう遠くない場所であつたため徒歩で到着、合流すること  
になつたはずだ。

『すみません、今の時間は未成年の方は入店をお断りしてまして……』  
『免許証です』

『えっ……しっ、失礼いたしました!お席ご案内しますっ!』  
『……おい何笑つてんのよ』  
『ぶっ……いえ、手慣れてんなあつて』  
『ぶっ飛ばすわよマジで??』

これが嫌で俺を誘つたらしいが、こんなん笑わない方が無理だろ。  
周りの客も(マジで!?)みたいな顔してんだぞ。  
むしろ笑わなきゃ不作法だろ常識的に考えて。

『何飲む?私ハイボール』

『オレンジサワーで』

『女子か』

『度数高いの飲めないだけっす』

レポート手伝ってくれたわけだし、飲みに行くくらいはいいかと糾  
されていた自覚はある。

容姿はどう考えてもメスガキのそれだが、なんだかんだ面倒見のい  
い先輩といった感じで、俺の警戒心はかなり低くなっていたのだろ  
う。

だが問題はここからだ。

『先輩の酒が飲めないってのお？ほら♡飲め♡飲め♡』

『ちょマジやめ……やめろオ！』

このメスガキ先輩、絡み酒な上にビツクリするほど酒癖が悪い。

身長差もあって無理に振りほどけば怪我をさせかねず、かと言って  
頼んだ酒を無駄にするのも行儀が悪い。

だが、どうせ明日は休みだし構やしないと馬鹿な飲み方をしてし  
まったのは自分だ。

急性アル中にならない程度ではあっただろうが、それでも記憶飛ば  
す程飲んでしまったのはあまりに後先考えなさすぎた。

『……ばっ……ちょ……うぶ……すぎた……？』

実際そこから前後の記憶がかなり朧気だ。

なにか大事なことを話したような気もするが、酔いでぐらつく視界  
と遠い耳、霞んだ記憶には何も残ってはいなかった。

気が付いた時には家に帰ってきていて、俺はベッドに寝かされてい  
た。

カーテンからは日差しが漏れており、つまり起きた時には既に朝  
だったことがうかがえる。

酷い頭痛の中必死に記憶の糸を辿ろうとし、寝室を出て自室に向か



うと……

『……あつ、起きたあ？もう10時よお？』

うわ出た。

なんでスト2やってんだこの幼女。

『勝手に借りてるわよお。あんた懐かしーハード持ってるのねえ。6  
4とかスーフアミなんて実家にしかないわ』

『……昨日、なにがありました』

『悪いと思っただけどあんたが酔いつぶれたから担いで送ったのよ。案  
内できない程潰れてなくてよかったわあホント。感謝しなさいねえ』

ケラケラ笑いながら昇竜を決める先輩。

今思い返すとなんだこの空間、マジで意味わかんね……

『……酔い潰したの先輩でしょ……頭痛え……』

『悪かったわね、久しぶりでペース考えてなかったわ。それと材料  
あったから味噌汁作つといたわよ。にしてもあんた、意外と冷蔵庫キ  
チツとしてんのね……』

そこから目が覚めるまで俺は休み、その間先輩は淡々とガン待ちソ  
ニブしていた。

CPU相手にそれ楽しい？

『すいません、先輩。随分ご迷惑をおかけしたみたいで……』

『私も勝手に家上がっちゃって悪かったわね。だからお互い様ってこ  
とで。それよかなんか対戦しましょ。勘取り戻したらやりたくなっ  
てきちやった』

『いいっすね。言っときますけど俺強いつすよ』

『ふうん、楽しみい♡』

そんな流れでゲームに興じているわけだが……

「空下上スマ空上落下空上空上ジャンB落下ジャン空上B……」

「ああー！即死コン完走させやがったツ!!あんたさてはルイージ使  
い慣れてんな!?」

「答える必要はない♡」

というかとんでもなくゲーム強いなこの人!?

目を覚ました時はもう終わりだア!と思っていたが、杞憂だったよ  
うだ。

普段の俺なら

(メスガキに助けられた……?そんなことが本当にあるのか……  
?)

と疑心暗鬼になっていたことだろう。

だがそうするには今の状況はあまりに楽しすぎた。

「ぶつぶ、俺強いっすよ(笑)。とんだ雑魚じゃなあ♡雑魚♡」

「くそっ、さつきまでバタ足コン決められて半泣きだったくせに……  
!」

「あーあー覚えてなーい!今感じている勝利こそが私の全てっ!!」

「更年期ですか?心配になります」

「ぶっ殺すわよ」

「すみませんでした」

情けないことに、昨晚からこの人の世話になりすぎた。

先輩は言動こそメスガキのそれだが、非常に面倒見のいい先輩だと

いうことがこの数日間によくわかった。

最近俺の友人達の言動が怪しかったこともあり、距離を置きがちになつていたことも拍車をかけていたのかもしれない。

誰を信じればいいのかも分からず、ただ逃げに徹していた日々にくうして訪れた安息。

多分ではあるが、俺はずっと気を張りつめていたのだろう。

「あれ、ホーミング弾ってどこに落ちてたっけ。なんか通れる壁みたいなのがこの辺に……」

「チャンキーでホーミング弾使うのはルールで禁止スよね」

「DK64はルール無用でしょ」

気の緩みも相まってか、ある疑念が俺の頭を過ぎる。

ひよつとして……先輩は……

『メスガキ』じゃ、ないのでは……？

ひつつつつつさしぶりに64とかGC触ったわあ！

いやこれめっちゃ楽しいわね！懐かしさ補正も相まって超テンション上がるう！

「ああ、ー!!ちよつとメテオフリッカー使うのやめなさいよっ！近づけないでしようがっ！」

「ラグナロク3rdなんか使ってるやつ近づける訳ねーでしょうが。恨むなら違法パーティーとか言った自分を恨んでくだっさい」  
「それを使わないのが暗黙の了解でもんでしようが……！」

会って数度の後輩ではあるが、こいつが中々にゲームが強くて楽しい。

置いてるハードも最高に私好みだしチョー最高！

「あつたまきた……アール3rd出すわ」

「ふぎけん……ッ！それを出したら……戦争だろうが……ッ！お互いにダウン取れないクソゲーしてえんですか……ッ!!」

「したい」

「んじや俺も2nd使お」

やってみるとこれが勝ったり負けたり、若干私が勝ち越し？くらい。

やっぱりゲームはこれくらいの接戦が最高に楽しいところあるわねっ！

「いやー！楽しいっ！地元のゲーセンで近所のガキ共泣かしてたこと思い出すわねえ」

「なんてことを……」

「絡まれたの私。アイム被害者。返り討ちにしてあげただけよ」

イキり散らしたガキ共を鉄拳でボコボコにするの最高に気持ちよかったけど。

多分あれが私にゲームの楽しさを目覚めさせた。

今はむしろ感謝していると言ってもいいわね。

「それに対戦ゲームは力こそが全て。たとえ身内でも私は全力で勝つわ」

「違いねえっすね」

私の友達こういうゲーマー少ないのよねえ。いや多くても困るん

だけどね？

ただ、たまーにこう、フラストレーションぶちまけながらやるゲームは格別というか……禁酒明けの飲酒的なね、良さがあるわけよ。

しかしこの後輩、二日間接してみても思ったけど解せない所がある。あれは昨晚の飲みのこと。ある程度酒も進んだ折、ふと気になって聞いたことがある。

『ねえ、あんたさ、私の存在がダメって言ってたわよね。あれどういう意味？』

その時、焼き魚を掴まんでいた後輩の目の色が変わったのを覚える。

酷く気分の悪そうな、まるで私を咎めるようなそんな目だった。

『なっ、なに？ やっぱ私なんかしてたっ？』

『……いえ、違います。すんません、ほんとに先輩は悪くないんです』

気にしないで忘れてください、とだけ言って後輩はまた魚を掴まみだした。

私はその時のこいつの目が忘れられなくて……

(よし、飲まして全部吐かせるか)

酒に任せることにした。

『……うぐう……ねむ、い……』

『……やばっ、ちよつと大丈夫？ 飲ませすぎたかも……？』

ぐでんぐでんにしてしまった。

マズいわね、これちゃんと帰れるかしら……？

『起きてるう？……ちよつとペース早すぎちゃったか』

『ううん……』

しかし、そんな時だったの。

こいつの本音がちよつとだけ見えたのは。

『たまあに……思うんすよ……。イカれてるのは、俺なんじゃねーかって……』

『……え？』

『でもさ……受け入れるのだけはできねえんだよ……。それだけは……ダメで……』

さつきまで私を責めるような目だったのに、今は藁にも縋る様な目で、それがあまりに印象深かった。

『俺、将来は、せんせーになりてえって、思ってた……』

『……今じゃ、もうなんにも、わかんなくて……』

『……助けて、くれ』

それだけ言い残したらうつぶせになって酔い潰れちゃった。

……後輩、思ってたよりなんか抱え込んでるっぽい？

「俺ここ好きなんですよね。レゲエっぽいラップ」

「カエル先生、リズム取んの楽しいわよねえ」

「ごことラストめっちゃ楽しいっす」

「I gotta believe  
僕ならできるさ！っていい言葉よねえ」

横に並んでゲームやってるこいつが、あんな深刻そうな顔したのが未だに信じられないわ。

でもよくよく見てみれば、今もこいつは私と話す時は目を合わせようとしないうとしない。

それに昨日担いで帰ってきたと言ったけど、驚くほど軽い身体だったのも気がかりね。

教師を目指してたこと、私と距離を取ろうとすること、異様に軽い身体。

一体なんの関係があるのかしらねえ……。

そんな時ふと唐突にゲームを止め、後輩がこちらを見やる。

「そーいや先輩、名前何て言うんですか」

「あれ、言ってなかったっけ？……言ってないわあ」

えっ、名前も言わずに連絡先だけ交換して飲みに行っただけでゲームしてたの私達っ!?

ちよーつと我ながら関係構築が早すぎた感あるわね!?

「……まあいつか。『一ノ瀬 いちのせ 愛佳 まなか』よ。漢数字の一にノ、瀬戸際の

瀬で一ノ瀬。愛するに佳境の佳で一ノ瀬 愛佳、よ」

「素敵な名前っすね」

「ん、ありがとう。私もこの名前好きだから嬉しいわ」

特に理由はないけど、私はこの名前が好き。  
本当に深い理由は無いんだけどね。

「あんたは？私もあんたの名前知らないわよ？」

「あっ……そっすね。俺は……」

……一瞬躊躇ったわね。

やっぱり何か、思う所でもあるのかしら。

「……志賀です、『志賀<sup>しが</sup>巧<sup>たくみ</sup>』。志に加賀岬の賀、技巧の巧で、志賀 巧」

「志賀、志賀ね。覚えてたわ。いい名前じゃない」

「あざす」

「……ふふっ」

「……ははっ」

なんだかお互いにおかしくなっちゃったみたい。

レポート手伝ったり、飲みに行ったり、楽しくゲームしたりしてるのに、お互いの名字すら知らなかったなんて。

「これからよろしくねえ」

「……こちらこそ」

それでも間違いなく、いい出会いだった。

そう思っ正しいわよね？



気分は天気引張られる

『敵を知り、己を知らば百戦危うからず』――

孫子の言葉で、敵と己のことをよく知ることによって勝利を確実なものにするという教訓だ。

この言葉に倣い、俺もいくつかの成人向け本からメスガキ物の作品を読んだことがある。

趣味ではない物を読むのは大変な苦痛を伴うが、やむを得ない。

これもメスガキを理解するためのコラテラルダメージに過ぎない。

自身の安全を得る為の、致し方ない犠牲だ。

しかし得たものとは言えば『どういった場所、シチュエーションが危険か』ということだけである。

もう知ってる。知りたくなかったよクソツタレエ……！

しかし同時に興味深いことも判明した。

メスガキ物同人におけるジャンルの一つに、受け責めの逆転――  
通称『分からせ』というジャンルが存在する。

平たく言えば男側がメスガキに立場や力量を『分からせる』というジャンルだそうだ。

すまねえ、メスガキ同人物はさっぱりなんだ。

以前まで……つまり世界が改変されたと思われる時点での『分からせ』物とそうでない物の割合。

それについては当時の俺も、流石に調べたことは無い。というか調べたことあるやついないだろ多分。

ただ、そう。

決して『少なくともなかった』という印象だ。

ネット通販サイトなどでも『見かけることはあつた』という程度だ。

ではこの世界ではどうか？

答えは『存在しない』。

この世界には『メスガキ分からせ物』というジャンルは存在しない。何故なら『メスガキに勝つ・分らせる』というイメージが存在しないからだ。

悲しきかな、この世界の男は絶対にメスガキには勝てないということだ。

お前ら頭どうかしてるぞ！

「——水が増える程、それに伴って体積が増える。これが比例するってこと。ここまで大丈夫？」

「ないです」

「ないよー」

喫茶店のテーブルを挟んで双子が返事を返す。

俺は今バイト先の一角を借り、二人の勉強を見ている。

そう、勉強を促し『理解らせて』いるのだ。

自分で言っていて気分が悪くなってきた。もう二度と使わねえぞ。

口調に違和感があるが、仕事中はともかく今はプライベートなんだから普段の口調で話せとは双子達の言だ。

二人の機嫌を損なうとオーナーから何言われるか分かんねえからな……。

「ぎつきの水槽から1分ごとに2リットル水が抜けていくとする。これも時間が増えて出ていく水の量が増えるから、時間に対して比例しているってことになる。どの式使ってるか分かるか？」

「ええつと、 $y = ax + x$ 、でいいんですか……？」

「芽衣ちゃん正解。んじゃ次の練習問題もやってみ」

というのも、今現在外は大雨で身動きが取れないのだ。

今日は一日晴れの予報であり、俺も双子達もまさか大雨が降るとは思っておらず、傘を持ってきていない。

店員を除くと店内には雨で立ち往生している何名かのお客さんと、シフトが上がったはいいものの帰れない俺、店に偶然足を運んでいた双子達しかいない。

お姉様方の困り顔は美しく目の保養になるが、それはそれとして身動きが取れないのは困る。

「しかし二人とも飲み込み早えなあ。それにここ、もうちよい先の授業でしょ？」

「まーね。でも宿題終わって暇だったしー」

「うん。……それにしても雨、止まないですね」

ふと外に目をやると、強い雨風が窓をバシバシと叩きつけている。

風が強く、横殴りの雨は傘を差しても意味が無さそうだ。

これのせいでかれこれ1時間、足止めを喰らっている。

その間どうしたものかと悩んでいた所この二人に見つかり、暇つぶしに勉強でも見ながら駄弁っているという訳だ。

こうして二人の勉強を見てみると昔を思い出す。

昔は皆で勉強をして、分からない所を教え合うのが好きだった。

特に教えるのが好きだった。

教えた知識を自分の糧として、勉強を楽しんでくれる姿を見ると、

たまらなく嬉しかった。

……もつとも、今じゃそれもあまり感じない。

この世界は、俺に夢も希望も与えてはくれなかった。

二人が問題に取り組み始めたのを見て、ふと何の気なしにぼうっと考え事をする。

先日の先輩に対し感じた印象……先輩はメスガキではないのでは？という認識についてだ。

呆けて考える事がこれなのはどうかと思う。

色々整理して考えてみたが、俺が一ノ瀬先輩をメスガキと判断したのは第一印象、つまりは容姿だ。

我ながら浅慮な考え方で辟易とするが、それが一番手っ取り早い判断方法だったことは否めない。

つか、初対面で「ざっこ♡単位取るのやめちゃえばあ？」だぞ？

普通にメスガキのそれだと思うだろ。

あれ素かよ紛らわしいにも程があんだろ。

これらのことを鑑みるに、先輩は『メスガキ』ではなく『合法ロリ』なのだ判断できる。

つまりメスガキでは、ない。頭がおかしくなりそうだ。

そして先輩の存在は俺に一つの仮説を与えた。

それはこの世界において『メスガキにならない子供がいるのではないか？』ということだ。

今までの俺なら馬鹿馬鹿しいと一笑に付していたことだろうが、先輩の存在はそれほどまでに衝撃的だったと言わざるを得ない。

いや、そもその前提が違う可能性もある。

この世界の法則が適用されない子供がいる、とか。  
メスガキとして育つ子供とそうでない子供、そこに何らかの要因があるのか？

しかしそうすると今まで出会って来た多くのメスガキ達はどのような？

あの子らの中にもそういう子供がいらないとは言い切れないのではないか？

現に目の前の双子だって……

「ねー芽衣、これで合ってる？」

「……すごいっ、全部合ってるよっ！」

「やったー」

……気が抜けるようなやりとりをしている。

この光景を見ていると、あの時見ていたのは何かの間違いだったんじゃないかと思えてくる。

……いや、待て

間違いだったんじゃないか？

もし、もしそうだとしたのなら。

この二人がメスガキではないとしたら。

俺にとって大きな『何か』が掴めるんじゃないか？

今あの時のことを聞き出すのも少々憚られる……が、聞けばあるいは、その何かが分かるかもしれない。

「なあ、芽衣ちゃん、美樹ちゃん」

「んー？」

「はい？」

「気分を悪くしたらごめん。少し聞きたいことがあるんだけど……」

振って湧いた楽しい勉強会、そんな中お兄さんが切り出したのは、私達が出会ったときの話だった。

「あたし達と出会ったときのこと？」

「ああ。もし話したくないなら構わねえんだ。ただ、今更だけどあの時のことが気になっちゃまって」

「私は大丈夫です……美樹は？」

お兄さんはバイト中ではないから、今は普段の口調に戻してくれている。

なんか男の人って感じしてちよっぴりドキドキする。

それにしても会ったときのこと、かあ。

私の中ではあの時のことは、私達が出会えた、思い出として覚えている。

……でも、美樹は大丈夫かな。

「うん、大丈夫。何でも聞いてー」

なんでもないように答えているけど、私は知ってるよ。

今もたまに、あの時のことを思い出して怖い思いをしてるんだって……

「そっか。……なら聞きたいんだけどさ、あの男と相對した時、どう思った？」

「えっ……それ、は……」

印象、つてことなのかな。

それは勿論、恐かった、けど……

けど、お兄さんはきつとそういうことを聞きたいんじゃないんだよね？

「……美樹？大丈夫？」

「……ごめん、芽衣からお願い」

「うん、わかった。……第一印象は、危なそう、とかそんな感じでした」

眼が血走ってて、お腹が空いた野良犬みたいなの。

手あたり次第に噛み付いてしまいそうなイメージを抱いた……と思う。

「あたしは、心底怖いと思った。体格差っていうの？これに襲われたら、きつと、助からないんだろうなって……」

「……」

「叶うならもう会いたくないよ」

お兄さんはじつと、目を閉じて話を聞いている、のかな。

と思った矢先、自分のこめかみを掴んですつごいしかめっ面……!?

「……マジか、マジかよ、マジなのか。そんなことあんのか……？」

よく分からないけど、悩んでいる……？

ううん、どつちかと言えば、難しい問題を解きかけているときのよ  
うな感じかな……？

「じゃあさ。……俺が現れた時、どう思った？」

「へえ？」

「ふえっ？」

お、思わず変な声が出ちゃった。  
でもなんでそんなことを……？

「印象つつーか……曖昧でわりい。けど、大事なことなんだ」

「それは……ねえ？」

「……うん」

私達の印象、それならもちろん……

「この人なら、きっと大丈夫って思えました」

「傍にいたいって思った。……変だよ、初対面なのに」

「強くて、温かくて……まるで、アニメに出てくるヒーローみたいでした」

「んふふつ、芽衣。多分私達、おんなじこと考えてる」

「ふふふつ、そうだね美樹」

「「かつこいい人だなあ、って思っていました」」

「……………あつはっはっはっ!!いやマジで!?そんなことあるっ!?!」

わ、笑ってる……っ!?

えっ、別におかしなこと言ってないよね……っ??



「な、何笑ってんのさ。事実だからしょうがないじゃん」

「あーっはっはっは……っ！いいやわりいわりい、二人の言葉を笑ったわけじゃねえんだ」

「じゃあ、どうして笑ったんですか……？」

そう言うとお兄さんは、んー……と目を瞑って首を傾げ、腕を組み、唸っている。

次に言う言葉を慎重に選んでいるみたいだった。

「なんて言やあいかな……。今まで悩んでたことがぜーんぶ嘘で間違いで、それを二人のお陰で気づけて……。そう、雲が晴れた、みたいな？」

「よ、よくわかんない……です」

「だよなあ」

まあそうだよな。とつぶやいてひとしきり落ち着いたみたいだった。

しかしその途端、背もたれに身を預けてぐったりしてしまった。

「しっかしまああれだなあ……」

「？ どうしたんですか？」

「生きててごめん……」

「お兄さん!!?」

どうして???

「ほんっっっつと俺ダメだわ……申し訳なさで死にてえよ……ちよっ

と死んでくるわ」

「ちよちよちよちよおにーさん!?なんで!?なんでそうなっちゃったのっ!?」

「そそそそそそうですよ!!思い直してえー!!」

ちよつとの気軽さで持ち出しちゃいけない選択肢持ち出してると!?

なんでこうなっちゃったの!?何がいけなかったのお!?

「俺、ダメなやつだな……何年こんな……ごめんな、二人とも……」

「全然いいから!!何がかはわかんないけどあたし達全然気にしてないからっ!!」

「そうですよっ!!気を取り直してくださいっ!!」

何が、何がお兄さんを苦しめてるの……!?

……そうだっ!

「……えいっ」

「ふえっ!?芽衣!?なんでおにーさんの隣に座るの!?!」

こっつ、こうしたら元気出るんじゃないかな!?!?

お兄さんみたいになっつ、ちゃんと目を見てっ!

伝えたいことをつ!伝えればっ!!

「わっ、私はっ、お兄さんに会えて良かったっ、ですっ!」

だ、だから……だから……??

私が、伝えたいことは……

「だから、し、死ぬとか……そんなこと言わないでください……っ」

「もつともつと、お兄さんと色んなお話、したいですから……」

あの日、私達を助けてくれた大切な人。  
ちゃんと恩を返せるまで……傍にいさせてほしいよ……

「……ハア……悪い、心配かけた。ありがとな」

そら、大丈夫だから戻りな、と元の席に座るよう促される。  
そう言うなら戻るけど、本当に大丈夫かな……？

「びっくりしたよほんと。なんで急に死ぬとか言い出すかなー」

「生き恥晒すなっつてうちの家訓だから……」

「おにーさんち死生観が戦国時代から進んでなかったりする？」

「分かる？実は俺んち元々忍者の家系だったらしくっつてさあ」

「嘘乙」

「おいどこでそんな言葉覚えてきた。俺がオーナーに怒られんだろ」

い、いいなあ。

お兄さんとああやってポンポンお話しできるの、美樹のすごい所だ  
と思う。

とつても羨ましい。引っ込み思案な私と違って、ほんとにすごい  
や。

……あ、いつの間にか外晴れてる。

よかったあ、きつとお兄さんの心が晴れたから……なんちゃって。

「はー安心した。でもこれで心置きなく……」

そう言ったところで、お店のドアが開く。

そこには……

「ここがあの男のバ先ねっ！」

「ばさき？ねっ！」

二人の……子供？

えっ、ふ、二人ともフリルすごい……！可愛いっ……っ！

「あれ、雛ちゃん。どうしてここに？それに……先輩。誘拐は犯罪っすよ」

「人間きの悪いこと言うのやめてくれるっ!?さつき話しかけられて仲良くなっただけよっ!」

「仲良くなったよっ！お兄さんのお仕事先がここって教えてくれたの！」

おにーさんの……知り合いみたい？

せ、先輩って言ってたけど……たぶん、あんまり私達と背が変わらない方の人……だよね？

「それにね、大人のレディーのなんたるかを教えてくれたのっ。見てみて、お姫様みたいっ！」

「雛ちゃん、そんな頭にデカいリボン二つも付けたレディーがいる訳ないでしょー？危ないから近づいちゃダメだぞお」

「なにその罵倒、あらゆる観点から私をバカにしすぎでしょ」

「そーなの？」

「今回はたまたま知り合いだから良かったけど……ほんとマジで不安になるわ雛ちゃん……」

むー……

なんか、お兄さん、楽しそう……

「つかそれあんたのお古でしょ。まさか持ってきて着替えさせたんですか？」

「……着たいって目がキラキラしてたから……家近かったしつい……」

「おねーさんのおうち凄いいんだって！お洋服がいっぱい、お人形さんとかもっ！今度遊びに行くんだー！」

「おー、よかつたなあ。でも初対面の人の家に行くのはとつてもまずいなー。……先輩、お縄つす」

「慈悲をつ！慈悲をちょうだいっ！」

「そこにならないならいいですね」

「そんなあつ！」

「ねー、芽衣」

「……なあに、美樹」

「楽しそーだね」

「……」

「あたし達も混ざりにいこーよ」

「！……うんっ」

なんか、ちよつともやつとしたけど。

うん、大丈夫。

「おにーさんやい。その人達はどなた？」

「私達もお話ししてみたい、です」

「ん？ああ、悪い。2人共俺の知り合いで……いや待て、まさか雛ちやんも……？」

これからもつと、お兄さんのこと教えてくださいな、なんて。

……今は恥ずかしくて言えないけど。

いつか面と向かって言えたら、いいなあ。

## 夏の魔物はいつもそこにいる

先日新たな知見を得たことにより、世界は広がった。

そう、メスガキではない女兒を確認したということに他ならない。

『メスガキではない女兒を確認した』という言葉で広がる知見、狂つてると思いませんか。

だがそんな知見でも、今の俺には極めて重要な情報なのは間違いない。

恐らく、あくまで恐らくだが、現在メスガキではないと判断しているのは4人。

『小野寺 雛』、『蜜川 美樹』、『蜜川 芽衣』、そして『一ノ瀬 愛佳』。

この4人だ。先輩は正直カウントしていいか悩むが……

今までの遭遇数から考えると、4人というのが多いのか少ないのかは判断に困る。

だが少なくとも、俺にとって重要な存在であることは間違いない。

あるいは、この世界の法則を解き明かすなんらかの鍵なのではないかと期待を抱いていた。

……が、考察はすぐに暗礁に乗り上げた。

というのも、この4人の共通点が全く分からない。

彼女らと出会ったのはそれぞれ、俺が中学生、大学生、つい最近とバラバラ。

年齢も小、中、大学生とバラつきが大きい。

性格も元気、大人しい、ダウンナー、あの先輩と個性豊か。

出会った場所も統一性が無い。

強いて挙げるなら『容姿が良く、外見が幼いこと』だが、これはこの世界では多くの女兒が該当する。

してしまふんだあ……

4人の共通点もそうだが『この4人とメスガキの違い』もこれに通じる。

違いと言えば……挑発的な行動を取らないことだろうか？

先輩は取るけど。

しかしそれは行動の違いであってメスガキかどうかの違いではない。

彼女らの違いは何か。そこにたどり着くには、未だ情報は足りていない。

「海行きてえっすね」

「行きましょっか」

たったこれだけのやり取りではあつた。

しかしこの夏の茹だるような暑さに、俺達の頭は限界まで熱されていた。

走る鉄の箱の中。ガタンゴトン、と線路が響く。

夏の暑さと海恋しさにいても立っても居られなくなった俺達は休日を合わせ、電車に乗って海へと向かっている。

並んで座っているのは半袖なのにスカートにフリルが山ほどついた黒口り服の女と、黒いチノパンに白いポロシャツのThe・大学生やってますという男。

車内に俺たち以外の乗客はいない。

しかし仮に、見知らぬ第三者がこの二人を見たらどう推測するのだろうか。

俺には考えもつかないしなるべく考えたくない。

つか先輩はゴスロリ脱げよ。命に関わんだろ流石に。

「そのフリル盛り見てるだけで暑いつすよ先輩」

「夏コーデだからいいでしょお別にいい。私は夏でもゴスロリ貫くわよ」

確かに先輩は半袖だが、それでも黒ロリイタは見てるだけで熱気がする。

それでもやめない先輩の拘り、素直に尊敬する。

頼むからやめてくれ。

「にしても海久しぶりーっ。楽しみーっ！」

「足パタパタして、はしたないっすよ。でも……そうっすね、確かに楽しみです」

メスガキではない、気楽に話せる相手を得た今、俺の心は安寧を得た……とはいかない。

結局この世界がメスガキ同人世界であることに変わりはない。

今だって、俺の警戒心は高まり続けている。

なぜか？

電車を利用する度に『奴ら』が現れるからだ。

そう、『電車』というシチュエーションはメスガキが極めて発生しやすい場所ということだ。

電車に乗ると『100%』、そう驚異の『100%』で目の前にミニ



スカートの子供が座る。

その目的は言うまでもないだろう。

釣られた大人（負け確）を無様屈服腰へコ犬にする為だ。

『おじさん今どこ見てたの〜？キツモ♡』

『みつ、見てないがっ!？』

『別に何とは言っていないけどお？慌てちゃってえ、すっごい怪しい人みたいだよお?』

『うっ……それは……その……』

こんなのが車内にポップする。

その後は1ペアになり電車を降りてどこかへ行くまでがセットだ。

俺のいる前でやらないでくれ……頼む……車内では静かに……

俺は基本的に寝たふりやスマホを見てやり過ぎすから目を合わせたことは一度も無い。

が、奴らが浮かべている表情、想像に難くない。

大げさにニヤつき、獲物が罠にかかるのを今か今かと楽しみにしているのさ。

『それが見えたら終わり』とはよく言ったものだ。

おもしろジャンルおすすめピエロとは恐怖の格が違う。

「たまには電車もいいわねえ。なんか新鮮で、ノスタルジックになっちゃいそう」

「子供料金先輩……」

「ストファの負けキャラみたいな顔にしてやろうか」

「すんません」

その時、ふと疑問に思った。

先輩はメスガキではないと思われるのは理解している。

じゃあ『この人がメスガキに会ったら』どんな対応をするんだ？

……いや、人の心配より、まずは自分の心配だな。  
今はまだ電車に乗り始めてすぐ。  
その内奴らは俺の目の前に現れるだろう。  
その時に備え、警戒は怠らないようにしなくては……

日差しが、強い。

燦々と、焼くような日差しが砂浜を照らす。  
久しぶりに見た海は、どこまでも青かった。

砂浜に思っていたより人は少なく、家族連れが何組か。

俺達のように友人同士で来る、という人はあまり見かけない。

シーズンはばっちりだと思いが、平日はそんなものだろう。

お互いに荷物を海の家のコインロッカーに預け、今は先輩の着替え待ち。

俺は元々着こんでいたから、荷物を預けて先に待っている。

だが、そんなことよりも俺を悩ませていることがある。

(一度も……メスガキと会わなかった……)

会わなかつた。

そう、電車というメスガキに最も近い場所で、一度もメスガキ同人展開と遭遇しなかつた。

(どうしてだ？こんなことは今まで一度もなかつた)

あれほどまでに怯え、恨んでいたと言ってもいいメスガキ。  
それに会わなかつたことで悩むとは、なんともおかしな事だ。

日差しの元考え事をするのも辛いが、やはり考えずにはいられない。

(……先輩がいるから、なのか？いや待て、決めつけるには早えか)

今までの違いはやはり、一ノ瀬先輩の有無。

ここから想定される条件はなんだ。

メスガキではない女兒といること？

あるいは異性といること？

ダメだ、異性と出かけた回数が少なすぎてなんのあてにもならない。悲しいぜ……

それからしばらく頭を捻るも、思い当たる節が先輩の同伴以外に思いつかない。

先輩に固有の因子があるのか、あるいは……

そうこうしている内に少し向こうから先輩が走ってくる。あつ、髪縛ってる。

遠目ではつきりしないが、黒いビキニにフリルをあしらったような感じか？

なんだ、随分ゆっくり走って……

「お待ちせえー。待ったあ？」

「ううん、今来たと……」

……は

え、待って

でかい

えっ、でかいッ

「？ どしたの？」

「あ、いやあ、なんでもないっす。ウツス」

考えが何も纏まらないし纏まるわけがねえ!!

こう、ぼよんって感じ。フリルビキニ越しの主張がととてもとても強い。見るからにでかい。

普段ゴスロリだからスタイルとか分かんなかったけどこんな凶悪なもん隠してたのか……ッ!?

まさか、先輩は『擬態型』で『危険な』ヤツだったのかッ!?

いやいやいやいや、明らかに身長と不釣り合いだろお!!

こういう時は素数を数えるんだろ。ギャレンになる為の基礎訓練だ……3!

「なーによお。可愛い先輩の水着よお?何か言うことあんじやないのお?」

「……ちよつと視界から外れてもらっていいっすか」

「泣くわよっ!?!ガチで泣くわよ私っ!?!」

お、落ち着け。落ち着け俺。

先輩をそういう目で見るなんてあり得ねえだろ常考。

考えてみる、俺は誰と結婚したいって言ってた?

それを考えてみれば自ずと……

二つ年上の ↓ 一つ年上 ○

おっぱいがデカイ ↓ デカイ ◎

タレ目 ↓ ややツリ目 △

ダウナー系 ↓ それ以上に気が合う ◎

お姉さん ↓ 背は低いが姉気質ではある ○

待ってくれ

……マジ?

なんか、後輩が急に黙っちゃった……

「ど、どしたの？顔赤くないっ？熱中症っ？」

「いえいえ気にしないでください。熱中症とか言わないでください。泳ぎ行くんすよね行きましょホラ」

いつ、いつになく押しが強いつ。

……まあ、何も無いならいいんだけど。

「まっ、いいか。よーし後輩。泳ぐわよっ」

「そーいや先輩、どんくらい泳げるんです？」

おっ、そこ聞いちゃう？

ふふん、これでも私はね……

「泳げない」

「えっ」

「25m泳ぎ切ったことない」

「……浮き輪借りてきますね」

「よろしくうっ！」

そいえば完全に言い忘れてたわね。

私、足のつくプール以外怖くて行けないの。

後輩もいるから今日は大丈夫かなーって……ごめんねっ。

小走りで海の家を駆けていく後輩をゆっくり歩きながら追いかける。

(分かってはいたけどねえ……)

細い。

手足はそうでもないけど、身体は全体的に細い。  
痩せぎす……とまではいかない、と思うけど。

(はあ、嫌な予想って当たるのねえ)

合法的に服を引っぺがすにはやはり海でしよと思ったはいいけど……余計なことしたかも。

でも水着着るのを嫌がってるわけじゃないし、コンプレックスとかそういうんじゃない感じ？

さつきからちよい挙動不審気味だけど、そっちは関係あるのかしら？

「せんぱーい、借りてきました……なにゆつくり歩いてんすか……」

「ごくろー♪」

「顔が良くてよかったっすね」

「えっ、顔良くなかったらどうなってたの私」

……思えば後輩、かなーりいい奴よね。

ゲーム強いし、趣味も会うし、気のいい奴だし。

さつきは痩せぎすって言ったけど……正直ちよつと……そういうの嫌いじゃないというかあ……

「あー……後輩に浮き輪引かれてたゆたう海はサイコーね……」

「さいですか。まあ、確かにいい景色ですけど」

「どこまでも海……綺麗……」

「いや語彙力」

……まずい、夏の魔物に心操られてる感あるわあ。

ちよつと話題変えよそうしましょ。

「ねえ後輩、ちよつと聞きたいんだけどー」

「ん？どしたんすか改まって。スリーサイズなら秘密っすよ」  
「誰が聞くか」

興味、ないことも、ないけど……

でも今はそれじゃなくてっ!!

「ねえ、私のこと好きい？」

「……えっ、なんすか急にマジで」

「いいから答えなさいよお。最近チャホヤされてないからそういう感情に飢えてんの」

「そんな雑な振りあんの？」

けけけ、精々悩んでひねり出した答えを笑ってやるわ……!

「んー……そっすねえー……」

「悩むってことは嫌いってことお？」

「いえ、どっちかと言えば好きっすね」

「そ、そう……」

け、結構ストレートに言うのねこいつ。

ちよつとビックリしちやっただじゃないの。

「ただ……」

「ただ？」

後輩は一呼吸おいて、しんみりとした口調でそう言った。

「……あんたとどう向き合ったらいいか、分かんねえ」

「…………向き合う?」

やっぱりこいつの言うことはよく分かんない。  
何か抱えてるってことは分かるけど、それを共有しようとはしないから。

でもああ、またそんな目をする。

あんたはたまに、すごく寂しそうな目、するのよね。

「色々あるんすよ。でも、そーだなあ…………」

「今まであった人人中じゃ、一番好きかもしんね」

「…………ツ!」

いつ、今、こいつっ!!

ニカツって!イケメンしかやっちゃいけない笑い方したっ!!  
か、顔に出てないわよね私ツ!?

一瞬トキめいちゃったとかなないからねツ!?

「まつ、まあ?私可愛いしい?性格最高だし!?当然よねえ!」

「なに急にキレてんすか、情緒不安定ですか?」

「はっ倒すわよっ!!」

「はいはい浮き輪の上で暴れないでくださいーい」

こっつ、この…………っ!

後輩が生意気言いおつてえ…………っ!!

見てなさい、帰りの電車じゃこうはいかないわよ…………っ!

「…………あつ、そうだ先輩。水着、すっげえ似合ってます」



「今っ!?!……誉め言葉なら貰っとくけど」

「可愛くてびっくりしました。見た時は思わずなんも言えなくなりま  
した」

「ほー……ん……中々に褒め殺すじゃない」

「思ったこと言ってるだけっすよ」

「そ、そう?……えへへ……」

……悪い気は、しないわねっ。

ま、なにはともあれ!

今日は楽しく遊び倒すわよーっ!

「んじゃ先輩。おやすみなさい」

「おっ、おやすみなさい……っ」

私、愛佳さん

今後輩と同じ旅館の、同じ部屋で寝てるの。

……どうしてこうなったっ!?!?

親との電話を人に聞かれるのなんか気恥ずかしい

私は考える。

あの後輩のちよつと変わった所を。

最近友達付き合いの始まった私の後輩。

名前は『志賀 巧』。歳は一つ違い。

大学近辺のアパートで一人暮らし。

散らかってはいないけど整つてもない。

でも男の一人暮らしっていうのは、こういうもんなのかも。

普段大学にいるときは一人で見かけのを見かける。

友達ということもあるそうだけど、最近事情があつて距離を取つて  
いる……らしい。

ゲームが私とタメ張れるくらい上手い。

ゲーセンより家ゲーが好きなタイプ。

ここは若干私と違う。

時折口の悪さが見えるけど、悪意で言うことはほとんどない。

悪態には本音が見えることもあるし、どちらかと言えば素が出てる  
というのが正しいのかも。

顔立ちは……結構いい、と思う。

これは私の好みもあるから何とも言えない。

そんな後輩だけど、時折変わった面を見せる。

まず、特定の場所を避けて生活している。

電車に乗りたがらなかつたり、わざと遠回りをしたり、理由もなく  
時間帯をずらして行動したり……

会いたくない人でもいるのかもしれない。

二つ目、あまり外に出たがらない。

とにかく極力外出を好まない。

家ゲー好きもここからきているのかも。

その癖、夜に飲みを誘うと結構来てくれるからよくわからない。

三つ目、これは変わった面とは違うし確信は無いけれど……

『私が一人にいる時しか出会えない』

……ような、気がする？

にしたってほんとにどうしてこうなったのっ!?

わっ、私ってそんな、出来たばかりの友達、それも男と外泊する  
ようなあれじゃないはずなんだけどっ!?

……ちよつと一から思い出してみましょう。

そう、あれはまだ泳ぎ終わってすぐの頃……

『泳ぎ疲れちゃったしお昼食べて午後はゆっくりしましょっか?』

『あんだ泳いでねーでしょ』

『てへっ』

そうそう、午後は帰りに色々見て回ろうと話していたのよね。

せっかくちよつと遠出したんだし、遊んじやおうってなってえ……

『ねえ、暇ならちよつと見て回りましょ?』

『あの、先輩引っ張ってたからすっげえ疲れてんすけど』

『だから?』

『……うす』

後輩も快く引き受けてくれたのよね。

それでまずはお昼食べに行つて。

『海近くの市場で海鮮食べるのさ……なんていうか、あれよねえ』

『なんで俺が海鮮丼食ってる時に余計なこと言うんすか?』

『新鮮で美味しそうだなあつてえ♡』

『ここまで食欲削いだのもはや罪だろ』

うん、楽しく話せたわね。

我ながらベストコミュニケーション。

それからはぐーぜん見つけたゲーセン入つてえー……

『式寺あるじゃん!やりましょ!』

『おつ、いつすねえ。んじやスコア負けた方罰ゲームで』

『言つとくけど私これ得意よお?だいじょうぶう?泣いちやわない?』

『お手柔らかにおねがいしやーつす。んじや……仕組太陽で』

『ああああ!なんつであんたそんな上手いのよっ!!』

『先輩どんな気持ちつすか?自信満々で挑んでスコア差ついてますけどどんな気持ち?ねえどんな気持ち?』

『ゲーセンニカップルデクンナヨ…』

『アレカップルカ?シンチヨウサヤバクナイ?』

『ノンノン』

『ジブンガタイヨウノナカニハイッテイクンダナア』

『クツソ、負けるもんですか……ッ！次はエレクリよお！後ろのベガ立ち連中ごとド肝抜いてやるわあッ!!』

『やるだけ無駄だって教えてやりますよ』

『ぬかせえ!』

『エクセリオン、エクセリオンの続編ってなんだっけなあ……』

『エクセライザーよ。縦スクSTGの一般常識でしょうが』

『STGやんねえからさっぱり分かんねっす』

『カップルデQMAクンナヨ……』

『ナンデヒザノアイダニスワツテンノ??』

『ガメンミヤスイカラダッテ』

『シニテエ……』

ギャラリー含めめっちゃ盛り上がったわねえ。

結局あいつに勝ち越されたけど、まあ次勝てばいいわねっ。

それで、二人でプリ撮ったら服見に行きたくなっちゃってえ……

『先輩マジで勘弁してください俺外で待ちますんで』

『いいから付き合いなさあい？男目線で意見して私の可愛さを褒めて』

♡

『褒めるのが確定した意見は意見とは言わねえただの自作自演だ離せえー!』

『たまには普通の私服も見ておこーっとなっ!』

『どお?』

『フリルが多い服しか着れない縛り人生だったりします?』

『感想を言え感想をお!』

『背が低い』

『背は関係ねえでしょうがぁー!!』

『……ん、まあ、可愛いと思います。ちよいフリルが多いとは思いますが』

『そう?ふふん、まあ当然だけどねっ!』

『……まあ……ちよつと線が出すぎじゃねえかなって……思わなくも……』

『え?なに?』

『うるせえ子供着てろ』

『どうしてそういうこと言うのおっ!!』

たまには普通の服を見に行くのも楽しいわよね。

まあほとんど着ないから買ってもタンスの肥やしなのが悲しい所よね……

そういえばなんであいつ逆切れしたの?

……で、確かその後……

『んー、結構いい時間だし。そろそろ帰りましょっかー』

『先輩』

『なに?』

『温泉とか行きたくないっすか』

『めっちゃ行きたい』

そうそう、海上がってから潮の感じしてたから温泉行きたいなーって思ってたのよね。

でも流石に時間もあれだし泊まりはなーって……

『んー、でも泊まりになっちゃうでしょ？流石にそれはねえ』

『……先輩』

『んー？どしたの——』

『もうちよつとだけ、一緒にいたいんですけど……ダメっすか……？』

『……………ほえ』

そうそう、ちよつとバツの悪そうな顔もかわいいなって思っ……

……そっからの記憶が無いんだけどおっ!!??

えっ、うそっ、私私どんな顔してたの私!!

ぽーつとしてたの!?!ねえ!!満更でもないって顔しちやっ……  
!?

っていうかなんでホイホイついて来ちやっ……たのよ!?

男なんて皆薄皮一枚?ぎ取れば狼っ!

そんな危険なことをどうして私は乙女面して進んでしちやっ……  
てん  
のよお!!

「今日はすみません、わがままに付き合ってもらっちゃって」

「へっ、い、いやー別にいいのよっ!?!先輩だしっ!」

お、おおおおお落ち着きなさい私。

BE COOL 私は冷静よ。

ひとまず今の状況を整理しましょう。

「それにしてもいい湯でした。海から上がった後だからってのもある

でしょうが、格別でしたねえ」

「そう、ね？すごく良かった、と思う……」

「湯上りご膳、すっげえ美味かったなあ……また来てえや」

そう、今は温泉も入り終わって、夕飯も食べて、お布団敷いて寝ましようって段階。

後輩は隣に布団敷いてる。

つまり、一つ年下の顔が良くて仲のいい男と同じ部屋で寝泊まりしている……ってワケ。

あれ、これって結構ヤバイ？

私、食べられちゃう的なあれなの？

いいいいいいいやいや、後輩はそういうんじゃないから！

そういう目で見えるタイプのあれじゃないから！

で、でも見た目は？まあ？結構タイプだけど？

私そんな出会ってすぐの男に体許するような軽い女じゃないしい？

……で、でも、後輩が、その、どうしても言うなら……考えて、あげなくも……

「それじゃ、電気消しますよー」

「あつ、うん」

「んじゃ先輩、おやすみなさい」

「おっ、おやすみなさい……」

言うや否や後輩、布団に潜り込んでしまった。

「……」

……えっ、なにこれ。



「……………」

多分、体感30分くらい経ったわね。

……いや眠れるわけくないっ!?

年頃の男女が一緒の部屋でっ、隣で寝ててっ、そんなっ!!

普通なくないっ!?! いろんな意味でっ!! ねえ!?

つか後輩も後輩でなんなのっ!?

あんな犬みたいな顔で……このっ、私が犬好きでよかったわねっ!?

後輩も後輩で動く音すら聞こえないし、ほんとこの……後輩い!!

「……ん」

あ、後輩が起きた音がする。

窓の開く音……外のテラスに行ったのかしら?

「……もしもし。久しぶり」

あっ、電話しにいったのね。

……これ聞いちやまずいかしら。

かといっって耳を塞ぐようなことしたらなんか気い使わせちゃうかもだし……どうしたら!

「いや1時だったってどうせお袋起きてるだろ。親父もそこにいんだろ?」

親御さんとの電話かあ……。

いやこれほんとどうすんのが正解!?

だ、誰か助けてよお!?

……お母さん、かあ。

仲良さそうで、ちよつと、羨ましいな。

「ん、こつちは元気でやってる。お袋は自分のことを……つていらねえ心配か」

「心配いらねって。親父にもそう言っついて。……いや酒飲んでるなら後で。泣き上戸の相手すんの大変っしょ」

「あ？いや普通に飯食ってるわ。バリバリ食ってる。最近は調子いいだわ」

家族大事にしてんのねえ。声色で分かるわあ。

……ちよつと待って『最近』調子いい？

調子よくなったのが、最近、つてことなの？

「なんでつて……なんとなく？……いや秒で当てんなよ。なんで電話かけた理由が一発で分かんだよ」

「当たってっけど。……うん、最近、結構いいことあった」

……ひよ、ひよつとしてだけど。

その『結構いいこと』って、私のこと……だったりして。

ちよ、ちよつと凶々しいっ？

「別に女じゃ……いや女だけでも。違うから、そういう意味じゃねえから。おい親父に言うなマジでやめて」

ほっ、ほんとに私っ!?

でもでもっ、最近できた女の友達って私……いやどうなんだろうっ!?  
これで違ったら恥ずかしすぎんっ!?

「……そつちは、まだだ。あれから何も変わってない」

「でも、変わるかもしれないねえ。ようやく、ようやく糸口っぽいもんが見  
つかった」

「心配かけてる。……ん、大丈夫。じゃあ、また」

ええええええ!!うそおーっ!?

え、なに? 私知らない間に結構好感度稼いじやっつた感じっ?

じゃ、じゃあ!?!後輩はご両親に私の存在を匂わせてる……っつてコト  
!?

ゆくゆくはご紹介……っつてコトお!?

「……先輩、なに布団で顔覆って足バタバタしてんすか」

「ぴえああっ!?!おっ、起きてたのねっ!?!」

「今更? いや、まあ別になんも聞かねえけど……てかぴえあつてなん  
すか。萌えキャラかよ」

「う、うっさいっ! 私はいっだつて可愛いし萌えキャラだけどおっ!?!」

「萌えキャラが誉め言葉かは時と場合に寄らね?」

びびびびびびっくりしたっ!!

心臓止まるかと思っつたっ!!

えっ、いつからっ!?!いつからっ!?!?

「いやなんでそんな顔赤えんすか。」

「お酒飲んじやったからっ!?!」

「俺に聞かれても……落ち着きたまえ」

「凄く落ち着いた」

「マジかよあんたネ実も知ってんのかよ」

よ、よし。ひとまず冷静になれたわ。サンキューリユースン。

だからどうしたってわけでもないけど……冷静になれたわねっ!

「……なあ、先輩さあ」

「はいっ!？」

「なんで敬語。……先輩さ、消失、読んだことある？」

「消失? って、あの消失う? あるけど」

後輩が何を伝えたいのかよくわからない……? :

そりゃ、消失はゆきちゃんも含めて読んだけど。

「実は俺がキヨンと同じ立場で、ある日目が覚めたら世界がおかしくなってた……って言ったたら、信じます? :」

「……ええー。急に言われてもお。……まあ、そうねえ」

うーん? : ちよつと何言ってるかわかんない。

でも、これだけは聞いておきたい。

「あんたがキヨンなら、私は長門っ? : それとも鶴屋さんっ? :」

「いいとこ谷口」

「ハルヒの学校教えてフェードアウトじゃんっ!!」

ちくしよーっ!! : なんでよお! ?

真面目な質問しただけじゃんっ! ?

「……ハア、まあいいや。大したことじゃねーし、忘れてくらっさい」  
「異世界に転移したってカミングアウトは大したことだと思っけど……」

「冗談っすよ、異世界人ジョーク。そいじゃ、明日も早いですし寝ましよー」

「……うん。喉乾いた。お水飲も……」

でも、ちよつと心配。

この後輩、あんまり寂しいとか苦しいとか言わなさそうだから……

『もうちよつとだけ、一緒にいたいんすけど……ダメつすか……？』

何ていうのかな、放っておけないというか。

ほつといたらそのまま、足元から崩れていつちやうんじやないかつて思つちやつて。

それくらいこの後輩は、見ていて不安になつちやう。

「そいじや改めて、おやすみなさーい」

「……ねえ、志賀。ちよつとそこに座つて」

「なんすか急に。もう寝てえんすけど」

だから、今私にできることは、これくらい。

……ぷつ、ちよつと頭撫でただけてるだけなのに、変な顔。

「辛い事とか苦しい事とかあつたら、言いなさいね。ちゃんと助けてあげるから」

「……私はあなたの先輩で、友達だもん」

抱えた重そうなものが、少しでも楽になりますように。

「……私はあなたの先輩で、友達だもん」

ごめん、なんの話???

えっ、待って？マジでなんの話だよ!?

くる、え？苦しい事？別に何も苦しくねえけど!?

「えへへ……いい子いい子……♡」

「……」

わ、悪い気はしねえけど……けどそんなこと言ってらんねえ。

親父、助けて!!

このままだと俺、先輩を好きになっちまう!!

『……』

『いんじゃない?』

いいわけあるか脳内クソ親父熟考してそれが役に立たねえなあ!!

つか何より視線が……!!しゃがんで頭下げてっから目線が、先輩の、先輩のたわわに目があ!!

「んふふふ。後輩い、撫で心地がいいわあ♡」

「……」

こ、言葉が出ねえ……酔ってんのかこのチビ先輩……

……あ?待て、そいやさつきなんか飲んでたな。

近くのテーブルの上……あれ俺がテラスで一人チビチビ飲もうと思ってたやつじゃねえかつ!!

しかも結構度数高めの日本酒ツ。ちくしょーっ、ちよつと見栄張って月見酒ーとか思った俺がバカだったってのか……っ!

「はいはい、そろそろ寝ましよーね。明日午前中には帰るんすからね」

「ふふっ、はいはい。おやすみっ」

なんでこの状況でもちよつと上からなんだよ泥酔デカ幼女。  
どこがデカいかは言わねえけど。

俺が見つけた『糸口』。

それは、今俺が置かれている状況への打開策になるかも知れねえ。

今日先輩と出かけて分かったが、まったくメスガキとエンカウント  
しなかった。

そう、一日通して一度もだ。

これはもはや天文学的確率を超越している。

こんなにも楽しい日々が送れると思わず、つい名残惜しさから先輩  
を引き止めてしまうくらいには信じられなかった。

だってメスガキが現れなかったんだぞッ  
!!??

離れたくないじゃんッ!!

……それはさておき。

俺は今日の結果に一つの光明を見た。

その検証の為に、明日からしばらく様子を見る必要があるだろう。

そして、その結果次第で、俺は行動に出ようと思う。

結果次第ではともすれば、俺は……

俺は、この世界から解放されるかもしれない。



やり込んだ対戦ゲームは有利取りやすい

先輩との一日外出からすぐ、俺は周辺地域を改めて出歩いた。俺が抱いた疑念、それを確信とするために。

その結果、大きな、大きすぎる成果を得た。

メスガキの出現ポイントにはある種の法則性がある。

電車、駅構内、公園、ゲーセン、路地裏、ファミレス、通学路……挙げだせばキリが無いが、とにかくそういったシチュエーションに遭遇しやすい場所が存在する。

俺はその全てに赴いた。

その結果どうであったか。

一度も、遭遇しなかった。

そうッ！誰もッ！メスガキと遭遇しなかったのであるッ！

一週間過ぎたら普通に遭遇した。

絶望した。

感動を返せ。

だがこれで一つの予想が俺の中で立てられた。

俺は今まで『メスガキ物同人世界という「パラレルワールド」にいる』と思っていた。

だが、先輩との行動や蜜川姉妹との遭遇から鑑みるにそれは違うのではないか？

つまり俺は『平時とは違うチャンネルにいて、特定の人といるときだけ元のチャンネルへ戻っている』のではないか？

すばせかのRGとUGの関係に近いと思う。

同じ場所だけど自分がいる位相だけが違うというものだ。

テレビ的に考えるなら、本来はチャンネルAの番組に出るはずだったのに、何かの間違いでチャンネルBの番組に出ている。

しかしAに出ている人間と関わる時だけAに出られる。

しかしそこから離れるとまたチャンネルBに戻っている、ということ。

俺だけメスガキのチャンネルとか世界は俺に何か恨みでもあんのか？

思えば、雛ちゃんや蜜川姉妹と出会った日、その後のメスガキ事象との遭遇率は極端に低かったようにも思える。

これまではその三人がメスガキだと思っていたから全く気付かなかった。恥ずかしい限りだ。

さらに言うなら、蜜川姉妹の大人(犬)遭遇事件、あれは恐らくチャンネルの混線によるものではないだろうか。

本来Bから出られない大人(犬)がそこにいたのは、それが自然に思える。

Aにいる蜜川姉妹、Bにいる俺、そこに発生したメスガキ事象。

これらが呼び水となり、A側に大人(犬)が現れてしまい、俺がバツグをぶつけた衝撃で自我を取り戻した、という推測だ。

あの大人がB側で発生した大人(犬)なのか、A側に元々存在した大人(人)なのかは定かではないが……そこは今考えても分からないことだ。

先輩との外出経験から鑑みるに、過ごした時間に応じてAに戻って来れる時間も長引くのかもしれない。

一日一緒にいて七日間、俺は元のチャンネルへ帰って来れるとして

……

俺が今二十歳で、日本人の平均寿命が大体80歳。

残り60年を日数に換算すると21900日。

これを7で割るとおよそ3129日。

つまり俺は先輩や雛ちゃん、蜜川姉妹と生涯の内、3129日分の時間一緒にいれば一生この世界にいらなくて済むということだ。

……ダメだ、どう考えても現実的ではない。

そもそも9年近い時間を彼女らと過ごすなど許されるはずもない。

4人の内複数人いた時日数は人数分も加算されるのか？という希望的観測もあるにはある。

が、そもそも一日というのも泊りがけでの話だ。

先輩はともかく、自らの保身の為に小中学生の子達と寝泊まりなどそれこそ本末転倒。

というかキツすぎんだろ。倫理的に、良識的に。

かといって一日一時間誰かに会えたとしても、とてもじゃないがこの時間は埋まらない。

数分、数十分会えたとして、じゃあどうやってそれをカウントし続ける？

そもそも、これは根本的な解決にはならない。

どこまでも時間を稼いだ結果、寿命まで逃げ切っているというだけに過ぎない。

もっと根本的な、このチャンネルから抜け出す方法というのはないのか。

……いや、考え方を変えよう。  
そもそも足がかりだつてなかった今の状況に降つて湧いた僥倖。  
一時でも安息を得られたと安堵するべきだ。

俺は未だ、この世界から逃げられない。

「あれ!? ひつじやーいってこんな難しかったっけっ!？」

「想像の三倍くらい羊動きますよねえそれ」

「ああああ!! 狼っ!! お前え!! 狼い!!」

「綺麗に柵開けて羊逃がしやがった……。先輩羊に嫌われすぎじゃね  
?」

「もこもこ畜生風情が私に楯突くっていうのお!？」

「もこもこ畜生で。かわいいかよ」

自宅。

最近休日になるとレトロゲーに目がない先輩が入り浸るようになつた。

流石に家の中では利便性に欠けると思ったのか、今はかなりフリルが少なく、それでいて可憐なゴシックカラーなワンピースを着ている。

先日買った一着のようで、かなりのお気に入りだそうだ。

……いやおかしくね？

一人暮らしの男子大学生の家に休日入り浸る先輩の貞操観念どうなつてんの？

床にクッションも敷いてるし座椅子もあるのに、何故か先輩は俺のベッドに腰かけている。

「無防備というか警戒心が無いというか……」

確かに休日はレポート書く以外に用事も無いし、何より先輩との接触時間を得ることも出来て文句などない。

それはそれとして俺の精神に大変よろしくないが。

しかも先輩が帰った後、なんか部屋からいいにおいがする。

そう思ってしまう自分のキモさがつらい。かなりつらい。

「赤上げてっ！白上げ……ないっ。赤下げないで白上げ……あああ  
！」

「あれ、旗上げ？羊クリアできたんすか？」

「羊はクリアできたわ……。旗上げがなんかクリアできない……」

「あー……代わりますか？」

「おねがーい」

レポート作成中だったが中断。

机から振り向いた途端、先輩にコントローラーを放られる。

もうちよつと大事に扱ってくんねえかなあ。

「ねー後輩いー」

「はいはいなんでしょ先輩」

あれ、旗上げてってこんなに早かったっけ。

クリアは出来そうだけど、なんかちよつと、エモさあるな。

「最近ちよいちよい敬語取れるわよね」

「……嫌でした？」

「ぜーんぜん。むしろそっちのがいいわあ」

「はあ、そっすか」

先輩の距離感に友人のそれより近い。  
つい敬語が取れてしまった。  
ちよつと近すぎてどうかと思う。

「ほいできました。21番だからこれで斜め揃いましたね」

「さすががこうはあい！頼りになるう〜」

「どーもっす。ほい」

「さんきゅー」

またレポートに向き合う。

悲しいけど、これ大学生の義務なのよね！

しかし参った。

レポートの進みが悪い。

隣で楽しそうにゲームやってんのもあれだけど、レポートで詰まってる。

教授が講義中に言ったことがどこにも載っていない。

これだとしてもレポートの出来がよろしくない。

「んー？なに、どつか詰まってるの？」

座ってる俺の真後ろから先輩が声をかける。

そのちつちやい手を肩に置くんじやない、好きになっちゃうだろ。

……いや、ちよ、近くね？

いや近すぎるだろツ！肩に顎乗っかるくらい近いよこれ!?

じゃ、じゃあ左背中の中のやーらかいのはあれか。

ふよんって、そんな漫画みたいなことあるか？

「どいどい……つと、ああその教科ねえ」

あんのかよお……!!  
ほんと先輩もうちよつと距離取つてえ……!!

「こ、ここのなんすけど。講義中に教授の言つてたこと、参考書に載つてねえんすよ」

「どれどれ。……ほーん、ここね。この解説、確か教授の出してる本には書いてないわよ」

「えっ?マジです?」

「マジマジ。確か……あつ、そつち。その本。それに書いてあるからそつち見なさい」

「別科目の本じゃん……」

「よくあるよくある。多角的に捉えなさい」

クスクスと笑う先輩はこういう時すつげえ頼りになる。

縦のつながりが薄い俺にとってこれほどまでにありがたい人もいない。

ただほんとと距離近いの勘弁してほしい。

背中の熱源が俺の心臓を爆走させてほんとキツイ。

あつ、漸く離れてくれた。

めちやめちや焦つたし、何より先輩がその辺気にしてなさそうなのがまたよお……

「友達に教えてもらつたりしないのお?あつ……ごめん」

「ガチトーンやめろ。今ちよつと微妙な感じなんで会いたくないんですよ。こないだ言つたでしょ」

……そう言えば、友人達はどうなつたんだろうか。

妙に理解らせを擦ってくるのに嫌気が差して連絡しなくなつたが、今は大丈夫なんだろうか。

ひよつとして、今ならきつと前みたい……

「? どしたの?」

「あいや、なんでも、ねつすけど……」

あ、なんだ、今、すつげえいやな感じした。  
言語化できない何か、すつげえ不快な気分。

「なんか、あんたには会わせたくねえな、つて」

「へ?なんでえ?いやまあ会おうって気は元々ないけどお」

これあれだ、先輩とあいつら合わせんのすつげえ嫌だな。

なんでだ、なんでか分かんねえけどあいつらと先輩会うのがすげえ嫌だ。

「ちよ、ちよつと、なに怒ってるのお?友達煽りしたことなら謝るわよお……」

「怒つ、てはいない、つす……よ?多分、そう、多分……」

「絶対怒ってるやつじゃん!!」

分からん、なんも分からん。

なんで俺はこんな、おかしくなってるんだ?

……不安、なのか?

それにしてもイライラするような、焦った時みたいな感じがして

……

この感情の名前が、分かんねえ。



「……っし、レポートひと段落しましたし、俺もなんかゲームすつか。なんかあります?」

「おっ、Xiやる?」

「まーた古いの持ち出したな……。あつ、リモダンあるじゃないっすか。こいつで対戦しましょ」

「それも大概古いでしょ。私のトルーンズに震えなさあい?」

後輩のレポートがひと段落し、私の隣に腰かける。

ここのまでやってるゲームが被ってるとやりがいがあるわねえ。

「ちよちよちよ、なにそれなにそれっ?! 1ダメも与えられず負けたんですけどお!」

「ディオニシオス、二連パンチと横フックに怯みがあるんすよ。蹴りはガレス並に早い、横フック連発できる、咆哮も構えがクソ早いで身内対戦じゃ禁止カードでした。なんも言わねーからいいのかなと思っ……」

「いやいやいや横向きでビームスかるの細すぎでしょお……!!」

「こいつだけ人造人間らしいし、この時期のゲームは大味っすよねえ……。強さとか設定とか」

……前から思っていたけど、この後輩の距離感おかしくないっ!?

床にクッションとかあるのに、わざわざ私の隣に!

しかも肩が触れそうなくらい近いところによおっ!?

「くそっ、思ったより私のやりこみ度が浅かったあ……」

「流石禁止カード。トルーンズも強ロボなのは間違いないっすけどねー」

「他に何かゲームないかしら……。私が優位に立てて一方的にボコせるゲーム……」

「ゲームの選び方が不純極まりねえ」

ほんつとさあ、この緊張に耐えながらゲームしてる私を誰か褒めて欲しいくらいよマジで。

……いや、別に、緊張してるとかそういうんじゃないけどね？意識してるとかそういうんじゃないけどねえ!?

「つと、お茶切れた。ちょっと取ってきてきます」

「はぁーい、いってらー」

「麦茶残ってたかなー」

キッチンに向けて歩く後輩を見やりつつ、なんとなしにベッドに横たわる。

お、後輩結構いい枕使ってるわね。

……こうして横になってみると、色々意識しちゃうわね……

そつかあ、同い年くらいの男ってこういう匂いなんだ。

……私、ひよつとしてかなーり変態的なことをしている？

いやいや、セーフセーフ。

まだベッドに寝っ転がってるだけだからセーフ。

ついでに匂いとか偶然嗅いじやっただけだから。バレてないから。

……い、一回だけ、一回深呼吸するだけだから……  
すうーつてするだけだから……!!

……あー……これヤバいわ……  
温かさとか匂いとか、安心する……  
癖になりそおー……

「ほんつつつと先輩さあ……!!」

ついでに茶菓子でも持ってくかーと少し待たせたら先輩が寝ている。

俺のベッドで。

いやありえなくねえ!?

一人暮らしの男の家で寝てるって、無防備ってレベルじゃねーぞっ!

まじでR指定漫画の導入じゃねえんだからさあ……!!

「……ツハアー……」

すうすうと眠る先輩に、ひとまずタオルケットをかけておく。せつかく遊びに来てくれたのに、風邪でも引かれたらことだ。クーラーもついてるしな。

……これは、俺の邪推なのか。

眠る先輩が、枕に顔埋めてるように見えてすっげえ恥ずかしい。

「……すう……」

「……ああああくそおお……先輩い……」

恥ずかしさとむず痒さでどうにかなりそうだクソお……っ。

ひとまず寝てる先輩を背後に、レポートの文字数を増やす作業に取り掛かる。

ゲームしてもいいけど騒いで先輩を起こすのもあれだしな。

……先輩が帰った後、横になろうとか考えてねえから。

考えてねえっいたらねえんだ。集中してレポート終わらせねえと。

「んう……」

やめる悩ましい声を出すなあ！

マジで気が狂いそうになるわこんなんツ！！

寝返りを打ったのか、先輩は横向きから仰向けになっていた。

俺はそれを見るべきじゃなかった。

先輩が寝息を起こす度に上下する胸が、何故か俺に罪悪感を抱かせる。

なんでだろう、悪いものを見ているような……

これが背徳感、なのか。

あんまり知りたくなかった。

よりにもよって先輩でかよお……！！

ええい集中ツ！

ともかくにもレポート終わらせなきゃ遊ぶもクソも無いんだっつうの！

いつか、俺が元に戻れたら。

親父とお袋にも、ちゃんと紹介しねえとだよなあ。

.

## 遊園地で大人ぶりたいたい子供心

写真に写る家族だけが、私の覚えている笑顔で。  
次にみんなと話す時、笑顔でいられる自信なんてなかった。

でもね、ようやく思い出せたの。

二人がいてくれたから。

「雛ちゃん、こっち行こっちー!」

「行く行くー!」

「ああほら走らない走らない。人に当たったら危ねーでしょ。……先輩も」

「ごめんなさい」

ここは遊園地。

俺達は今、なんともおかしな組み合わせで遊びに来ている。  
なんでこうなったんだっけなあ……

「申し訳ありません、当アトラクションは小学生の方は搭乗が出来な

くて……」

「がーん……」

「だっ、大丈夫よ雛ちゃんっ！他にもいろんなのあるんだからねっ!」

「申し訳ありません、その、お連れ様の方も……」

「は？私に言ってるの？キレたわ」

ああもう問題起こすまでが早えんだよっ！

おちおち考え事もしてらんねえじゃねえか！

「あーすみません！ほら雛ちゃん行こうぜ。先輩なにメンチ切ってる  
すか早く列離れて！」

「ブーブー」

可愛げのある（諸説あり）ブーイングは無視。

くそっ、こんなことになるんなら子守なんて引き受けるんじゃないな  
かったぜほんと……

「じゃああれっ！あれ乗ろっ！」

「あら、いいじゃないコーヒーカップ！ほら行くわよ後輩っ！」

「はいはい。元気っすねえ……」

小学生女子と身長小学生のタフネスには驚いてばかりだ。

遊園地、それも人気のテーマパークともなれば、二人のテンション  
が高いのも分らないでもない。

かく言う俺もかなーり楽しみにしていた。

それが今や、二人の子守だ。

ちよつと目を離せば凄く速さで傍を離れ、興味の赴くまま縦横無尽  
に走り回る。

本人達は楽しいだろうが、俺からしたら気が気ではない。

「はーやーくうー！」

「はいはい分かった分かった、そんな手え引つ張らんくても行くって」「私が繋ぎたいのー!」

「……ふふ、つたく、しょうがねえなあ」

世界にフィルターがかかっているやないと、こどもも安心できるものなのだろうか。

偏見をなくして雛ちゃんを見ればなんのことはない、ただの寂しがりやで、少しおてんばな女の子じゃあないか。

子供って、本当はこんなにかわいもんなんだよな。

無邪気で、素直で、なんの屈託もなく笑ってさ。

だから俺は、そんな子供達の為になにかしてやりたくて……

「はいっ!お姉ちゃんはこっちっ!」

「あら、手え繋いでくれるのお?」

「お兄さんはこっち!」

「へいへい」

左手に俺、右手に先輩を捕まえて笑う雛ちゃんは本当に楽しそう  
だ。

表情、発言、行動、全部を使ってそれを教えてくれている。

「先輩」

「んー?どうしたの?」

ああ、先輩、そんな優しい顔しちゃってまあ。

俺も人のこと言えた顔じゃねえだろうけどさあ。

「なんかいいっすね、ここのまの。幸せって感じ、しません?」

ああ世界。

一秒でも遠くまで、このまま続いてくれ。



そんな優しい目で言わなくても、大丈夫。  
大丈夫だから。

「(し、心臓が、破裂しちゃう)」

お願いだからそんないい顔でいいこと言わないでほしいっ!!  
ちよつと、後輩?

わつ、私今キヤパいっばいいいっばいなんだけど??  
そんな、そんな顔されると、か、かなりマズいんだけどお!!??

「(幸せって、今日一日ずっとそう思ってるけどお!!?なんならお誘い  
貰った日からずっと思ってるんだけどこっちはあ!!?)」

こつ、この後輩、私がどんな思いで今日を待っていたと……っ!  
遊園地に、雛ちゃんと、後輩と一緒にに行ける今日をどれほど待って  
たか分かんないって言うのお……!!?  
いや分かんないわよねっ!ごめんっ!

「……先輩?だいじよぶっすか?」

「おねーさん?どこか痛いのか?」

「うへえ!?!いいいやいやっ!全然大丈夫っ!さき、行きましよう行きま  
しようっ!」

くそお、最近後輩にペースを乱されまくっているわねっ。  
遊びに行こうって誘ってくれたのは嬉しいけど、なんか癩ねっ!

『先輩、遊園地行きたくねえっすか』

『……急ね』

後輩の唐突な提案には結構慣れてきたつもりだったけど、遊園地とは流石に予想外で。

男女で遊園地はそれデートじゃない？とチラツとは思ったけど、この後輩がそんなこと言うタイプかなあと思い冷静でいられたのよね。

『ちーつと事情がありましたて、雛ちゃんと遊園地行くんすよ。一緒に

——』

『行くわよ後輩っ!!』

『判断が早い』

事情を聞けば後輩のご両親から、雛ちゃんを遊びに連れてって欲しいと頼まれたらしい。

……おかしくない？そういうのって雛ちゃんのご両親から言うもんじゃない？

いや普通だったら親が連れてくもんだけど。

『あーその……なんだ……ちよつと事情込々でして。俺もまだ理解が追っついてねえんですが』

『?』

『あー、あれです。雛ちゃんの親御さんなんですが……ちよい育児放棄気味でしてね?それで——』

『……は?』

『話聞いてくださいお願いします。んで親同士が知り合いなんで話付けてくる間、雛ちゃんの面倒見てってことで……』

『……その場に私も同席したいくらいだけど』

『確かに思う所はありますが、雛ちゃん寂しがらせるわけにもいかなえでしょ』

雛ちゃんのご両親について、深くは聞かなかった。

聞いたらきつと我慢が出来なくなっちゃう。

『それに俺一人で雛ちゃん連れて遊園地は……ほら、あれですし』

『……小学生連れて二人で遊園地だものね。分かった、予定空けとくわねえ』

『あざす』

「あつはは！楽しいー！」

「たーのしー！」

「二人とも楽しそうで何よりっすー」

「スカしてんじゃないわよ」

「急に真顔でキレるじゃん……」

たまに来る遊園地っ！

これでアガらないやついるう!?

いないわよねえ!!?

「雛ちゃんたのしー!？」

「たのしーっ！」

「かーわーいーいーっ！」

「きゃーっ！」

こんなにいい子なのに育児放棄い!?  
ありえないっ!?

こんなにかわいい子なのにっ!!??  
こんなに抱きしめなくなる、なんなら抱きしめてる子がっ!?

「おねーさん!」

「はーいー!」

「大好きー!」

「あーもおー!可愛すぎよおー!!」

私はこれから閉園まで、全力でお姉ちゃんを遂行する……ッ!!  
それが此度の私の使命、天命と見たわッ……ッ!!

「これ俺いる意味ある?」

「絶対いる」

「いなきやダメ」

「そっか……」

うとうと、うつらうつらとした。

目の前には、誰かの背中と肩しか、見えない。

「……だいじょうぶう?雛ちゃんの家まで結構あるでしょ?」  
「だいじょーぶっす。軽い軽い」

多分、お兄さんの背中にいるんだ。

だからあつたかいんだあ。

ほんの少し目を開けたら、夕日が目に飛び込んできた。  
電車に揺られてる間に、寝ちやつたみたい。

お兄さん、ずっと私を背負ってくれてたんだ。

「ねえ、話付けたってほんとなの？」

「元々、好きでほつたらかしてたわけじゃねえんだ。正面向いて謝るのが怖くて逃げて、引つ込み付かなくなつてただけで」

「親のすることじゃないわ」

「大人になつと、素直に謝るつてのが難しくなんだつてさ」

「……わからなく、ないけど」

今日は一日、贅沢しっぱなしだったよ。

だって、左手に巧お兄さんがいて。

右手に愛佳お姉さんがいて。

こんなに贅沢をしてもいいのかなつて、何度も思った。

でもね、その度に二人がにっこりして言うの。

『『なら今日は贅沢していい日！』』

つて！

だからね、今日は一日ずっと二人と一緒にだった！

「……あ、雛ちゃん。起きたか？」

「おはよ。ふふ、疲れちやつたもんね」

「おはよう……」

でも、時々凄く寂しくなつた。

どうしてここにるのが、パパとママとお姉ちゃんじゃないの？つて。

「雛ちゃん？どうしたのお？」

「……わかんない」

わかんない。

「二人が、家族だったら、よかったのに」

こんなに幸せなのに、胸が痛いよ。

「……なあ、雛ちゃん」

「……」

帰りたく、ないよ。

「大丈夫だって、心配いらねえよ」

「……なんで？」

「なんでも」

「後輩言い訳下手か」

お兄さんとお姉さんは、たまに喧嘩する。

でも喧嘩のあと、いつつも笑顔。

それどころか、笑顔で喧嘩してる時もある。

「うっせ茶々入れんな子供料金」

「あんたその子供料金にレポート見てもらってること忘れてんの？」

ねえ♡雑魚雑魚後輩くうん？♡」

「チツ」

「おい先輩に向かってなによその舌打ちはあ！」

ほら、また笑いながら喧嘩してる。

ふしぎ。

……でも、ほんとに。  
ほんとに、大丈夫なのかな。  
お兄さんが言うなら、大丈夫なのかも。

「ほら、そろそろ雛ちゃんちだ。降りな」

「はい。……んっ」

「はいはい手は繋いどくよ」

「もう可愛いんだからっ」

せっかくだし、最後まで手は繋いでおくつ。

……もったいないから。

「……ん？雛ちゃんちの前、誰かいねえ？」

「いるわね。誰かしら」

玄関の前に、誰かいる。

見覚えのある顔、それにお洋服。

「パパ、ママ、お姉ちゃん……」

「どうも外で待ってたっぽくない？」

「みたいつすね。……雛ちゃん」

「……ん」

……うん、大丈夫。

私は心が広いから、許してあげないどつ。

「行ってあげな」

「文句でもわがままでいっぱい言って困らせてきちやいなさい」  
「……うんっ」

二人が背中を押ししてくれたんだもん。  
これからはうんと困らせちゃうんだからっ。

「パパーっ！ママーっ！お姉ちゃーんっ！！」

「久しぶりーっ！」

「……何気に、第一声からえげつねえこと言ってね？」

「うわ……かわいそ……。あれ絶対感動の涙じゃないでしょ……」

「そんじや、俺らも帰りますか」

「あつ、ちよつと。今日泊まつてつていい？明日休みでしょ？遊ぼ！」

「いつすよ。んじやなんか晩飯の材料買いに行きますか」

「はいはあい♡」



「……今日さ、雛ちゃん間に挟んで手、繋いでたじゃない？」

「してましたねえ」

「手、温かったわね」

「温かったっすねえ」

「……ん」

「……雛ちゃんいねえんすけど」

「うっさい」

「……どーぞ」

「……んふふ、意外と手えおっきいのね」

「ほんとそういうところすよ先輩……」

## 事実と小説、どっちの奇も面白ければいい

こんな世の中ではあるが、安心できることもある。

その一つに『超常現象を発生させるメスガキはいない』というのが挙げられる。

イカれてるにも程がある。

なんだよ超常現象発生メスガキって。

ついに脳も心も死んだか？と自分でも思う。

だが事実として、この世界に異能力、超能力、魔法等のファンタジー現象（洗脳、超高速催眠術等も含む）は起きてない。

例えば念動力でS級ヒーローを張るようなトンデモ幼女はいないし、爆弾を使ってRTSに興じる少女達もない。

いやいたら困るが。命の危機まである。

だからどうしたと言いたくもなる。

が、これは俺にとって大いに安心できる事実である。

これらつまり子供と大人、その一番の相違点は腕力や筋力といった身体能力。

それらを、異能による身体の拘束、精神状態への直接干渉、無意識下にする強制行動……

数えればキリがないが、『異能力』というたった一つの要素で抵抗の全て無に帰し、屈服させる。

そういった心配はいらないということだ。

いやあ安心安心。

……なんで、こんなこと心配しなきゃならねえんだよお!!

「……一限だっつい」

今日は一限から講義があり、それに出席しなくてはならない。バイト、遊びも楽しいが、俺達学生の本分は勉強。疎かにしちゃあいけない。

「はあー……めんどくせえー……」

嫌なもんは嫌だが、それでも自分に言い聞かせる。

そう、今日は必ず出席すると決めているんだ。

講義室に到着、すぐさま俺は『ある席』に着席する。

大学の講義を行う場所は様々だ。

広い講義室で行うものもあれば、中高のころの教室と変わらない程度の広さでやることも珍しくない。

中でも後者、狭い部屋での講義はある程度段階が進むと、大まかに誰がどこに座るか決まってくる。

別に固定席ではないのだが、無用な席取りトラブルも避けられるし、そういうものだ。

だが最近はこの『固定席』を極力避けていた。何故か？

普段一緒に座っている友人に会いたくなかったからだ。

……だが、やはり一度しっかりと確かめるべきだ。

ともすれば俺は今まで先入観で友人を疎み、避けてしまった可能性もある。

だとしたら友人には申し訳が立たねえ。

今日この講義を取得しているのは友人の内一人と俺だけ。

そいつだけでも確認しておきたい。

にしても、やはり大学構内においては『メスガキ事象』は発生しないという最初の説は正しかったのだろう。

一ノ瀬先輩を初めて見た時は死神タイプのシャドウと遭遇した時を思い出すほどの絶望感だったことを思い出すぜ……

……だが、大前提としてなぜ俺が『メスガキもの同人世界』のチャネルに存在しているか。

これについてはまだ何も判明していない。

オカルト物のお約束なら怪しげな社やら池やらに粗相をした等が考えられるが。

なにか、この世界に囚われる切っ掛けのような何かがあったはずなんだ……

それは一体――

「……へえ、この席に座るのは久しぶりじゃあないかな？」

うわ出た。

見るからに怒ってる童顔眼鏡だ。

「おお、久しぶりだな」

「何が久しぶりだよ、顔も合わせようとしなかったのは君だろ。それを言うに事欠いて……」

「悪かった悪かった。色々事情があったんだよ、あずま東」

顔を見るや否や、眉を顰めてねちねちねちねちと小言を吐く。

こいつこそが俺の友人の一人『東<sup>あずま</sup> 夕貴<sup>ゆうき</sup>』。

童顔、やや低めの身長、茶髪で跳ね気味の髪、男にしては比較的高めの声。

が、口を開けば嫌味つたらしい上に小言も多いとかなーり癖が強いやつだ。

「事情？ああ事情か。そうかそうか、大いに結構だ。理解してるとも、誰にだって事情はあるからねえ」

「二々引つかかる物言いしやがって」

こんな物言いをしているが、もちろん俺達の仲が悪いわけではない。こいつはいつもこんな感じだ。

確かに若干嫌味な感じはあるが、お互い笑顔だし、本気で言い合っているわけではない。

口を開けばお局様じみた嫌味な言葉を吐くが、口数の多くなったこいつを見ていると、どこか安心する。

東は嫌味こそ言うが、機嫌がいい時ほど口数が増えるのを俺は知っている。

「まったく、僕がどれほど心配したことか理解してるのかい？同じ講義には出ても、僕に一言も声もかけずそそくさと出ていく君にどれ程腹が立ったことか」

「悪かったって」

「本当に分かっているのかあやしいものだね。学食にも来ないし講義も離れて座るし、気が気じゃなかったというのに……」

事実俺が講義を終えてさっさと出ていく時、僅かにではあるが心配そうな目で見ていることもあった。

当時の俺はそれすらも煩わしく、随分酷い対応だったことは記憶に新しい。

本当に申し訳ない。

「ふんっ、まあ分かっているならいいけどね。……健康そうで何よりだ。不調だったわけではないんだらうね？」

「ああ」

「それならいい」

それにこれでこいつ、結構な友達想いだ。

なんだかんだ文句は言うがバカやるときは一緒にやるし、それなりに心配もしてくれる。

集団で取り組む作業なんかには率先して取り組む意外な面もある。

それにこいつ、意外や意外に面白キキャラでもある。

というのも……

「……ん？おい志賀、違う参考書を持ってきているぞ」

「え？んなバカな。……合ってるじゃねえか」

「違う、僕が違う参考書を持ってきてるんだ。これ多分入れ間違えたな」

「なんだお前」

結構バカなんだよなこいつ。

言い方が紛らわしいんだよお前え。

「しまったな……。僕としたことが、昨日トランプタワー作りに夢中になって疎かになってたらしい」

「バカだろお前。いや普通にそれはバカ」

「バカバカ言うな。傷つくだろ。そんなことも分からないのか」  
「なんなのお前」

どこかエリート然として近寄り難い冷たい雰囲気。

中性的な顔立ちもあり、それがいい！背伸びしてるみたいで可愛い！という男女が後を絶たない。

だがふたを開けてみればポンコツもポンコツ。

いや勉強はできるんだこいつは。

ただどこか致命的に抜けてるといえるか、ポンなところが垣間見える。

「……ごめん、見せてくれ。ついでにこの間のレポートも見せてくれ」

「要求増やしてんじゃねえよ。いいけど」

「そうか、助かるっ！」

ちゃんと笑顔でお礼言うから憎めねえんだよなあ……

だいたいこんな笑顔見たらもう見捨てられねえよ……なんで顔だけはいいいんだこいつ……

つと、そうだ肝心なことを忘れていた。

こいつには確認しなくてはならないことがある。

そもそもこいつに会おうと思った原因は、こいつが所謂『大人』かどうかを確かめる為だ。

東はさっきの会話で高頻度で『分かる』という単語を使っている。

いやもう言葉狩りとか言いがかりレベルの文句であることは俺自身分かっている。

だが、確かめずにはいられない。

誰がまともで、誰がメスガキで、誰が大人か。

その法則性を俺は、知りたい。

「……なあ、東。ちよつと聞いてもいいか？」

「僕にバカバカ言うくせに質問とはねえ！いい度胸だ！」

「どんなキャラだよ、根に持ってんじゃねーよ。んで質問なんだけどよお……」

「メスガキって、知ってる？」

僕は、どうすればいいんだ。

友人が、友人があまりにアブノーマルな道に進もうとしてしまっている。

「ま、まず、どういう経緯でそれを僕に聞こうと思った……？」

「……俺もどうかと思う」

当たり前だろ!!

講義開始前に唐突に「メスガキって知ってる？」とか前代未聞すぎるぞっ！

「でも俺にとって重要な質問なんだ。答えてくれるか？」

「ええ……。ほんとに……？」

「ああ」

こ、この男……曇りなき眼でなんてことを言うんだ。



ほんとなんてことを言うんだよ。

「メ、メスガキ……メスガキ……？」

一般的な意味なら、生意気な女兒を指す、男性向けのそういうあれだろうが……

だが僕の知る限り、彼は、志賀はそういった発言を好まない傾向にあると思っていたのだが……？

と、とにかく、ここは慎重に言葉を選ばねばならないだろう。

「う、ううむ……メス、ガキ……むうん……」

「……」

まず前提としてこの男、子供を性的対象に見るような男ではない。それは断言できる。

まだ付き合いが生まれて一年程度ではあるが、それは分かる。だからこそ分からない。

なぜ唐突にこんな質問をお……!?

「……うぐぐ……」

「……」

最近になってそういう性的な癖を自覚した？

いや、だとしたらこんな聞き方はしないだろう。

志賀のことだ、万が一そうなたら自責の念で苦しむ姿が目に見える。

そういう男だ。

「……うう……」

今までメスガキという言葉を知らなくて、誰かに吹き込まれた？

可能性としては高いが、志賀のことを多少知っていればそんなことするやつはいない。

たまたまネットで見かけた？それならその場で調べるだろう。ダメだ、質問の意図が分からない、

何もわからない。

どう答えたらいいのか、どう反応すればいいのか。

こうして答えに窮しているのが一番よくないのではないか。

……そもそも、なんでそんなこと僕に言うの？  
なんで僕がこんなこと考えないといけないの？  
どうして僕はこんな目に会ってるの？  
わかんない、なんも分かんないよ。

「…………ぐずつ…………えうう…………」

「やべえ、東の感情のキャパ限界すつげえ低いの完全に忘れてた」

「それもこれも志賀が悪いんだ…………つ！

こんな、よくわかんない質問する君があ…………！

「おおおおお落ち着け東。そうだよな急に言われても分かんないよな  
もうキャパいっぱいいっぱいだよな？すまんすまんさっきの質問は

忘れてくれ。ほんと気にしないでくれ。なっ！なっ!？」

「だってえ……！急に言われたってわがないよお……!!」

「もう大丈夫、大丈夫だから！ごめんて！やべえ周りの視線が死ぬほどいてえ……！」

思えばこの男はいつもそうなのだ。

いつも気だるげな顔して、めんどくさがりで、出不精で……

その癖気配り屋で、ミスした後フォロー回るの早いの気に入らないし……！

でもねえ……！一番気に入らないのはねえ……!!

「なっ、今度またどっか遊びに行こうぜっ？野郎同士で気兼ねなく！なっ！」

こいつまだ僕を男だと思ってるやがるよお!!

僕は『女』なんだよツ!!

一年友達やってんだからいい加減気づけよお!!

「……ぐずっ、はあ、もういい。ダサイところ見せたね」

「俺も急に変なこと聞いてほんと悪かった。気にしねえでくれっと助かる」

「分かった。もう掘り返さないよ」

確かに僕も悪いと思う。

初対面で男だと思われてからというもの、いつになったら気づくかなーと面白がって中性的な服ばかり着るようになったからね。

それは反省してる。

……でも一年間だよ一年間!？」

ここ最近あんまり顔合わせてなかったとはいえ、普通気づかないなんてことあるっ!?

漫画かよ! 「おつ、お前女だったのかよ!」的な展開でも世界は望んでんのっ!?

ね——よっ!!

……ただ、友人の精神状態に関して、少々心配になったのは事実だ。今現在、志賀が尋常じゃない事態に陥っていることは分かった。それくらい、彼が女兒に対して劣情を抱くことはないという信頼がある。

そうだ、それ自体がまずありえないことなのだからね。

友人達へ共有……は、今の所しなくてもいいだろう。

あまり騒ぎ立てるべきではないかもしれない。

僕は知っている。

というより、大学入学当時の彼を知っているなら、誰もが知っていることだろう。

もつとも、ほとんどいないだろうけど……

今はどうなのか分からないが、彼はかつて子供に対し異常な警戒心と、ある種の恐怖を持っていた。

子供が傍にいただけで嘔吐して、身動きが取れなくなる程に。

そんな志賀が、いったいなんでそんなことを……?

「……まだ、分かんねえ。様子見だな」

「そういえば何で付き合い悪くなったの？彼女でもできた？」

「……ん？ああ、んなわけねーだろ。色々調べもんしてたんだよ」

「調べものねえ。……まあ深くは聞かないけどさあ」

「つか、出来てたらお前らに即マウント取りにいくわ」

「君そういうとこだぞ」

なんなら別に心配しなくてよくないかこれ。

## 距離感は人それぞれ

僕は件の友人を連れ、学食に来た。

掘り返さない、掘り返さないと言ったが……少し志賀の状況を探る必要があると思う。

「今日の日替わりカレーうどんか親子丼だつてよ」

「白い服だからうどんはパス。親子丼で」

「んじや俺カレーうどん……いややっぱアジフライ定食で」

「なにそのフェイント」

「なんかカレーうどんにするなつていう啓示が下つた」

でも実際どう切り出したものか。

こういうとき、こいつはのらりくらりとかわすのが結構うまい。

なるたけ自然に、違和感が無いよう聞かないと……

「……今気づいたけど、なんか肌焼けた？」

「あー、こないだ海行つた。……そーいや言つてなかつた、最近先輩

……先輩？の友達が出来て、その人と行つてよ」

……は？

は???

こいつ僕の心配をよそに海行つて遊んでたんか???

「ふうーーーーん？友達ほっぽらかして海？海行つてたんか？

へえーーーーー！」

「わりい……。色々あつたんだよ。成り行きとか、調査とか、興味とか

……」

「いくらなんでも語るに落ちてるだろそれはあ」

調査って言うけど成り行きと興味は絶対その場の雰囲気だよね？  
それは通らないでしょお……

「にしても先輩？なんでまた。講義中じゃないとしたら、どつから交流生まれたのさ」

「図書室でレポート書いてたら罵倒された」

「縁切った方がいいよ」

絶対ロクでもないよその人。初手罵倒で。

跡部様だつてそこまでされたらキレル。いやキレないかも……跡部様だし……

「なんでそんな悲しいこと言うんだよッ！何が悪いってんだよ！」

「客観的に聞いたからだけどっ!?初手罵倒は普通縁切るだろうがよお！」

「確かに」

こいつ……っ！

おちよくつてんのか天然なのか分からないのが腹立つ……っ!!

「っーかそれを受け入れる君も君だろ。なんなの？寛容度高すぎでしよ、ふっ、おもしれー女なの？」

「そつから色々あつたなあ。うちにもちよいちよい来てたし、飲み行つて相談事してたり」

「ほんとよく付き合い続けられたね!」

「そこはほら、そんな時訳あつて色々追い詰められてる時期だつたんだよ。お前らに頼むのも……ちよつと憚られてな」

「それ言われちゃうとなあ……」

やっぱり彼の身に何かあつたのは間違いないらしい。

先の質問、メスガキ云々がそれに関連するのかもしれないが……その質問が『今も進行中』だから出た質問なのか『解決に向かっている』からなのかまでは分からないな。

やっばい、あんまり考えたくないなこれえ……

「……東なら……まあ大丈夫だろ。会ってみるか？」

「え。いいの？」

おつと急展開来たな？

平静を装っているけど一限からこつち、展開がジェットコースターでもう僕頭おかしくなりそうだあ。

「電話出つかないかな……あ、もしもし先輩、今だいじよぶつすか」

『はいはい。どしたのお？レポートダメだし食らった？』

「お陰様で違いますうー。暇です？」

『午後講義ないから暇だけど』

「ちよつと学食来てくれませんか？俺の友達も一人いるんすけど」

『ご飯？いいわよー、どうせ一人だったし。面拜んだらうじやないの』

「何キヤラ？席取ってるんで。おなしやーす。……今来るってよ」

「まあじでえ？」

ちよつと待てよお。

電話の声は聞こえないけど、もう結構いっぱいはいだよ僕う。

「ちなお前がさつき食い入るように見てたレポート、あれ先輩のアドバイス込々だから」

「お礼を言わないといけないねえ！いやあ来るのが待ち遠しいよ！」

「現金すぎんだろ」

「道理で志賀が作ったと思えない出来だったわけだ」

「喧嘩か？喧嘩売ってるのか？買わねえぞ」

「買わないのかよ」



いやあまさかまさかあんなに素晴らしいレポートを書いて下さっていただなんて。

これあれだな、僕もなるだけ懇意にさせていただく他ないなあ！

「ふっふっふ……！」

「……どーせ頭の悪いこと考えてんだろうなあ」

ふむ、来るのにまだ少しかかりそうだし……

折角だから今まで出てきた情報から『先輩』への考察をしてみようかな。

さっきの志賀の声色からかなり親し気。

つまり上下関係を気にしない、おらかな人かな？

しかも志賀との仲はかなり良さげ。

電話の声は聞こえなかったけど、志賀を見た限り悪い人とかではないだろう。

「あれ？こころはあい？後輩どっこー？」

「せんぱーい。こつちこつち」

ただ割と最近に付き合いが始まり、それで海に行ってた訳だよね？  
ってことはバリバリ陽キャのコミュ力極振り人間って可能性もある。

レポートの助言から始まったと予想するに、その線はかなりある。

「あつ、いたいた。荷物お願いしていい？」

「うーっす、どぞー」

「ご飯取ってからまた来るわねえ」

そうだとしたら正直、ちよつと、かなりキツイ。

真面目系ならともかくウエイ系だったら僕無理かも。

志賀が影響されやすいタイプだったらそれもすぐ分かるだろうけど、そんなことないしなあ。

「お待たせー。よいしょっと」

「親子丼っすか。誘っついてなんでですけど、先輩普段弁当作ってませんでしたっけ」

考えられるのは親切なノリのいい優男系、あるいは兄貴肌で頼りがいのある男前。

つまり僕の予想ではプロトな騎士王タイプか、あるいはケルトのバーサーカーな王様っぽい人。

これは間違いないだろう。そうであってほしい。僕の眼の保養の為にも。

「昨日飲み行ったじゃない？寝坊したわ」

「すみません」

「引きずった私が悪いしー」

志賀もまあまあ顔はいいけどややダウンナー系だし、なら尚更似たもの同士なら陽気に海に出たりはしないよね。

やはり陽キャ系に間違いはない、それにきつと背は志賀より高くて

……

「……」

「あつ、やっと帰って来たな。紹介しとくぞ。この人が俺の先輩兼ゲーマー兼何か」

「何かって何？私は都市伝説かなにか？……一ノ瀬愛佳でえすつ！よろしくねえ」

「うわキツ」

「表出ろ」

ちつちやい。

「ちつちやい」

「おい後輩。あんたの友達可愛い顔で初手ライン超えたわよ」

「大学生でそのライン超えない人間いねえよ」

「分かってるわよんなこたあ!!」

ちつちやくて、なんか可愛い。

え、かわ、かわいい。

なにこれ、ドレス？ロリータって言うんだっけ？

え、可愛すぎ。

「くそつ、やってられないわね。後輩ちよつとそれ取って」

「ほい七味。まーまーそう言わず。つかそれはもうしゃーねーっすよ」

「可愛いと小さいは言われすぎてんのよこっちは。もつと違うとこ褒めて欲しいわ」

「わがままか」

待て待て待てそれよりさらつと志賀の隣座ってるその可愛い子だれ？

さらつとやってるけど『それ』で会話が成立してるし。

「す、すみません。東 夕貴と申します」

「あらご丁寧に。さつきも言ったけど一ノ瀬 愛佳よお」

「ちよつと、口んどこついてますよ。ほらこつち向いてください」  
「むうー」

ええ……

すつごい自然に口拭いてる……!?

「あ、あの、一ノ瀬先輩……?」

「んー?なにに?」

「唐突ですみません。その、ふ、二人は付き合ってたっしやる……?」  
「……」

「「いいやっ」」

「嘘でしょ」

嘘でしょ。

それは絶対嘘。

「なんで? いやおかしいでしょ。その距離感は絶対おかしい」

「友達だしそういうもんじゃねえの?」

何言ってるんだこいつ。

異性で友達が成立云々は置いといたとしてもその行動はおかしい  
だろ。

いや場合に寄つちや恋人でもしないだろお!?

「志賀だしそういうもんじゃないの?」

「普段からそういうもんなの!?!」

この人はこの人で変な毒され方してるな!?  
いや確かに志賀は距離感近いところあったけど、僕はこんな近く無かったよ!?

「……いや、さつき家に来たり飲みに行ったりしてるとて」  
「おう」

「変な虫も寄らないし、こいつの家ゲームいっぱいあるし?」  
「ああもう僕限界」

考えるのやーめた。

これ以上は僕バカになるわ!!

「心配して損したよクソバカ野郎が」

「そこまで言うことなくねえか!？」

「そうよそうよ。確かにこいつはバカだけどそこまで言うことないじゃない」

「クソチビ先輩も何言ってるんすか？」

「しばき倒すわよっ!？」

もうなんなん？

友達はメスガキがどうこう言いだし、連れてきた先輩はなんか……そういう可愛い生き物だし。

……あーでも、なんか読めてきた。

多分誰かが志賀の前で、この人のことメスガキって呼んだんだ。

んでメスガキってなに? って本人に聞くわけにもいかななくて僕に聞いて来たのかなんだ。

子供に近寄りたがらないのに、一ノ瀬先輩と知り合えたのは構内で出会ったからかな?

いやにしては距離感近いな? いやそこはあまり突っ込むべきじゃないかもな……

そうすると残す疑問はここ最近、距離を取ってた悩みってことだけ  
なんだけど……

「アジフライちよつとちようだい」

「んじや親子丼一口ください」

「やだ」

「は？」

……もう解決してんじやないかなこれ。

いや、表に出してないだけかもしれない。

志賀は誤魔化しはぐらかしが上手いし。

「せめて等価交換守ってくださいませんか？」

「私からのお礼で等価でしょ？」

「ハッ」

「鼻で笑いやがったわねえ!？」

「の？」  
というか何で僕がこんなに悩んでんのにこいつらイチヤついてん

馬鹿なの？死ぬの？

思考回路絶賛混線中だが？

「……ハア」

「おっ、どした東。ため息つくとなんか色々あれらしいぞ」

「君のせいだよ」

「ひどくね？そう思いませんか先輩」

「残当」

「クソがっ」

それとなく目をやりつつ、なんかあつたら手を貸せばいいか。それ以上は望んでないだろうし、先輩に悪い。いや明らかにこれはもう好きあつてるでしょ。割り込むなんて無粋無粋。

「ねえ、東ちゃん……で合ってる？」

「は、はあ。東ですが」

え、なに？めつちや笑顔で声かけてきた。

恐い、普通に怖い！

人のもんに手え出すな焼き入れるわよ的なあれなの!?

「んーん、そういうんじゃないかってえ……東、ちゃん、よね？」

「……？ あ、あーそういう！はい、そうです」

うっそ、やばっ、一発で女って見抜かれたの？

この聞き方、絶対確信持つて聞いてきてるじゃん。

「やっぱり？ふふん、これでも服装にはちよつと覚えがあるからね！」

「あの、あれですよ？別になんか意図があつてつてわけじゃ……」

「ん？なにが？着たい物を着ればいいじゃないの」

「その服で大学に来てる先輩が言うとすごい説得力ですね」

「でしょ？」

ほんと凄い説得力。

めつちや見られてるのに微塵も気にしちやいないよ。

「えっ、なに、なんの話？先輩と東にしか分かんねえこと？」

「黙れ。……ねっ、今度お茶しながらお話ししましょう？連絡先もらつていい？」

「も、もちろん、全然いいですけど」

「やったっ」

「俺の扱い酷くねえ？」

いやもう君はそれでいいよ。

むしろずっとそのままできて欲しい。

でも、志賀がこの人と仲良くなった理由がちよつと分かった。

何か、凄く自然に『この人とは合う』って感じたんだ。

あるいは、この人には何か、そういう惹かれる何かがあるのかもしれない。

確信はないけど、長い付き合いになりそうな気がするなあ……



シンクロニシティなんてないったらない

メスガキ事象について一つ、どうしてもぬぐい切れない不安がある。

この現象は『オカルト』なのか『ファンタジー』なのかということだ。

オカルトならば話は早い。

俺とかかわりのある人間、あるいは寺社仏閣、教会の所在を明らかにして関係を一から洗い出し、調査をするだけのことだ。

もし過去に俺が何か悪いことをした祟りや神罰ってんなら、自業自得と納得できる。

解決だって、まだ希望を持てる。

だが問題はファンタジーだった場合だ。

ハイファンタジーやSFに限らず、人知を超えた「もの」が原因で今があるとするとするなら。

無作為的に俺が選ばれ発生した現象であるとするなら。

可能性として、この現象が生涯俺に付いて回る、ということは十分にあり得る。

道を歩けば子供に声を掛けられ、聞きたくもない甘ったるい声で破壊を囁く。

それが日に一度ではない、数度起こりうる。

などといえれば少しは格好もつくかもしれないが、ただの犯罪教唆なのだから性質が悪い。

繰り返すが俺にそんな性癖はない。

見も知らぬ子供を相手にすることも、屋外で事に及ぶことも受け入

れる気は毛頭ない。

エロ漫画って、冷静に考えてはいけないものだたと身をもって体感している。

それらは避けなければ人生破滅、避ければ見るも悍ましい行為が背景で行われる。

ただ平穏に生きているだけで、あらゆる場所で行われている。

最近、脳裏を過る。

世界はおかしくなくなってくつて、俺だけが変な幻覚を見ていて。俺だけがおかしくつて、狂つてて。

俺だけが、俺だけが、俺だけが——！

いつもそこまで考えて、思考を振り切る。

考えるだけ無駄だからだ。

自分が見ているものは、誰とも共有できない。

第一認めない。そんなもの認められるわけねえ。

だって、認めてしまえば、俺はどうなる？

そんなもん、認めてなんてやるもんかよ。

おかしいのは世界だ、狂ったのは世界だ。俺じゃない。

狂ってるのは俺じゃない。

誰でもいいんだ。

俺にそう、言ってくれ。

「……えっ、うそ、じゃあ今も大きくなってるんですか？」

「めんどくさいわよねえ。下着買い替えると高くつくしい？気に入った柄はサイズ違いがないとか嬉しい？」

「そ、そうなんだあ……」

一ノ瀬先輩はお喋りが好きだ。

たとえその悩みが僕に一ミリも共感できない内容であったとしても、話をするのがうまいから聞いていられる。

いやなくはない。なくはないんだ。

ただ先輩に比べるとっただけなんだ。壁じゃないんだ。

「一番えぐかったのは水泳の時ね。何がって、教師よ」

「ご、ご愁傷さまで……」

「思い返すだけで気分悪くなるわほんと。……ごめんね？いやな話聞かせちゃって」

「いえ、気にしないでください」

その背丈でその胸は……それはもう気苦労の方が多かっただろうけれどもっ！

正直、とても羨ましいと言わざるを得ない……っ。

「そいえば東ちゃん、あいつとは一年の頃からの付き合いなのねえ」

「はい。なんだかんだ気が合って……」

「フウン？」

口を器用に動かす人だなあ……とぼんやり思う。  
どうして僕は、この間あったばかりの先輩と、ケーキ屋さんでお茶  
をしているのだろうか。

僕も大概、流されやすい性格だ。自覚もある。

「いいわね、すごくいい。一年生の時に知り合い作つとくと後が凄く  
楽になるからね、絶対」

「そんなにですか？」

「間違いない。考えてみて？友達グループで座ってて余つてるところに  
『座っていいですか？』つて聞くのよ？毎日」

「……考えたくないなあー……!!」

一ノ瀬先輩、想像してた以上に優しい人だなあ。

超かわいしい、服にも明るしい、ちよつと子供っぽいところもある  
けどそれもかわいしい。

背は低いけど。

「にしても、ねえ。話し方ちよつと窮屈じゃない？後輩……志賀と話  
してた感じでいいわよお？」

「……窮屈そうでした？」

「ちよびつとね」

窮屈そうなのは先輩の服じゃないの？とか考えてしまうあたり  
僕ってほんとバカ。

それにしても先輩はよく見てるなあ……

「……でもいいのかい？先輩だし、嫌じゃ？」

「うん、そっちのがしつくりくるわ。全然いいわよ？志賀とか見てみ  
なさいよ。素の口調との温度差半端ないでしょ？」

「ふふ、違うないね」

うえへえ、ほんとよく人を見る先輩だあ。

正直敬語使って話すの凄く苦手だし、好意に甘えさせてもらおう。

「ここいいところでしょー。程々に静かで、ケーキも美味しくて、お茶するのを持ってこいな」

「うん、すごくいい所。……僕、この辺のこと全然知らなかったんだなあ」

「あら？じゃ東ちゃん、大学入ってこっちに越してきた口？」

「うん」

そう、何を隠そう僕は家を出て大学に通う一人暮らしの大学生である。

別に深い理由はないけど。ちよつと一人暮らしとかに憧れてただけだけ。

ただ、一人暮らししてるーっていう関係で志賀と話が弾んだりもしたので、どう転ぶかわからないものだねえ。

「ほーん。ねえ東ちゃん、甘いもの好き？」

「え、藪から棒。そりやもちろん大好きだよ、乙女的に」

「ほんとっ？ねっ、よかったらさ、この辺の美味しいケーキ屋さん教えてあげましょっか？」

「えっ、いいの!?!うわあ、楽しみにしてるっ！」

僕だって女だし、甘いものも、かわいいものも大好きだ。

カフェで新作が出てればつい寄っちゃうし、通りすがりに犬猫の散歩を見れば思わず顔が綻ぶくらいには好きだ。

ついでに「女子かよ」って爆笑しやがった志賀にローキック叩き込もうとして回避されたことを思い出してしまう。

あいつあれで運動神経いいんだよな、けっ！折れろっ！

「最近女子会してないしねえ。そろそろ女子成分を補充しないと干からびそう」

「ひ、干からび……。でも先輩しよっちゅう女子会してそうな感じだけど。人気者そうな」

「んー……。ま、色々あるのよ。それに、ほら……」

「こんなにかわいい後輩ができたんだもん、かまってあげたくなくなっちゃうじゃん？」

……。あー、そういうことか。

志賀は、この笑顔にやられたんだ。

「……先輩、それはずるいと思う」

「ふふん、先輩はずるいのよ」

くそう、先輩さては自分の顔の良さ自覚してるな!?

じやなきやこんなことできるはずないよっ!!

「そういう顔で志賀を落としたんでしようけどね、僕はそうはいかないからねっ」

「へっ? い、いや、後輩をつて、いやあそんな、ことは無いと思うけどお……えへへ……」

「うわあ! 急にしおらしくなるなあ! テレテレすんなわけわかんなくなるだろお!」

そんなかわいい顔を急に見せるなあ! 情緒めちやくちやになるだろお!?

つかなに!?! 絶対付き合ってるでしょ!?

これで違うとか絶対嘘だよっ！百歩譲っても恋人だろっ！

「ちっ、違うわよっ!?別に志賀とはそういうんじゃないので!ほんとなのっ!」

「どうせ女子会とかも『最近あいつ男の影あるからそつとしとこう』的なあれなんだろう!」

「なっ、まるで見てきたかのようにっ!」

「分かるわっ!もうそのご友人達のほほえまな眼差しが目に浮かぶよっ!」

くそっ、甘ったるい雰囲気にしすぎた。

思わず紅茶を一気に口に流したけど、なんか口の中が甘ったるい気すらしてくる。

それもこれも志賀のせいだ……っ!

「あゝあゝあゝ……」

「おにーさん、すっごい声出てる」

「マジで気い狂いそう……」

「本格的に参ってるんだねえ」

「美樹、あんまりからかうのよくないよ?」

今日のおにーさんはお休みっぽくて、お客さんとしてうちの喫茶店

に来ている。

のだけど、こういうの、くだを巻く？っていうんだっけ。

今日は他のアルバイトさんが仕事場に立ってるけど、みんなちよつと心配そうに見てる。

「なんもわかんねえ……なんで俺は何もわかんねえんだ……」

「そっから？そっからなん？」

「わりいな二人とも……今俺はダメだ……」

「見りやわかるよ」

「見ればわかります」

「……だよなあ……ああああ……」

あたし達の向かいに座るおにーさんは机に突っ伏してぼやいてい  
る。

普段割と強い強めなおにーさんがこの有様だ。

それはもう大変なことが起きたに違いない。

ちよつと面白そ……いや今までの恩義に報いるべく真摯にお話を  
聞くのが誠意ってやつじゃないかな!?

そういう下心が顔に出てたのか、芽衣が私の頭にポスンと手をや  
る。

「めっ」

「ごめんてー」

これで叱ってるつもりらしいから、私は芽衣が大好き。

いつか悪い人に騙されちゃわないか心配すぎる。

「んでだよ……教えてくれよ先輩い……東あ……」

「ほほう？」

ふむふむ？ 『先輩』さんと 『東』さん。



このお二人のことで悩んでる様子。

「ねー、よければちよつと話してみない？言ってる途中で整理されることもあるんじゃない？」

「美樹、またそうやって……」

「まーまー芽衣。人助け人助け」

「……もうっ」

とか言いつつ、芽衣も聞きたがってるのは間違いない。

もちろん心配してのことだろうけど、興味が無いってわけじゃあないんだよね、分かるよ。

それにさつき、周りに座ってるお客さんがチラとこつちを見てた。

おにーさん、お客さん人気が高いってパパが言ってた。

だからそういう事情を聴きたいに違いない。

それにゴシツプはスイーツみたいなものだからねえ。

「……まあ聞きたいんならいいけどよお。あ、店長には内緒な。悪い

こと吹き込むなってまた怒られちゃう」

「分かってる分かってるー」

「ほんとかあ？んじや話すけどよお……」

はてさて、どんな話題が出るのやら。

芽衣は真剣な顔してるけど、お隣席のお姉さん達が途端に話止めたのには気づいてなさそうだなー。

「俺さあ、仲いい先輩がなんだよ。その人とはここ半年くらいでめっちゃ仲良くなつて……あ、こないだ来てたヒラヒラした服の人な」

「おー、覚えてるよ。フリフリだしかわいかったしでよく覚えてるよ」

「だろ？……で、自分で言うのもなんだけどさ、かなーり仲いいんだよ。家でゲームしたり、どっか遊び行ったりもしてたし」

「うんうん、なんとなくわかるよ」

その先輩さんの話をしてる時、すっごい寂しそうな顔するんだなあ……

……これひよつとして聞くのマズい？

「んでついこないだ、俺の男友達を先輩に紹介したんだよ。こいつ俺のダチなんですーって」

「ほうほう」

「そしたらよお、なんか初対面で気い合ったみたいで？今度どっか行こうみたいな話しててさあ」

「……うん」

「今二人きりで遊びに行ってたんだよ」

「……やっぱー」

これはやばい。

聞いちゃいけないかったかもしれない。

大人だ。

大人の世界の話だ。

「あわわわわ……」

芽衣はもう壊れた。早いよ。

とはいえ私もギリギリのところで踏ん張ってるけど、ちよつと衝撃が強すぎたなあ!?

「……ねえ、どう思う?」  
「……アウト、よねえ」

ほらもう隣のお姉さんがアウト判定出してる!  
もうこれはダメ! 私達が踏み込んだじやいけないものだった! 藪突つつきすぎた!

「……なあ、なんか変な勘違いしてねえ?」  
「ひえっ。か、勘違いとか、して、ないんじゃないかなあ!」  
「してるって言ってるようなもんだろ」

勘違い、勘違い?  
ここまで来て勘違いってことある!?

「俺は、東が……友達と先輩の気が合うことにはなんも思ってたねえよ?」

「えっ」  
「えっ」

「……なんだよその反応は」  
「だって、ねえ……? おにーさんが、好きな人取られちゃった話じゃん……?」

「ち、違うんですか……?」  
「違えよっ!! 全く違えよっ! 先輩はそういうのじゃねえよっ!」

違うのっ!?  
えっ、絶対そういう話って思うじゃん!?  
むしろここまでの話で違うなんてことあるわけないでしょお!?  
そう言うとおにーさんはぽつぽつと喋りでした。

「……いや、まあ、そういうんじゃない、ねえんだけどよお」  
「別に、先輩と東がそういう関係になったって俺は構わねえ。それは

間違いないと思う」

そうは言うけど、おにーさんはすつごくもやもやしてるんだと思う。

コーヒーカーップをしきりに傾けては止めて、中のコーヒーをじっと見てる。

「でもなんつーか、先輩が、すげえ遠くに行っちゃまうんじやつて、焦るつーか」

「……打算だったんだ。近くにいたのもどうしようもねえ理由で、俺自身どうしようもなくて……」

「でも、ここ最近ずっと先輩と一緒にだったから、一緒にいんのが当たり前になってて」

ん、と呟いておにーさんはぴたりと動きを止めた。

「……あー、そうか。分かったわ」

「ずっと傍にいてえって思うくらい、俺はあの人の隣が好きなんだ」  
「先輩がいなくて、寂しんだな、俺」

その時のおにーさんはきつと、憑き物が落ちたような顔をしていた

に違いない。

「はーすつきりした。ったく、我ながら女々しんだかガキなんだか……」

「悪いね、美樹ちゃん、芽衣ちゃん。つまんねー話に付き合わせて……美樹ちゃん？芽衣ちゃん？」

ちよつとこつちはそれどころではない。

「はわわわわ……」

「ちよつとお!?なん、なんでそんな反応になんだよお!？」

いや、だって、無理だって。

こんな、こんな、大好きですみたいな雰囲気出して、正気での無理。

「まさかこれで好きじゃないとか言ってるの……!？」  
「シラフで言えるの強すぎ……」

いやでもだってこんなん、おにーさん絶対『先輩』さんのこと好きじゃん!

むしろなんでそこまで行って『先輩が好き』って感情に行きつかないの!？

なんで!？なんで『隣』なのっ!？

「無理……しんど……」

「若さ、これが若さなのね」

うわ周りの席が死屍累々だ。

まあそれはそうか……という気持ちにもなってしまう。

「……うん、まあ、悩みが解決したのなら、いいんじゃない？」

「おう、だな。いや悪かったな、変な話聞かせて」

「ほんとだよ」

ほんとだよ。

思わずすごい投げやりな言葉になっちゃったよあたし。

聞いているこっちが胸焼けしそうな勢いだったよ。

……んでもまあ、おにーさんの役に立てたのなら。

これはこれで、めでたし、なの、かなあ……？

大人になるほどありがとうが照れくさい

雛ちゃん達との遭遇により発生しているメスガキと遭遇しない時間。

ひとまずこれを『ストック』と呼ぶことにしようと思う。

『ストック』がある内に考えておきたいことがある。

『安全地帯』のリストアップだ。

ずいぶん前の話にはなるが、この世界にはメスガキが現れづらい、あるいはメスガキ事象がほとんど発生しない、という場所がいくつかある。

新たに判明した法則も踏まえ、その条件をいくつかピックアップする。

まず第一に『年齢制限がある』場所。

俺が先輩との飲みに前向きな理由の一つでもある。

どうやらこの世界の法則は律儀なことに、公然わいせつ罪は犯す癖に風営法は守る。

俺の心も守れ。

第二に『関係者以外立ち入り禁止』の場所（一部例外あり）。

先輩がメスガキとは到底呼べない以上、関係者以外立ち入り禁止となっている大学にメスガキが現れることはないだろう。

教授の孫娘説もあるにはあったが、考えてみれば教授達は高齢が多い。

メスガキもの、という点において高齢は性的対象とはなりにくいだろう。

生徒が対象の可能性は十分にあるが、大学構内は隠れて事に及べる場所が少ない。

この可能性も排除していいと思われる。

「第三に『成人女性が多くいる』場所。

発見するのに最も時間がかかった法則だ。

考えてみれば確かに、例えばそういった漫画作品に成人女性と一緒に出ていることは少ないイメージがある。

つまり『メスガキもの同人には成人女性が出ない』という法則があり、逆に考えれば『成人女性の周辺にはメスガキが現れない』ということなのではないか？

商店街、大学構内、バイト先の喫茶店に現れないのはそれが理由と考えられる。

……今思うと、双子ちゃんには悪いことをしてしまったんだな。

他にもいくつか考えられる要因はあるが、この三点が大きく影響している、と判断している。

このことから挙げられる安全な場所は商店街、大学、喫茶店、居酒屋、夜の店、自宅や実家、人の家、くらいだろうか。

また、比較的安全な場所として、家電量販店やスーパー、遊園地なんかも挙がる。

いやまあ電気屋にメスガキがいたらいつそ笑うけども。防犯ブザーでも買いに来んのか？

以上挙げた場所を見て『こんな世界でも意外と生活だけならなんとかなるんじゃない？』とも確かに思った。

が、道を歩けばメスガキに当たるこの世界。

それらは局所的に安全な場所というだけであって、日々俺の生活を脅かしていることに変わりはない。

だが、俺は悲観してはいない。

必ず、必ずだ。



俺は元の、普通の生活を取り戻して見せる。

あれ

普通ってどんなんだっけ

少なくとも……

「ぴやあああああ!!?」

「うおおお!!?なん!!?どしたんすか先輩イ!!」

「ASMR聞いてたら爆音で広告流れたあ……!!」

「人んちのパソコンで何してんだコラ」

今の現状が普通じゃねえのはわかる。

ヘッドホンつけてなんか聞いてると思ったらASMR聞いてるだけかよ。

あと今後俺が使うときおすすめにそれ出てくんだけどお!?

ASMR別に興味ねえしよお!!

「ほああああ!!折角十円玉立ったのに!!!」

「おめーも人んちで何やってんだよ」

隣で東が絶叫している。

こんだけゲーム取り揃えた環境でやるのが十円立てって、もう完全にバカの所業だろ。

「ちくしよお……えーえすえむあーるってなに?」

「ASMRな。落ち着く音声とか、耳にいい音とかを集めたやつ。なんか先輩そういうのにはまってらしい」

「へえー」

突然、俺の家に二人が遊びに来た。

先輩は毎度のことだし、東は初めて家に来たんだが、それ自体は全然構わねえ。

けど遊びに来るって言って全員別なことしてるのはいかなものか。

「ねーこうはーい、何読んでんのお?」

「絶対霊域」

「面白いのかい?」

「おうよ」

かく言う俺も漫画読み漁ってるわけだが。

いやだつてさあ、先輩はパソコン貸してつて言っただきり齧り付いてるし、東は俺が漫画読みだしたらよく分かんないことしだすし……

それなら全員別々に遊んでもいいよなあって。

「ひーまー。ねーゲームしましよー」

「ASMR聞いてた分際で中々抜かしますね。なにします?」

「3人でできるやつでしょ?なんかないの?」

「スパボン4ならあります」

「Rも持つてるのにSFCを選ぶセンス、嫌いじゃないわっ!!」

「東一、ゲームやんぞ。いつまで十円玉立ててんだ流石に引く」

「えっ、なに?ゲーム?……うわスーフアミだ。まだ動くのか……」

うちのレトロゲーム機はまだまだ現役だからな。

SFC、64、GC、PS2はまだ動く。

FCはダメだった。さすがにVCに頼らなきゃ遊べねえ。

「俺ジェット」

「あたしも」

「二人ともひき殺しに来る気マンマンすぎないっ!?!……バズーカで」

「当然5656パスワードはありな」

「もち」

「やめろよお!!バズーカは発動まで遅いんだぞお!!」

なんか東が叫んでっけど知らない。

特殊能力ぶっぱなしの魔力に取りつかれた俺達を止められる奴はいねえ……!!

初めて志賀の家に来た時、正直僕は不安でしかなかった。だって、男の家って。

いくら志賀が勘違いしてるからって、先輩が同伴しているからっ

て、男の家にあがるなんて……

「うおおお!!消し飛べやああああ!!」

「ほいラインボム」

「うわあああああ!」

「ぷくすくす♡考えなしにジエットパなすからよ。ラインボム見えてるんだからボム投げが正解に決まって……」

「投げっ」

「うわあああ!ここ落ちるステージだったああああ!!」

そう思ってた時期が僕にもありました。

楽しい。

いやすっごい楽しい。

「……二人とも弱くない?」

「ダツテメツコラー!」

「スツゾコラー!」

「日本語話して?」

最後に友達の家でゲーム遊んだのはいつだろう。

高校生になるともうしてなかったし、中学生くらいの頃だろうか。

童心に帰る、なるほど確かに……これは楽しい!

「4点先取なのに僕が3で二人が1だよ?大丈夫?ハンデつけようか?」

「くっ……中々こいてきたわね東ちやあん……!」

「だが俺達に後がねえのも事実……!」

くっ、先輩と志賀はいつもこんなに楽しいことしてたのか。

ずるい、すぐくずるい!

僕だって真面目ぶった顔しないでもっとゲラゲラ笑いながらゲー

ムしたかったっ！

「バズーカは最初からキック持ってるから選んだしねー」

「まずいつすよ先輩。こいつスパボンやりこんでやがる」

「ふふ、違うわよ志賀あ。私達が頭使わないで遊んでただけよ」

「完全に論破されたが」

ふふん、昔お父さんがスーファミ持ってたからね。

その時にかなり遊んでいたのだよ僕はあ……！

「よしラインに貫通！これはもらったっ！……あっ！おい、何持ち上げて」

「先輩パス」

「りよ。くらえジェットオー!!!」

「わあああ!!?!なんだその連携!!?」

「イエー」

「ハイタッチすんなっ!」

ああ、楽しい。

友達とゲームでワイワイ騒ぐの、楽しい!

「っし、勝った。さあこっからは実質二対一よお!」

「卑怯とは言うまいな……」

「くう……!上等だよ、まとめて相手してやらあ!僕のバズーカ精度なめんなよお!」

「ほいプツシュ」

「ジェットオオオ!!」

「うわああああ!!マジでなんなん息合いですぎだろおお!!?!」

「イエー」

「ハイタッチすんなあ!」

こんなゲラ笑いしながらゲームなんて品のないこと、生まれて始めてやったかもしれない。

こんなに楽しいなら誰か教えてくれてもよかったのにつ！

「ふっふっふ、これで私も志賀も3勝……遂に雌雄を決する時が来たわねえ……！」

「覚悟しろ東ア！」

「でも僕倒しても優勝できなくない？結局二人で争うじゃん」

「いやこいつ相手なら余裕で勝てるから」

「あ？」

「まずはお前だオラア!!」

「何やってんの君達……引くわ……」

ふふ、身構えてたのがなんだか馬鹿馬鹿しくなっちゃうな。

もつと、二人と仲よくなりたいな。

「はい勝ちー！組んでない二人じゃまるで全然！この僕を倒すには程遠いんだよねえ!!」

「だあああくつそ!!」

「ストファ2なら負けないのにい！」

「はっはっはあ！先輩はともかく志賀に勝つのは気持ちがいいなあ！」

これ以上仲良くなったら何をするんだろう。

どこかに遠出したり、こうやって家でみんなでダラダラしたりゲームしたりするのかな。

そういえば志賀は先輩と海に行ったって言ってたな。僕も行きた

い。

なんか変なイメージ付いちゃったけど僕だって真面目ぶってばかりいないで遊びたい！

……あ、しまった。

海とか温泉とか、行ったら女だつてバレちゃうな。

いや男の一人暮らしの家に遊びに来といて今更か。

タイミング見てバラしちゃおう。

「くっそ、許せねえよ……！次だ次！何する？」

「東ちゃん、なんかやったことあるゲームある？私達大体やってるから合わせるわよ」

そこまで考えて、今日は薄着の一ノ瀬先輩をチラと見る。

……待った、海に行くとしたらこれと横に並ぶの？

『これ』と比較されるのかあ……。

ちよつと、いやかなり、心にクるものがあるな……っ。

「むーん……じゃあ、これ」

「おつ、いいねえチヨロQ64。でもマリカじゃねえの？」

「いやチヨロQが実家にあつたから懐かしくなつて」

「分かるわ」

「すげー分かる。現役な俺んちがおかしいんだよな……」

まあいいや、後で考えれば。

ようし、もっと仲良くなる為にも今日は遊び尽くすぞー！

「くう……くう……」

「……先輩どうすんよこれ」

「完全に電池切れね。爆睡してるわ東ちゃん」

ぶつ通しでゲームしてたから無理もないかー、とは先輩の言。

確かに昼過ぎからゲームして今は3時半。

時間的にも眠くなる時間だし、まあわからんでもない。

人んちのベッド占領しやがって。別に構わねえけど。

「ねーねー、なんで急に来たかとか聞かないのお?」

「聞いても大したことなさそうだからいーっす」

「聞いて♡」

「……なんで来たんすか?」

「暇だったから♡」

「ほら見ろ。……冷めたしお茶淹れてきますよ」

今日の茶菓子は和菓子屋『安城』で買ったどら焼き。

滑らかこしあんが特徴の優しい味わいが売りだ。

そこに詰め合わせの一口サイズ和菓子セットを添えて来客用に出している。

どら焼きは5個セットで安かったものの持て余していたからちようどよかった。

一人一個ずつ出してたが、東は寝ちまったし先輩と俺の分にしてしまおう。

「ほいどーぞ」

「おー!ありがとっ」

先輩が袋を破いてもしやもしやと食べ始める。

……リスみてえだ。

口が小さいから一口が小さいとこ、頬にため込むとことかそっくり



だ。

結論から考えるが、東は『大人』ではない、と判断している。

先輩という成人女性と一緒に行動できている、つまりそういういった事象が発生しない人間なんだろう。

あるいは『大人』になるトリガーを持っていないのかもしれない。

……今考えるべきことじゃない、と思う。

こういうことを考えていると、どう足掻いても友達を懐疑的な目で見てしまう。

だと言うのに俺の頭は考えることをやめようとはしない。

目の前が見えてるのに、見えていない感覚になる。

そうだ、俺はずっと辟易としていた。

同じ大学の人間が子供に手を引かれていく姿に。

その子供が直前まで自分に声をかけていたことに。

無視した結果、そいつが連れていかれたことに。

じゃあどうすればよかった。

走ってそいつを呼び止めればよかったのか？

ただ構内で見かけたことがある程度の他人のために？

そいつのために人生捨てる覚悟をして。

そんなこと、友達にだってできるかわからない。

くっそダセエ。

そんなこともできねえ、ほんとに俺はどうしようもねえ……

「——美味——ここで買——賀?——」

なあ先輩、東。

俺、お前らと一緒にいいのかな。

寂しいだの一緒にいてえだの言ったけどさ、結局何も打ち明けられ  
てねえし。

友達を疑いたくねえとか言いながら、大人がどうか考えてる。

「——つと——賀？——大丈夫——？」

時折息をするのが、途方もなく苦しくなる。

もういやだと叫びたくなる。

でも諦めたくもなくて、諦めたくて。

もう、なにもかも捨てて終わりにしたくて——

「——志賀？どうしたの……？どこか痛い……？」

「あ……せん、ぱい」

ぐちゃぐちゃとした感情が視界を埋め尽くしたかと思えば、それが  
晴れる。

きらきらした目が、俺を見てる。

俺の頬に手を当てて、じっと見てる。

「……泣いてるの？」

「……え、あ、いや。ち、違いますよ、お茶が熱くって」

「まだ手をつけてないの？」

「ああ、いや……その……」

怖い。

先輩にだけは、拒絶されたくない。

どう思われたんだ。

情緒不安定な、おかしなやつと思っただんじやないか。

こんなんじや、東を笑えやしねえ。

「すみません、ちよつと、疲れてるみたいっすね。もうだいじょぶっす」

「……志賀」

今は先輩達が遊びに来てんだ。

雰囲気悪くするわけにはいかねえ。

ちよつと苦しいがなんとかごまかさねえと。

「あれっす、最近寝不足気味なんでそれっすよ。ほらたまにあるじやないっすか」

「志賀」

「だいじょぶっすよ。心配いりませんで。ほら、ゲームしましよ」

「……志賀、おいで」

だから、お願いだ。

やめてくれ。

そんな綺麗な目で、俺を見ないでくれ。

「隣座って。ほら、膝貸したげるから、横になって」

さらり、さらりと俺の頭を手が撫でる。

「知ってる？何も無いときに涙が出るときって、自分じゃどうしようもなくつらいときなんだって」

「……私、これでも先輩だし。志賀に何か、つらくて苦しいことがあるっていうのは分かっているつもり」

「私とか、東ちゃんに言わないってことは、雛ちゃんの時とは違う難しい問題なんですよ？」

「言いたくないことだってあると思うの。だから私は何も言わないし、聞かない」

温かい。

冷えきってヒビが入ってた何かが埋まるような気がした。

「だからせめて、辛いときは言っちゃようだい。安心して？膝くらいならいつでも貸してあげるから」

「友達が傍で苦しんでるときに何もできないのは、悲しいから……」

先輩……

胸がデカくて顔があんまり見えねえ。

大変申し訳ねえが今はそれしか頭に入ってこねえ……

「ふわあ……あれ寝ちゃった……えっ？」

あつ、東が起きた。

この展開、非常によろしくねえ……!!

「……志賀寝てます?」

「うん。今寝たところ」

「ふうん。……ちよつと安心したよ。こいつ疲れてるとすーぐ隠すから」

「ふふ、そうね。でもそういうところがいじらしいじゃない」

「そういうもんかい?じゃ僕もうちよつと寝るね……」

「はーい。おやすみ」

いやそうはならんだろ。

俺が言うのもなんだがなんか言うことあるだろおい。

俺の内心と二人の温度差が激しすぎてどう対応したらいいかわかんねえ……!!

「……ちよつと、先輩」

「しーっ。……ん、いい子ね」

……ああくそつ。

一生先輩には勝てそうもねえや。

そうだな、投げ出すには早すぎるよな。

俺はまだ諦めねえ。

まだ、頑張れる。

.

恋は酸っぱく愛は甘いなら友情はなんだろう

こんな形で考えるは無礼、無粋極まりないが、可能性の一つとして考慮しておきたいことがある。

それは『ストック』を可能な限り多く用意する方法だ。

色々と考慮したが、とどのつまり『非メスガキの異性と同棲する』ことが最も効率的なストック稼ぎであると言わざるを得ない。

それはつまり『先輩との同棲』を意味するということなのだが。というのも先輩以外は年齢的に、そして環境的に非常によろしくない。

雛ちゃんはご近所さんだが一緒に暮らすとは考えにくい。

最近家族と一緒に過ごす時間が増えて幸せなんだ。

俺がそれを邪魔するわけにはいかない。今までの分もしっかり家族に甘やかされてほしい。

蜜川姉妹は……オナーに俺が殺されかねない。

10代は特に多感な時期、そんな時期に大学生の男が傍に四六時中いるなどとてもじゃないがいいとは言えない。

それが辛うじて許されるのは声が赤い彗星のFBIだけだ。

そもそもどうやって？バイト先で寝泊まりでもしろというのか。

流石にそれは許されないだろ……

先輩とは気心知れてる仲であるし、今も休日の大半を一緒に過ごしているわけで。

何より休日遊んでる時も、大学で勉強教わってる時も、先輩と過ごす時間は心地いい。

何をするにしたってそうだ。

先輩がいい。

先輩じゃなきや、嫌になっちまった。

……なんでだろうな。

「あつ、あのね東ちゃん？ちよつと弁解させてもらえるかしら？」

「どうぞ。言っておきますが僕の気はあまり長くない。ここから先は、慎重に言葉を選べ」

「目エ怖ッ！」

僕の目の前にはみっともなく弁明をしようとする先輩。

しかし、僕は決して容赦はしない。

この先輩にはどうしてもね、言っつてやらねば気が済まないんだよ。

「あのね？そのお、そうっ！東ちゃんきつと誤解してるのっ！」

「はあ、なるほど。つまり自分は間違っつてない」と

「もっ、もちろんよっ！だつて、今までもずつとそうしてきたし……」

秋、それは僕にとって最も好きな季節。

こうして先輩と訪れているケーキ屋さんにも、多くの新作ケーキが並んでいる。



もつとも、注文は終えていて今はケーキに舌鼓を打ちながらおしゃべりに興じているわけだけでも。

「今までそうしてきたから。それが正しいとどうして言えるんだい？……現に、僕は今までずっと我慢してきたんだ」

「えっ、そうだったの……っ？」

「ああそうだよ。ここ一か月の間、先輩と遊ぶようになってからずっと悩んでたよ」

態々ガールズトークを名目に志賀をハブにしたのだ。

今日ばかりは一切の容赦もなく、言わせてもらおう。

「先輩、常々思っていましたけど今日こそ言わせてもらおう」

一呼吸、置く。

「いい加減人前で志賀とイチャつくのはやめてくれっ!!一緒にいる僕がいたたまれなくなるでしょうがっ!!」

「してないわよそんなことお!!」

この先輩は言うに事欠いてまーだ否定しているねえ！  
残念だけどネタは上がってるんだよねえ!?

「学食でぐい飯食べてるとき。ぐい飯食べてて口にもものついてる時、いつも志賀に拭いてもらってるよね。それも高頻度で」

「うっ。さ、さあ何のことかしらね……？」

「志賀にレポート教えるときの顔、鏡で見たことある？すつつつごい甘やかしたがつてるのが分かる顔してるんだよ？それ見ながらレポート進める僕と図書室で勉強してる人達の身になってほしい」

「うう……だ、だつて東ちゃん詰まらないでどンドン進めちゃうんだもん……頭いいし……」

「ありがとう。あとこれが多分一番だと僕は思うんだけど……」

一旦区切つて紅茶に口をつける。

二人の仲睦まじさを見せつけられてる分にはいいんだけど、こればかりは我慢ならない。

絶対に物申さねばならない。

「この前、三人でアウトレット行ったじゃないか」

「行ったわねえ。服とか本とか見るの楽しかったわあ」

「うん。僕もすごく楽しかった。友達と出かけることあんまりなかったし。でもさあ……」

「なんで二人は歩いてる時、隙あらば手を繋ぐの？バカップルなの？」

「えっ、嘘っ!?そんなことしてた私っ!?」

「そこは無自覚なのかよっ!!」

ほんとなんなんだよこいつらっ!!

その隣歩いてる時僕がどんな気持ちだったかマジで理解してなかったのかよっ!!

「あの時僕が何考えてたかわかるかい？ 『ああ……これデートに引っ付いてきたお邪魔虫みたいだな……』だよっ！」

「そんなことないわよお！ 東ちゃん是我的の大事なかわいい友達よお！？」

「それが分かっているから憎めないとここまで含めて全ツ部僕の鬱憤になっってるんだよお!!」

くっそマジで無自覚だとは思わなかった。

傍から見たら僕が当て馬にしか見えなかったあのお出かけ。

楽しい時間と引き換えに何故か無性に空しくなったのは何故なんだろうなあ!!

「この間も膝枕してたよね。まああれは人前じゃないけどさ」

「だって辛そうだったから……私が甘やかしてあげないとって……」

「そういうところじゃないかなあ」

先輩の志賀に対する甘やかしはちよつと、いやかなり度が過ぎてると思う。

これで好きじゃないは流石にまかり通らないよ？

「お節介だったらごめん。志賀は先輩のこと、間違いなく好きだと思うよ。その上で先輩はどう思っているのかなあっていうのは、気になるかな」

「うー……」

「かわいい顔しないの。……そこんどこどうなの？」

そう、僕はこれを聞くために今日のお茶会に来たのだ。

いい加減やきもきするのも嫌だし、いい加減くっついてほしい。

というか、これで明確に『好き』という答えじゃなかったら志賀が報われない。

流石に哀しすぎる。

「あのね……その、笑わない?」

「場合によるね」

「そういうごまかさないとこ、好きよお……」

先輩も唸ってはいるが、観念してくれたようだ。

それでいい。僕とて女子、こういうところでコイバナを摂取したいんだよ。

普段からこの人達のせいで摂取過多な気がしないでもないが、それはそれ!

「じゃ、じゃあ、聞いてくれる?あの、あのね……」

「……その、志賀のこと考えてるとね?胸がね、ちよつとずつ、ちよつとずつ痛くなるの」

「志賀と会える日はいつも起きてすぐ『あつ、今日も会えるんだな』って顔が思い浮かぶの」

「志賀と会えた日はね、寝る前に『明日もまた会いたいな』って気持ちになるの」

「もう、かわいいって言われてうれしいのが、あいつだけなの。あいつじゃなきや、いやなの」

「初めてのことばかりで、私にもよく分かんないの……。ねえ、東ちゃん……?」

「これって、好きってことなの……?」

「それって恋じゃない？」

「……そう、なんですかねえ」

自分の考えを整理したくて相談してみたものの、打ちひしがれている。

ここは和菓子屋『安城』。俺がいつも鼻肩にしている和菓子屋。話を聞いてくれてるのはその看板娘の寧さんだ。

おかしいとは思ってたんだ。

いつの間にかこの人やバイト先のお姉様方を見ても、前のようなテンションになることは、ほとんどなくなっていた。

「見れば分かっちゃうわよ。前まで、君が好きなお菓子買ってたでしょっ。」

「はあ、まあ、そっすね」

「最近は一回買ってた商品も、次に来た時もう一個買って、自分の分は別なのを買うって感じだったよね。美味しいと思ったのを一緒に食べて、新しいのを分けっこしてるのかなって思ったわねっ！」

「う……その通りっす……」

バレてた。普通にバレてた。

美味かったやつを先輩にあげてんのもバレてた。

だってめっちゃ美味しそうに食べるもんだからつい……なあ。  
んで、次買った奴を分けてることもバレてる。

だってすつげえ物欲しそうな目で見てくんだもんよお……

「ふふつ、それにね。前来てた時とは顔が違うもの」

「顔、つすか？」

「うーん、なんて言ったらいいのかなあ。前までは私目当てだったよね？」

「はつきり言いますねえ!?!……いや、まあそうでしたけどお！」

この人意外と明け透けに物言う人だな。

……俺、今までこの人のことよく知らなかったんだな。

「そうだった、でしょ?今はどう?ここに来的时候、何考えてお菓子選んでる?」

「……黙秘いつすか」

「ダメ！」

笑顔の押しつえー……言いたくねー……

けど話聞いてもらってる訳だし、言わねえ訳にもいかねえー……!

「……あれ美味かったから、先輩喜ぶかな、とか。これ珍しいから買ったつたら、先輩の興味惹きそうだな、とか」

「うんうん。他にはどう?」

「先輩はたしか粒あん派だったよな、とか。この間のは喜んでくれた、とか……ああー……ちよつと恥ずいんで顔見ないでもらっているか」

「やだ！」

くっそ、マジで冗談キツいぞこれ……！  
すつげえニヤニヤされてんの見なくても分かるわ。

「うふふっ、ごめんねっ。でもさ、随分その人のことが大切なのね」  
「……そりゃ、まあ。恋、かは分かんねえっすけど」  
「その内分かるわよ、その内ね」

いつも思うが、年上の女性つてのに勝てる気がしねえ。  
先輩もそう、寧さんもそう。  
なんでこう、男の下心だのを平然と見抜いちゃうんだかなあ……

「……あ、すみません。ちよつと電話出てきます」  
「はい」

一言断ってお店を出る。  
誰から……噂をすれば先輩か。

「はいもしもし」

『あつ後輩。ねえ、今暇？』

「はあ、ちよつと出かけてますけど。何か用事だったりします？」  
『んー、そういうわけじゃないの。東ちゃんとお茶してたんだけど、なんか胸抑えて帰っちゃったから暇になっちゃって』

「あいつなんか病気だったりします？」

『本人は「胃もたれしそう」って言ってたからそれかなあ』

「はあ……あいつ胃もたれするほど食ってたのかよ……」

東、そんなド力食いするような奴だったっけ？  
どうせ先輩の前でいいかっこしたくてやったんだろ。  
バツカでー。

『まあそれはそれとしてえ。……なんかね、あんたの声が聞きたく

なっちやって』

「なんすか急に。飯なら奢りませんよ」

『……バカ』

「バカですみませんね。声聞いたら先輩に会いたくなっちまったもんで」

『後輩、そういうのよくないと思う』

「わけわかんねえ……」

我ながら結構気の利いた言い回しできたと思ったのによお!!  
なんて言やあ正解なんだよちくしよお……!!

『……んふふつ、ねえ、後輩』

「はいはいなんでしょ」

『なんでもなーい。じゃ今からあんたの家向かうから』

「は？オイふざけんな今出かけてるつつた……切りやがったな!？」

今日の先輩何考えてんのかマジでわからんっ！

くそっ、しゃーねえ。買うもの買って帰るか。

「寧さんすみません、ちよつと急用できたんで帰ります。あつ、これ包んでもらっていいです?」

「はーい。カステラと三方六ね。少々お待ちをー!」

「……なんで三方六なんか置いてるんですか。たしか北海道のお土産でしょこれ」

「美味しいから」

それを言われちやなんも言い返せねえぜ。

「はいどーぞ。先輩さんによろしくねー!」

「宣伝しときます!」



即行で帰らねえと先輩が外で待ちぼうけしちまうかもしれねえ。さっさと帰って茶でも淹れとかねえとへそ曲げちまう。へそ曲げてもかわいいんだからほんと罪だよ先輩は。

俺にはまだ、恋だの愛だのは分かんねえ。

恋って燃えるようなものなのか？

愛って優しくなれる甘いものなのか？

そんなこと考える時間なんて、こんな世界じゃ一秒だってありはしなかった。

今だって考えるべきじゃない。

俺が生きているのは、オカルトともファンタジーともつかない、こんなクソみたいな現実なんだから。

だけど、それでも。

それでも許されるってんなら。

「……先輩と、一緒にいたいよ」

この間までの俺はグズって泣いちまう程弱ってたらしい。だが今は違う。

「こんなカスみてえな世界に、負けてられつかよ」

そうして俺は、正面から自分の気持ちと向き合えるんだ。必ず、戻る。

そしていつか、先輩と――

.

## 番外編：サンタがいるかは諸説ある

「クウリスマスがあ今お年もおやあつてくるう〜♪」

「浮かれてますねえ。小学生みてえだ」

「言っちゃダメだろ志賀。女の子はいくつになっても女の子なんだよ？」

「女子っつーか女兒だろ」

「聞こえてるわよツインバカ」

今年もやってくるわねクリスマスっ！

毎年いろんなケーキ、スイーツでお店が彩られる時期っ！

これにワクワクしない乙女はいないってわけよお！

「先輩と東はなんかすんの？」

「ケーキ買って家で食べる」

「別に何も。友達にパーティ誘われたら行くかなあつてくらい」

「なんて味気ねえクリスマスだ……。先輩に至っては食い気しかねえじゃん」

「そういう志賀は何をするっていうのさ」

「家に籠る。実家は親戚集まるから極力帰りたくねえし」

「君も大概だろ」

しけたクリスマスしてて、いつぞ憐れね……。

……ティンと来た！

「ねえ、だったらさ。クリスマスは三人で志賀の家集まらない？この調子ならどうせボッチでしょみんな」

「うるせえ一言余計っすよ。それに集まるったって、どうせ徹夜でゲームするだけになんでしょうが」

「黙れ。せつかくだからプレゼント交換しよっ！みんなで持ち寄っ

てっ!」

「やつぱ俺に当たり強くねえ?」

「ふーん、いいんじゃない? 僕参加で」

っし! 東ちゃん参加!

志賀はなんだかんだ言っても参加するだろうし、クリスマスは楽しいことになりそうねっ。

「んー……どうすつかなあ……」

「珍しいね。普段の君ならすぐ乗ってくるのに」

「いやまあダメってんじゃないけどよお。つかなんでそんな広くねえ俺のアパートなんだよ……」

そりやしようがないわよ。

東ちゃん家はゲームあんまり置いてないし、私の方は実家になっちやうし。

流石に実家に男二人(東ちゃん含む)連れて来たりなんかした日にはそりやあ大変なことになるからねえ!

「昼過ぎまでバイトなんで、その後でもいつすか?」

「決まりねっ! そんじゃ各自、プレゼントを用意しておくことっ!」

「はーい」

「うーす」

ふふふっ、楽しみねえ!

さて、来るべき日に備えて私もプレゼントを用意しとかないとねえ!

「うーん、プレゼントかあ」

ふふん、プレゼント交換。

クリスマスまで一週間、今からでも楽しみすぎるな……

さて、あげるものは慎重に、慎重に選ばないとね。

ここで白けるようなものは送りたいくないし、何より楽しいクリスマスにしたいからねっ。

「なんとなく欲しそうな物は分かるけど、うーん……」

となると、どつちに送られてもいいものじゃなきゃだよねえ。

そうなってくると志賀やっぱりゲーム関連かな。

レトロゲー好きではあるけど、新しいのもやらないってわけじゃないし、そこらへん？

先輩も志賀と同じでゲーマーだし、この辺が丸い所だ。

「……でも、僕っぽくはないよね」

そう、そこに『僕らしさ』はない

せっかく贈り物をするのだからね。

そこにはやはり『僕らしさ』があった方がいいんじゃないかな？

無難に失敗しないものでもいいけど、せっかく友達に送るんだし、ちよつと冒険したい。

「よーしっ、探すぞおー！」

「どーっすかなあー」

プレゼント交換なんて生まれてこの方したことねえ。

クリスマス、俺にとってあんまりいい思い出ねえし……

いやほんと、できればクリスマスは家で閉じこもっていたい。

なぜか？言わずもがな『メスガキ』の存在があるからだ。

クリスマス、一人覇気もなく歩く冴えない男。

そんな男を見つけては声をかけるメスガキ。

『クリスマスなのにぼっちなの？うわ、可愛いそ〜♡』

『お、大人にそんな口を利いていいと思ってるのかっ?!』

大人（雑魚）は肩を怒らせ、なんやかんやでその男の家やホテルに二人は消えていくという始末だ。

なんでそんなことになんの？ってくらい、クリスマスは訳の分からないシチュエーションが多発する。

これがあまりに嫌すぎて外に出たくないんだよ俺はあ!!

あとホテルは未成年者を通すな。どうなってんだ。

「……………ん、あれ？雛ちゃん？」

「あーっ！おに……………じゃなくて、志賀さんっ！」

「えっ、なんで苗字」

気だるい心のまま過ごす大学からの帰路。

家の近辺に差し掛かったところ、偶然にも出会ったのは雛ちゃん。そういえばもう小学校は下校時刻か。気づかなかった。

「そろそろおにーさんっていうより、名前で呼んだ方が大人っぽいかなーって……………えへへ……………」

「おお、なるほど。そうか、雛ちゃんもそういうの気にするお年頃かあ」

俺自身、どんな呼び方だって構やしない。

正直お兄さんって呼び方、ちよつとビクつくからなあ俺え！

「まつ、呼びやすいように呼んでくれな。……そうだ、雛ちゃん  
「なにー？」

「今年のクリスマス、どうなった？」

そうだ、俺はこれが気になっていた。

ずっと家族と疎遠気味だった雛ちゃんが久しぶりに、ともすれば物心ついてから初めてクリスマスを過ごせるんじゃないか？

これを聞かずに、俺は安心してクリスマスを過ごせねえ……！

「あつー！そうだったつー！聞いて聞いてつ。あのねつ！今年はみんな家にいるってつー！」

「おおー！マジかつー！やったなあー！」

っしややつたぜ！

あんだけ家巻き込んで色々あったんだ、クリスマスにまた寂しそうな顔してたらどうしようかと思ってたんだ。

最悪雛ちゃん実家に呼んでクリスマス会とかも視野にはあったから、安心したぜ……！

「おにーさんにも教えなきゃって思ってたけどあんまり会えなくて……あゝつ」

「いーよ、呼びやすい方で呼びなって。……そつかあ。ほんと、よかつたなあ」

「ほつ、ほんとは志賀さんとかおねーさん……一ノ瀬さんとも一緒にいたかったんだけど……」

「おいおい、それこそ勿体ねえよ。久々なんだ、家族にいつぱい甘やかしてもらいな」

両親も姉も、それはもう必死に休みを取ったんだろうな。

そりやそうだ、これでクリスマス一緒に過ごせねえつてなったら雛ちゃん泣いちまうよ。

考えて見りや、一人で家にいて静かにケーキ食べるなんて、小学生がすることじゃねえ。

「……あのね、おにーさん」

「ん？どした」

ちよつと屈んで目を合わせてやることを忘れない。

大事な時、大事な言葉はちゃんと聞いてやらないと。

「ありがとうっ！」

「おいおい、俺なんもしてねえんだけど」

「それでもっ！」

「……ん、そつか。お礼、確かに受け取ったぜ。先輩……一ノ瀬さんにも伝えとく」

後で先輩にも伝えてやんねえと。

しかしちよつとしか会ってねえのに、先輩もまあ好かれてるもんだ。

「うんっ！じゃあ、またね！」

「おう、またなー！」

雛ちゃんは元気に、幸せそうに帰っていった。

本当に、幸せそうで何よりだ。

ここ数年で、一番安心したかもしれねえ。



きつと雛ちゃんは、ここ数年分のクリスマスを纏めて、目一杯甘やかされることだろうな。

「……さて、俺もプレゼント探さねえと」

ちよつとだけ、クリスマスを好きになれたような気がする。

「つていうわけなんだけど、志賀の好きなものとか知らない？」

「プレゼント交換の話だったよね？なんで個人の好みになるの？あたし分かんないけど芽衣分かる？」

「私に振らないで、美樹……」

志賀の働いてる喫茶店、そこに今っ！私は来ているっ！

特に理由はないけど、強いて言うなら双子ちゃんの顔を見につ！

「いやね？あいつがゲーム好きなのは知ってるけど、それ以外の好きなもの知らないなーつて思ってたね？何か知らないかなーつて」

「それこそ大学で会ってるならおねーさんの方が詳しいでしょ。いつでも聞ける環境じゃん」

いやまあそうなんだけどねえ。

なんというか……こう……

「今更『好きなもの何？』つて聞くのもお……気恥ずかしいというかなんというかあ……」

「分かんない……。そういうのつて普通に聞くもんじゃないのー？」

くつ、素直に聞けちゃう中学生のその感性がツ！  
私は猛烈に羨ましいッ！

「そもそも交換するんでしょ？東さんに渡るかもしれないんだからおにーさんのこと聞いても仕方ないでしょ？」

「ん？ああ、そっちはもう決めてるわよ」

「へえ!？」

「じゃあ、なんでお兄さんの好みを……？」

なんでって、そりゃあ決まってるじゃないのよ。

「交換とは別に渡すからだけど」

「やほー、メリクリ。遊びに来たわよお」

「お邪魔するよー！メリークリスマス！」

「あい、いらっしやい。東テンションたっけえなあ」

「はいこれ。スーパー寄って晩ご飯の買い物してきたわよお。冷蔵庫しまっっちゃってね」

「二人とも寒い中あざーす」

夕方を少し回り、日も暮れかかってきたところ。  
先輩と東は手に荷物を抱えてやってきた。

「……あのさあ。東」

「ん？なんだい？」

「そのバッグからはみ出たクソデカイボードゲームっぽい箱なに？」

「おつ、鋭いねえ。交換用のプレゼントだよ」

「……じゃあ先輩、その抱えてるデカイ箱は」

「よく気づいたわね。プレゼントよ」

二人とも隠す気ゼロすぎんだろ。

なんで二人とも包装してる箱のデカさが50センチ超えてんだよ。

「とりあえずそこ置いとけ。邪魔すぎる」

「今僕のこと邪魔って言った……!？」

「今日のお前なんなんだよ。情緒不安定がすぎるだろ」

もう若干疲れた。

これから飯作ったりケーキ切ったりするのに疲労感が半端じゃない。

バイト帰りっていうのもあるだろうが、今日の東はヤバいかもしれねえ。

「はいはいちやつちやと晩ご飯用意するわよ。私準備やるから。志賀、運ぶのだけ手伝ってもらっていい？」

「えっ、いやいや。客に飯用意させるわけにいかねえですよ。俺やりますって」

「疲れてるでしょ。いーから座ってなさい」

……先輩いい人すぎんだろ。

でもなんもしねえってのも気が引けるし、箸とか器とか必要なもんだけテーブルに揃えとくか。

「まっかなおっはなーのー♪トナカイさっんはー♪」

「先輩テンションたっけえなあ。なあ東」

「いっつもみんなのー♪わーらーいーもーのー♪」

「オイオイオイ」

ヤベエなこの空間、IQ20くらいまで下がってんじゃね？

台所で夕飯の準備してる先輩と、エアコンかけて暖かい部屋でこたつに入ってる東。

相乗効果でこの部屋のテンションがえらいことになってやがると見た。

なんでえ？

「「ジー……」」

「……でもーそのーとしのー」

「「クリスマスーのー日ー♪」」

「サンタのおじさんはー」

「いーいーまーしーたー♪」

凄まじい圧に負け、歌っちまった。

いまいち俺がノれてないと見るや否や連携取ってくるの、結束力が強すぎるだろマジで。

「……仕事終わりの志賀、買い物帰りの先輩。始まる夫婦みたいなやり取り、僕じゃなきや見逃しちゃうね」

「なんか言ったか？」

「いいや何も」

「志賀ー！お鍋できたから運んでー！」  
「あいー」

「おっと、飯ができたっぽい。」

「米は炊いてあるし、三人集まるといふこともあつて今日は鍋だ。」

「ここ数年、クリスマスは家に閉じこもつて外の情報をシャットアウトする生活だったから、すつげえ大学生っぽいことしてると思うと涙が出そうになる。」

「あら、用意してくれてたのね。ありがとっ」

「いやいや、僕は何もしてないよ」

「ほんとに何もしないでそれ言うやつ初めて見たかもしれねえ」

「こんな下らないことでも笑える。」

「この時間が、いつまでも続けばいいのに。」

「ほら座つて座つて。……東ちやあん？寝ちやダメよ？」

「……ハッ、寝かけた」

「飯用意してる間コタツで寝るその度胸、いつそ褒めてやりてえよ」

「だろ？」

「今日のお前無敵か？」

「はいはい座つて起きてっ！準備できたわね！それじゃ……」

「「いただきます」」

「……くー……くー……」

「んでまた寝てんすか東は」

「おなか一杯だしゲームしたしではしゃいだから疲れちゃったんじゃない？」

「それはもう幼児だろ……」

「ご飯も済ませケーキも食べ終わって、先ほどプレゼントの交換も済ませちゃったからね。」

東ちゃんが寝ちやうのも、致し方なしね。

(にしても東ちゃん、いくらバレてないとはいえ男の家で寝るのはどうなのかなあーって思っちゃうわね……)

「にしても一瞬で終わりましたね、交換。まあ実質二択だからしゃーないっすけど」

「そうねえ……ぷぷつ、枯山水て……ぷぷぷ……」

「これマジでどうしたらいいんすかね、枯山水。積みまれた徳奪うゲームってことは知ってるんすけど」

後輩の手にはボードゲーム『枯山水』。

このメンツでこのゲームを選んだ東ちゃんのセンスはかなり光るものがあるんじゃないかしら。

これをドヤ顔で解説する東ちゃん、思い出すだけで笑顔になってしまいわねっ！

「東ちゃん、私のプレゼント喜んでくれててよかったわあ。もうすっつつつこい可愛かったわね！」

「東にデカいぬいぐるみってのはいいけどさあ。あれ俺に渡ってたらどうすんすか」

「いいじゃない、そんな時は大事にしてくれたでしょ？」

「そりやまあ……」

なんとももどかしそうな後輩の顔に、どこかいじらしさを感じてしまふ。

どうしていつも、心をくすぐるような顔をしてくれるのかしらね後輩は。

どうしてそんなところが、たまらなく愛おしく見えてしまうのかしら。

「んで先輩は俺のやつ。ミルとドリッパー、豆のセットっすね」

「ありがとう、大切に使うわね」

「……東が持ってたらドジって壊しそうな気がするんで、実はちよつと安心したんすけどね」

「あははっ、なんか想像できるわねっ！」

『うわあああ豆こぼしたあああ!!』とかすごく言いそうじゃないっ!?

想像するだけでちよつと面白いとかズルじゃないっ!?

「まっ、先輩が貰ってくれるんなら長持ちしそうっすね。大事にしてください」

「当然じゃない。いつかめちやめちや美味しいコーヒー淹れてあげるわよ」

「お？吹かしますねえ、現役喫茶店員の前で。楽しみにしてますんで」

お互い挑戦的に、にししと笑ってる。

うん、いつか、いつか淹れてあげる。

それがずうつと先になったとしても。

……約束したからねっ。

「あー先輩」

「んー?どしたの?」  
「……これあげます」

そう言った後輩が渡してきたのは、小さな紙袋。  
重さ的には……かなり軽い。  
小物が一つ入ってるかどうかって感じ。

「……ぷっ、あっははははっ!!そんなところでも私達って似るのねー!」  
「え、なに。っーことは先輩も?」  
「うんっ。はいどーぞ」  
「なんっーか、こっ恥ずかしいっすねえ……」

双子ちゃんに聞いて、その上で私なりに精一杯考えて選んだプレゼント。  
んト。

ふふっ、喜んでくれるといいんだけど。

「いいじゃないの。……ふふ、今から開けるのが楽しみよ、私」  
「さいで。……そうだ。ちよつといいお酒買ったんですけど飲みます?」

「おっ、いいわねえ。ワイン?」

「日本酒」

「お鍋の時に出せばよかったんじゃないのっ!」

「返す言葉もねえぜ……。取ってきますね」

それこそお鍋と合わせればよかったんじゃないかなあ!?  
もちろんいただくけどっ!

後輩が一言残して台所に歩いていく。

「ねえ、先輩」

後輩が爛する用意をしながらこちらに視線をやり、言葉をかける。



なんとなく、やわらかい雰囲気で、いつもより気分がよさそう。

「俺さあ、クリスマス好きじゃなかったんすよ」

「へー、意外。独り身云々気にするような性格じゃないって思ってたけど」

「そこは気にしてねえつす。まあなんだ、色々ありまして」

湯煎して温めた、これまたちよつとおしやれな徳利に入ったお酒を  
持ってくる。

寒い日に、これはいいものねえ……！

後輩気が利くう！

「だから、今日は二人が来てくれて嬉しかったです。また来年もやり  
ましょ」

「ふふっ、もちろん」

その時はまた、三人で。

言葉にはしないけど、きっと後輩ならわかってくれるはず。

「日本酒片手に言うのもなんですが。メリークリスマス」

「ここまでくるといっそ面白いわね。メリークリスマス」

プレゼント、喜んでくれるかな。

たとえ世界崩壊の日でも俺は犬にはならない

俺のいる世界がおかしくなった時のこと。

それを探ろうと考える度に思い出したくもない、ある日の悍ましい出来事のことを思い出す。

あれは大学に入ったばかりの頃の話だ。

時系列で言うなら……バイトを始める前、蜜川姉妹と出会う前からの話になる。

当時の俺はこの世界にほんの少しではあるが慣れつつあった。

世界が改変されるとまでは考えていなかったが、まあ遅かれ早かれ辿り着いてはいただろう。この世は地獄だと。

だがそのころからうつつすらとではあるが、この世界ってそういう、おかしなことが起きやすいんじゃないか？という考えには至ってはいなかった。

この世界がいつから改変されていたのか？という答えは今も出ていないが、もし起点があるとすればそれはどこか。

……この世界が異質であるということを確認させた出来事がある。

それは俺が東と出会った場所であり、俺のゲボという物理的汚点を作った場所でもある。

と言っても大した場所じゃない。

何の変哲もない道端で、そこに何か意味深な建物があるわけじゃない。強いて言うならコンビニが近いくらいだ。

本当になんてことはない、ただの道。

あの日、俺は大学のカリキュラムを確認し、せっかくだし普段とはちよつと違う道で帰ろうと思っていた。

そんな時、ある光景を俺は目にした。

それは小学生児童の集団下校だ。

『それ』は傍から見たら下校途中の児童に紛れた一人の女児でしかない。

それを見かけたときに何を考えていたかなんて覚えちゃいない。が、微笑ましいな、程度のことは考えていたんだろう。

『今日遊びに行っていない？』

『いいよー』

古今東西、どこでも見られるような風景。

学校帰りに子供が友達の家遊びに行く、そんな日常のワンシーン。

』

だが、あれと目が合った瞬間、そんな感情は即座に消えた。

『それ』は俺が嫌いな表情、面をしていた。

同時に、きつと世の誰かはあの顔が好きなんだろうな、とも思えた。

そんな思考を持つほどの余裕があったわけじゃない。

思考を放棄して考えることをやめなくては、心臓が止まるほどの恐怖に身を押しつぶされてしまいそうだったただけだ。

今まで見てきたそれとは違う何か、恐ろしいもの。

それが『ルール』それが『常識』それが『理』。

見ただけでそう思わせるような得体のしれない何か。

『うっ……お、えっ……っ！』

吐き気が止まらなかった。

気づけば路地に走り、その日に食べた物の残りを全部吐き出して

た。

『それを見た』という現実を、自分の中から吐き出してしまいたかった。

『おいっ！君っ!?!大丈夫かっ!?!どうしたんだっ!?!』

そしてそれを東、つまり今の友人達に見られてしまった。

傍から見れば子供達が近づいた途端に逃げ出して吐き出した姿は、子供恐怖症のそれに見えたかもしれない。

あながち間違っではないかもしれないが……

振り返れる今だからこそ考える。

あれはまるで、いや、まさか。でもそうだったら。

自分の中の疑念が一つ、浮き上がっては消え、浮き上がっては消え、そして一つの形になった。

あの時見たあれは、この世界の『根本』なんじゃないか——？

「まあそんなすぐ会えたら苦労しねえよなあ」

あの日見たメスガキの名前を、俺達はまだ知らない。

……一生知りたくねえなあ!!

時刻は昼過ぎ。俺は今、散歩がてらにあの子供を探している。

あの日、出会った時と同じ時間帯。

これは少しでも出会う確率を上げる為の算段だ。

……が、さつきから冷や汗は止まらないし、心臓がおかしなリズムになっていくような気さえする。

自分から虎穴を探し回っていると言ってもいいこの状況、控えめに言って狂ってる。

(確かこの辺で見た……んだよ、な?)

当時パニックになっていたせいで、あの日の記憶にあまり自信がない。

くそっ、情けねえ。

もっと注意深くあれの顔を見ていれば良かった。

いや、見てれば不定の狂気になったかもしれないと考えたら、見なくて正解だったのかもな。

(忘れるってわけには……いかねえよなあやつぱ)

あの日の記憶を掘り起こすのは少し、いやかなり気分が悪い。

だが、思い返さないわけにはいかない。

俺はもう決めたんだ。

絶対に、元の生活に戻る。

じゃなきやあつけらんねえケジメもある。

「あれー? ねえねえお兄さん、なんでこんな所にいるのお?」

雛ちゃんは、ずっと寂しがってた。

10歳にもならない子供には酷な環境で、ずっと俺に助けを求めていた。

それを俺はあろうことか、自分の置かれていた状況を免罪符に、ずっと遠ざけていた。

知らなかった、気づかなかったは何の言い訳にもならないんだ。

俺は謝らなきゃなんねえ。

「なんで大人なのにこんな時間にこんなところにいるのお？♡」

蜜川姉妹だつてそう。

初めてあつた日に起きたあの出来事は、二人にとって大きな傷になつてるのは明白。

俺のせいでそうなつちまったんだ、ちゃんと向き合わなきゃあならぬはずだ。

「ちよつとおー？無視いー？……生意氣い」

だが現実問題、あれに会つてどうする？

あれは何か、根っこから『違うもの』だったように思える。

そもそも会えるかも分からないのに、俺がやつてることに意味はあるのか？

あー先輩に会いてえ。

暇があれば先輩のこと考えてる気がする。

「ねえー!!ねえつたらー!」

「あーもううるせえなあ!あんだよ……げつ」

後悔するも時既に遅し。

目をやればそこには『やつ』がいた。

——見ればわかる。その風体、『メスガキ』だな？

その服装、あまりに薄着すぎる。

最悪の展開に近い。

「やーつとこつち見てくれたねっ♡」

「……やっちまったなあ俺え……」

マジで最悪だ。

考え事をしていたとはいえ、普段の俺ならこんな季節感お構いなしに薄着で話しかける子供、考えるまでもなく無視を決め込んでいただろう。

自分でも気づかないうちに焦っちまっていたのかもしれないねえ。

ともすれば元の世界へ帰る手掛かりになるかもしれない存在との接触。

それに自分から会いに行くという恐れに近い感情を受けて油断しちまってたらしい。

「ねえーなんでこんな時間にここにいるのお？しかもお兄さん一人でえ♡」

「……人探し中なんだよ。この辺で昔見た人を探してる」

「だからキョロキョロしてたのお？すごい不審者さんみたいだったけど？」

「はあ、気を付けるわ」

くっ……落ち着け！そんな安い挑発に乗るな！

いや確かにそうか。何の変哲もない道端で道行く人間を見てれば

不審にも映るか。

クソツ、メスガキに付け入る隙を与えちまうとは情けねえ。

だが、今発生している事象は以前、まったく同じ受け答えをしたことがある。

このままマジレスを続けてりや勝手に『つまんなーい』とか言つてどっかに行くのは経験済みだ。

そう、何も問題ない。

この程度の面倒、いくらでも切り抜けてきたじゃないか。

「ねー、もいつこ聞いていい?」

「ん、構わねえけど……なに?」

「お兄さんって、子供好き?」

「……あ?」

なん、だ、その質問。

ついさつきまで、今までのメスガキ事象のテンプレみたいなことしか言つてなかったろうが。

どういうことだ、聞いたことねえぞそんな展開。

「子供……」

どう受け答えするべきだ?そもそもまともに考えて答えが出る質問なのかこれは。

この質問、傍から見れば詰んでるようにしか見えねえが。

もしも好きと言つたらどうなるか。

考えるまでもない、変態扱いで煽り倒されるのがオチだろう。



じゃあ嫌いと言ったらどうなるか。  
子供相手にイキってる弱虫とか煽り倒される可能性が高い。  
どつちに転んでもいいことがねえ。  
なんだこの正解の思いつかねえ、まるで質問は。  
どうすりゃいい、どうすりゃ切り抜けられる……!?

「……………ああ、そっか」

そうか。

俺はそこから間違えてたのか。

「ねえまだあー?」

「わりい、ちよつと悩んじまった。うん、そうだな」

俺は馬鹿だなあ。

そんなん決まってるじゃねえか。

「子供は好きだ」

それ以外に答えなんかありはしねえ。

「へえく?子供が好きなんだあ?」

「ああ。子供はすげえからな」

「……………すごい?」

もはやこの子が事象そのものなのか、本当に存在する子供なのか。そんなことはどうでもいい気分だった。ただ少し、言葉にしたかった。

「高校上がったくらい頃か。職業体験で保育士やることになってさ」

「やるってなったときはめんどくせーって思ってたし、当日は俺もダチもみーんなテンション低くてさ」

今でも簡単に思い出せる。

どいつもこいつも「めんどくせー」ってのが顔に出てたし、俺もそんな顔だった。

「……んでいざ行って見たらよ、子供達はみんな目え、キラツキラしてんだよな」

「遊んで遊んでって、すげえ楽しそうな目で見てくるんだ。あんな目されたらやる気出さなきゃいけねって気になっちゃまってさ」

「ライダーごっことか、おままごととか、そういうのに子供達は全力なんだ。全力で遊んで、全力で楽しんで、全力で休むんだ」

体力が無尽蔵ってわけじゃないんだけどよ、その体力が尽きるまで遊んで遊んで遊び尽くす。

電池が切れたら寝て、起きたらまた遊び倒して。

……ああ。思い出したらノスタルジックになってきやがった。

「んでガキンちよ達が別れ際によ、男の子はまた遊ぼうぜつつって握手したり、女の子は好きですってちっちゃい花をくれたんだよ。まっ、もう覚えてねえだろうけど」

話始めたら、どうにも止まらない。

ああ、そうだ。

俺はどうしようもなく、子供が好きだった。

「あんな風に笑う子供達が、俺は好きだ。……答えになったか？」

「ふーん」

なんだこいつ。

人が真面目に話してんのに対して聞いちゃいねえよこのメスガキ。

「今日はおにーさんと遊ぼうと思ってたけど……いや、やーめた」

何を言い出すかと思えば唐突に『飽きた』宣言だと？

分からねえ、この変異型メスガキ。

考えていることがさっぱり分かんねえ。

思考に没頭している間に壁から背を離し、つまらなさそうに俺を見やる。

なんだったんだ今回の現象は。

「よいしょっと。じゃーもう行くね」

——俺はこの時までですっかり忘れてちまってたらしい。  
その目だ。

吐き気がする、胸糞悪い目だ。

人を人と認識していない奴の目は、いつ見ても気持ち悪い。

「けっ、二度と俺の前に現れんじやねえよクソつたれが」

「きやーこわーい♡」

「どこまでも人を小馬鹿にしやがって。まあ、俺は負けねえがな」

「ほんとに負けなかったね。偉いねー♡よしよししてあげよつかあ？

♡」

「いらねえよ。とつとどつつか行け」

「もー、やっぱおにーさんつまんなーいつ。まあいいけど」

「じやーね♡おにーさん♡」

「……じやあな」

瞬間、視界が暗転した。

そこからは何も覚えちゃいない。

「バイバイ、もう来ないでね」

小さく、誰かのつぶやきが聞こえたような気がした

「……いや来たいなんて言った覚えねえよ!?!」

目を覚ました時に最初に感じたのは、地面の硬さと冷たさ。  
誰かが俺の両頬に手を当てていることだった。

「——意識無し。呼吸は……ある」  
温かい掌だ。

体温じゃない、冷え切った何かが温まっていくような気すらした。

「見たところ出血もないわね。……けど顔色が酷い、真っ白」

次に覚えたのは、随分早口で焦った、よく聞き慣れた声だった。  
ここ数か月、この声を聴いている間だけは苦しいことも忘れられ  
た。

そんな俺の一等愛しい救いの声。

「……先輩、っすか」

「志賀?! 待って、動かないで。頭を打ってたら……」  
「ん、いや、心配いらねえっす。これは、そういうんじやあ多分ないん  
で」

少しふらついちゃうが、問題はない。

ああ、なんとなくだが理解した。

「帰ってこれた、のかもなあ」

「えっ？何？どうしたの？」

「なんでもねーっす。ちよつと地球をベッドにしてみたくなつて」

「シラフなら家のベッドで寝ろ」

「うす。すみません」

帰ってきたのか。

帰ってこれたのか、俺は。

あつ、じゃあやんなきやいけねえことがあるじゃねえか。

「……そうだ。先輩。ちよつといいっすか」

「どうしたのっ!?!どこか痛い？動かないとことかある？息苦しい？我慢してない!?!」

「好きです」

「……え？」

「俺は先輩が、一ノ瀬先輩が大好きです」

言葉にしなきゃいけない。

その思いだけが俺の口を動かしていた。

「ちよ、ちよっと待つて急になに？え？ドツキリ？」

「好きです。俺は、一ノ瀬愛佳が好きです。大好きです」

「ちよ待つて、急にそんな」

「先輩じやなきや嫌です。先輩以外の人を見る気はありません。一ノ瀬先輩だけが好きだつて、胸張つて言えます」

「ひえあああ……手、手え……！」

ずっと暗がりになっていた俺を、先輩は救ってくれたんだ。

苦しくて、苦しくて、息もまともにできねえあの世界で、先輩は俺を救ってくれた。

だから頬を伝うこの指が、手が。

この人の全てが愛おしいんだ。

「先輩。俺、ずっと先輩の傍にいたいんです。許して、くれませんか？」

「い、いやいやいや許すもなにも私は……ああもおー!!どうしちゃったの!?!やっぱり頭打つたのよねっ!?!」

ああ、楽しい。流石に気分が高揚する。

先輩の挙動、今俺が置かれている状況、未来への希望。

それら全部ひっくるめて、今の俺は無敵かもしれねえ！

「俺の実家に興味ありません？お袋が会いてえつてうるせえんすよ」  
「お願いだから話題を一つに絞つて……じつ、実家あ!?!いつっ!?!というかお義母さん!?!なんでそんな話になつてんのっ!?!」

いつだろうなあ。

なんとなく、戻ってきたんだろうなああつて感覚はあるが、一応確認はしておきたいからその後か？

マズいな、考えてることが次から次に口からついて出てきやがる。

これからしたいことが多すぎて、何もかもが楽しみでワクワクしちまう。

「っし、先輩。飯食い行きましょ。奢りますよ」

「さっきから言動がジェットコースターすぎるってえ……もういや考えるのやめたっ！奢ってくれるんなら行くっ！そこで改めて話は聞くからっ！」

「へー」

ああ、最高の気分だ。

勝ったんだ。

無様屈服ワンちゃんばかりのあの世界で。

俺は間違いなく、勝ったんだ。



## エピソード

「へえ、付き合うことになったんだあおめでとおー。そういえば三限って提出あったっけ？」

「そこまでノーリアクションだといっそ清々しいなオイ。課題出たろ」

「マジ?.....なんかの奇跡で終わってないかな」

かなりの重大発表だったにも関わらず、顔色どころか話題の一つすら変えやがらねえよこいつ?!何食わぬ顔でバッグ漁ってやがるだど!?

確かに食堂で言うことじゃねえかもしれないけど、そんな軽く受け流していい話題じゃねえだろ!?

「イエイやってあったあ!!過去の僕天才だわ神すぎる」

「気持ちわかる。.....なあ、マジでなんもねえの?俺めっちゃ緊張して話したんだけど」

「遅つつつせえよ。報告が遅すぎるんだよ」

さつきまで課題プリント手に持って気持ち悪い笑顔だったのに、途端にぶすつとした表情に変わりやがった。

いやでもよく見たら目が笑ってねえ.....!!深淵みたいな目をしてやがる.....!

「.....俺が遅いっ!?俺がスロウリイ!」

「僕からすれば君に言われて一ノ瀬先輩と初めて会った日から、え?これで付き合っていないとか嘘だろ?くらいには思ってたわあ!今更驚くかつ!」

「そんな前からかよっ!？」

嘘だろじゃあ初めからじゃねえか!

おかしい、あの頃はそんな素振りなかったはずだろ……?」

「もういい何を考えてるのか大体わかった口を開く必要はない」

「なにお前サトリ妖怪だったん?」

「今の君と相對したら誰でもサトリ妖怪になれるねえ……。その先輩は?まだ来ない?」

「二限終わったしそろそろじゃね?おつ、噂をすれば」

昼を先に済ませて駄弁つっていると向こうの方から見覚えのある人影が歩いてくる。

その足取りは軽く、いかにも『私!浮かれています!』と言いたげでかわいい。

「お待たせえ!待ったあ?」

「待ってない」

「呼んでない」

「ひどくない?散々泣いた後しばき倒すわよ」

「それは乙女に擬態したバーバリアンだろ」

「カウンターが思ってた数倍強い」

普段通りの生活が明日も続く。

そんな誰もが持つてる『当たり前前の生活』が帰って来たんだと思うと感慨深いものがある。

ほんと長かった。何年もあんな環境にいたと思うと背筋が凍りそうだ。

「そういえば今度の休みってあれだっけ?エアライドやる日?」

「ふぎけんなお前エアライドクソ強いからやりたくねーんだよ。なん

で毎回一人だけ平均ステが14くれーなんだよ。つか毎回俺のルインズをスリツクでぶっ壊しに来んのやめろ挙動が意味分かんねえよ」

「気合気合。後は細かい積み重ねだよ」

「東ちゃん、なんか特定のゲームやると『持ってる』って感じるのよねえ……」

東はどうも親の影響か、家に置いてあったゲームをやりこんでるらしい。

そのせいか、一部ゲームが俺と先輩で組んでも五分つてくらいに強いんだよ。

「にしても東もウチに馴染んだよなあ」

「そう?うれしいこと言ってくれるねえ」

「うん、ちよつと私が危機感持つくらい馴染んでるわね」

「危機感……?ちよつと先輩詳しく」

「志賀と先輩が抱く危機感、違うと思うなあ!!やめろ志賀そんな目で僕を見るなあ!!僕にそんな気はないってえ!!」

しかし東には悪いが次の休みは予定があるから集まれねえな。

「今度の休みつつーと……」

「……うん」

「意味深な目くばせ、目の前でやられるとすっげえめんどくさいよこれ」

「今のは俺らが悪かった」

「えっ、なにが悪かったのっ!?!」

「マジで言ってるっ..」

あざとい先輩もかわいいが今のはない。

なんかあれだな、付き合ってから先輩ちよいちよいその辺のネジ外れるな?」

「まああれだ。ちよつと用事で出歩くからな。わりい」  
「全然構わないよ。むしろ付いてったら絶対後悔するからいいよ。早く行け」

冷てえ……最近東が冷てえよ……。

日は進んで次の土曜日の昼前。

今は先輩との待ち合わせ中であり、俺は今か今かと心待ちにしているってわけだが。

「来ねえー……」

普段から時間ぴったりかちよい前に来る先輩が来ない。

ただこうして待つてるだけの時間が、不安だ。

恋人を待つ時間が不安でどうにかなりそうだなっておかしな話だよ本当に。

ようやく手に入れたこの時間が、また失われちゃうんじゃないかと思ふと足元がグラつく気さえ――

「しがーっ！待たせてごめーん！」

「ん、ああいえ、全然待つてません。むしろ助かりました」

「助か……？」

とてとてとすら言いそうな軽い足取りで先輩はやってきた。

あーもうかわいいなこの人お!!

もう悩みなんてどうでもよくなつてきちまうなあ。

「何はともあれ、今日はよろしくお願いします」

「いろんなところ歩いて回るんだっけ。でどしたの急に」

それはもちろん、確認だ。

この世界が本当に『メスガキ同人もの世界』じゃないことなの。  
だがバカ正直に言えば

『は……う？キモ……』

と言われることは間違いない。

もし先輩に嫌われたら俺は明日から生きていけない。

本気で。先輩は俺の光だ。

光のないところで人間は生きられないように、先輩のいない世界  
じゃ生きられないんだ。

悔しいだろうが仕方ないんだ。

「いやあ、よく考えたら俺、バ先とゲーセンと飲み屋以外で大学周辺そ  
んなに知らねえなつて」

「健全に大学生してるじゃない」

「人間としては不健全極まりないっすね。そこで先輩に色々教えても  
らいつつ、色々見て回りませんかつてことです」

言葉にしてみるとほんとに出歩いてねえんだな俺は。

その他だと商店街くらいで、子供がいそうな場所は徹底して避けて  
たから、必然的にそうなるつてわけだ。

麻雀。パチンコはなんか合わなくて手え出してないしな。

「んー……じゃ、今日は一日その敬語っぽいを取れない？」  
「え、なんですか」

唐突な話し方の制限で面食らってしまった。  
なんか気に食わなかったのか？  
嫌だ先輩に嫌われたくねえ。

「遊びに行くつてのに気い使うのやでしょ？」  
「別に先輩に気い使ってるつもりないんすけど。これ素」  
「距離感じるから私がやなのっ！」  
「かわいいかよ」  
「えへへ、かわいいでしょっ！」

かわいいが過ぎるだろうが。  
つつても先輩の前じゃ話し方はいつも素だし、変えんのも一苦労だ。

「それと！恋人なんだから『先輩』じゃなくて『愛佳』でしょ？」  
「一ノ瀬」  
「おい」  
「……愛佳さん」  
「……まあ許してやらんこともないわねっ」

ニヤニヤと喜びを隠しきれない顔でよくもまあそんなこと言えたもんだ。

恥ずくて顔見れねえ俺も俺だ。情けねえぜ。

「なんなら俺も下の名前でいっすよ」  
「じゃあ……たっくん♡」

「確かに俺に夢はねえけどさあ」

「あんたは夢じゃなくて私を守れりやいいのよ」

「へへ、違えねえや」

いつまでもこうして駄弁っていたいが、今日の目的はおしやべりじゃない。

この世界に帰って来たんだという実感が得たいがための、要はただの散歩。

「それじゃ早速行くか。最初に行く場所は決めてるんすよ」

「へえ？期待してるわよっ！」

「はい到着しました、近所の公園。ゲストは雛ちゃんです」

「志賀さーん！一ノ瀬さーん！こんにちはっ！」

「やだ〜〜〜！雛ちゃん久しぶり〜〜〜!!かわいい〜〜〜」

!!

「はいはい先輩どうどう。雛ちゃんこんー」

「こんー！」

志賀に連れてこられて到着したのは何気ない近所の公園。

デートで公園に連れてこられたときは百年の恋も冷めるかと思いきや、どうも雛ちゃんと待ち合わせしてたっぽい？

……ならよしっ！

「まあ待ち合わせってんじゃないやなくて、雛ちゃんが友達と遊びに行くのと時間被ったからその前に一ノ瀬さんに会いたいってなりまして」  
「もうっ、動機までかわいいっ」

そっか、お友達と遊びに行くのね。

そりやそうよね、こんなかわいい雛ちゃんだもの、誰もほっとかないわよねっ。

「一ノ瀬さんにもお礼が言いたかったの。仲直りさせてくれたからっ！」

笑顔がまぶしいっ。

私にとつて妹にも等しい（本当のお姉さんには悪いけども）雛ちゃんの笑顔！

ああ……何物にも代えがたいわ……

そんな笑顔を堪能していると志賀が私に小声で語り掛ける。

「あれから随分自然に笑うようになったんだそう。学校じゃ人気者なんだとか」

「そりやあそうよ私の雛ちゃんだもの。学校一、いや地域一……私がいるから地域二可愛いのよ?」

「そこは譲ってやれよ大人げねえ」

「一ノ瀬さんは私よりかわいいよ?」

うっ、邪気無く言われると、嬉しさと罪悪感がこみ上げるわね……

しかもそこに志賀のジト目が突き刺さる……!

「まあなんだ。雛ちゃんが笑顔で元気にしてるんならそれが一番だ」

「……うん、本当にね」



私も雛ちゃんと仲良しといっても、まだまだ日は浅い。だとしても、それでも雛ちゃんにはずっと笑顔でいてほしいの。……なんでかしらね？私って、別に子供好きってわけじゃなかったと思うんだけど。

「うんっ！……じゃ、私行くね！」

「ん、いってらっしやい」

「友達と楽しんできてね！」

ああああ……雛ちゃんが行ってしま……

私の癒しい……！よよよ……

おい志賀なんだその目は。

バカにしてんのか。

そのまま走っていくかと思いきや、雛ちゃんはくるっと振り返った。

まるでいたずらっ子のような顔で。

「ふふ、なんかパパとママみたいだった！」

「……は？」

「へ？」

「じゃーねっ！」

「……行きますか」

「そう、そうねっ」

その後も二人でいろんなところを回った。

「いらっしやいませー。……げ」

「私見てげって何!? 私なんかした!？」

「いやー……何したってわけじゃないんですけどおー……。ただでさえ片方だけでも空気が甘いのに的なあー……」

「うー……美樹を叱るべきなんですけど……言いたいことは分かっちゃやうね……」

「ちよつと志賀。私がいなくてどこでなにを話した。吐け」

「黙秘権を使用させていただきやーす」

志賀のバイト先にちらつと顔出したり。

「あら。あらあら志賀君。あらあらあらっ!」

「ツスウー……どもです寧さん……」

「志賀」

「違います。この人はそういんじゃないです。信じて」

「後で詳しく」

「……うす」

「ふふっ、そうなの、そうなのね。その人が『先輩』なのね! 会えて光栄だわっ!」

「ねえ。ひよつとしてあんた、色んなところで私のこと言いふらしてない?」

「……黙秘権っすね」

「吐けコラーツ!!」

「あらあら。……ふふっ、素敵ねえ。憧れちゃう」

志賀の行きつけらしい和菓子屋さんに寄ったり。

「オイオイオイオイ。先輩俺がゲーセン行ってねえ間に腕上げました？レゾン叩けると思ってなかったっすよ」

「ふふん。答える必要はない」

「まあスコアは俺の方が上ですけどね。罰ゲーム確定つすねえどんな気持ちい!?!」

「クソわよっ!!!」

「マタカツプルデゲーセンキテルゾ」

「シンドイ……キョウタイカエシテ……」

「カノジヨガホシインジャナイ。アンナカノジヨガホシインダヨ……」

あの日遊んだゲーセンでリベンジしたり。

ああ、楽しいなあ。

ねえ志賀、そう思うわよね。

でも教えて。

「何を、焦ってるの……？」  
「……」

今日一日遊んでいて感じた。

志賀はずっと必死になって『何か』を探しているみたいだった。それが見つかってほしいのか、見つからないでほしいのかは分からないけど……

ベンチに座ってさっき買ったアイスクリームを食べてる志賀は一瞬、ポカンとした顔で。

そしたらまた、変に作った笑い方をして話し出す。

「……はあ、先輩にはなんでもお見通しっすねえ」

フードコートで買ったアイスをさっさと口に放り込んで、咀嚼している。

私は飲み込むまで、待つ。

「ごちソーさまでした。さて何から話したらいいやらだなあ。人気が無いのはラツキーって感じだけど……」

直に夕暮れといった時間、確かに周りには人はいない。

んー、とか。あーでもなあ……とかボヤキながら頭をガシガシ掻いている。

そんなことを少しして、私もアイスを食べ終わったくらいになって決めたみたいで。

「じゃ、一から言ってくか。言つときますけど、クソバカみてーな話ですけどノンフィクションです。口調は、まあ、こっちが素みたいなものだから勘弁」

「そっちの方が男前じゃない」

「うっせ茶化すな。なあ先輩さ——」

「――消失、読んだことあります?……前にも聞いたことあったっけか」

そこから志賀は、長い話を始めた。

「――これで、おしまいです。倫理観と価値観のイカれた世界で孤軍奮闘する男の話でしたと。……どうでした?」

「ど、うって。そうね、まだ理解しきれてない、わね……」

話は荒唐無稽の連続だった。

メスガキ? 世界改変? 転移?

猜疑心と苦難に満ちたそれは、フィクションと笑うにはあまりに真に迫る話。

「じゃあさ、もし俺が『今の話全部フィクションです』ついたら信じてくださいっ..」

「志賀」

「……ごめん、今のは俺が悪かった」

腑に落ちる点は確かにある。

電車に乗る時、ゲーセンにいる時、一緒に出掛けるときはいつもそうだったもの。

いつもさりげなく周りを見ては落ち着かなさそうだった。

「だから今日出歩いたのは確認の為……ってのが一番の理由っすね。すんません、みっともなくキョロキョロと」

「じゃあ、初対面の時かなり辛辣だったのは……」

「その節は本当に申し訳ない。愛佳さんもそういう……イベント？みたいなもんだと疑ってたんで」

周りを気にするのは志賀が優しいから、私に気を使ってくれてたと思っていたけれど違った。

あれは志賀なりの、生きる上で身に沁みついた警戒心だったのね。

志賀はため息も隠さず、俯きながら額を手のひらで抑えて、苦しうに言葉を漏らしてる。

「俺も初めはさ、子供の言うことだして笑ってたんすよ」

「……でも、その内少しずつ、怖くなった」

「どの子もみんな、おんなじ表情なんだよ。同じような顔で、同じような状況で、同じようなことを言いやがる」

「俺がおかしいんじゃない、世界がイカれてんだ。……って何度も思った。でも世界が俺を否定してるみたいで……そのせいかな……」

「その辺歩いてる子供まで怖くなって、普段使ってる道も歩けなくなつて」

「夢も諦めた。最高に輝いてた思い出も、ついこないだまで忘れかけてた」

「つらかった。どこか行けなくなつたとかそういうことがじゃねえ」  
「普通に生きてて、ある日突然、それまでの自分の過去が全て否定されるのは信じらんねえほど苦しいし、なによりさ……」  
「……大切な思い出も、全部嫌いにならなきゃいけないのは、死にたくなるほど、悲しかった」

「……でも、今日はすつげえ楽しかったです。久しぶりに先輩と何の気兼ねもなく遊べましたし。だからあー、なんです？今は落ち着かないかもしれないねえけど……」

——馬鹿か私は。

なにが気を使ってくれてる、よ。

なに自惚れてんのよ。

すぐ傍で友達が、苦しいって、助けを求めてたつてのに。

なんて私は……どうしようもない……っ!!

「だからいつも通りにしてくれると早く……あれ？愛佳さん？先輩？  
どうし——」

だから私は立ち上がって。その泣きそうな顔を両手で捕まえて。  
馬鹿な後輩に、できる限り優しく。  
キスをあげた。

「——ツ!?!とっ、突然何——」

「うっさい。そのまま聞いて」

立ち上がろうとした志賀をベンチに座らせたまま抱きしめる。  
できるだけ苦しくないように、優しく。

「ずっと独りぼっちだったんでしょ……？苦しかったんでしょ……  
!？」

「なら、どうしてよお……」

「なんで、助けての一つも、言わないのよっ!？」

「私はそんなに、頼りなかったっ!?!後輩の悩みを聞きもしない奴だっ  
て思ったのっ!?!」

友達がこんなにも苦しんでいたのに、頼られるどころか、気づきも  
しないなんて。

涙が止まらない。

情けない、情けない、情けない——!

「……言っただって、誰も信じちゃくれないでしょ？笑われて『アニメの  
見過ぎだ』って言われんのがオチだ」

「友達が苦しんでるのを笑うわけないでしょっ!?!」

「にしたって荒唐無稽が過ぎる話だ。友達がいきなり『最近メスガキ  
ばっか見かけるようになった』とか言い出したら心の病気を疑うのは  
当然ですよ」

それでも諦めたような笑顔を崩さない。

傷ついて、半死半生みたいな顔でっ、なんてこと言ってるの……っ  
!

「それに先輩には十分って程助けられました。先輩がいなかったら



きつとどこかで折れて諦めて死んでた。だから先輩は俺の、命の恩人ですよ」

「救われてなきや助かったも何もないでしょっ!?今だってそんな顔してるのに……っ!」

志賀はまるで子供を安心させる様に、私の背中に手を伸ばす。

違う、違うっ!

それが必要なのは私じゃないっ!

そうされなきやいけないのはあなた自身でしょ!?

「……それはそうかもしれませんが。でも助けってくれっつたって、どうしようもなかったんすよ。世界全部が俺の敵みたいなもんでしたから——」

……っ、ああそう。

そういうこと言うのねあんたは。

「……なら誓ってやるわよ。よく聞きなさい」

「はぁ……っ!」

その頬を両手で抑えて、しっかりと私と目を合わさせてやることも忘れない。

これは私なりの、決意表明だ。

「私はっ!」ノ瀬愛佳はっ!!」

「たとえ世界中が、志賀巧を否定したってっ!世界が敵になっただってっ!」

「ずっと傍にいてっ!間違っってないって言うからっ!!」

「もし本当にあんたがおかしくなっただとしてもっ!私だけはあ

んたを肯定し続けるっ!!」

「それくらいしてやらないで、何が友達よ。何が、恋人よっ!!」

「私はあるたを、絶対に独りぼっちになんてさせないんだからっ!!」

自分のことながら、きつと酷い顔をしてるのが分かるわ。

メイクは涙で落ちて跡ができてるでしようし。

息だつて荒げてぜえぜえいつてる。

絶対乙女がしちやいけない顔だつて手に取るように分かる。

——だから?それがなに?

そんなこと、苦しむ友達<sup>恋人</sup>を前に、些細なことでしょうがっ!!

「私は、あなたが、好き」

「……俺もです」

「苦しいときは絶対に言つて。私が一緒に支えたげる。眠れない時も言つて。眠れるまで傍にいてあげるから」

「それが私の、あなたへの愛だから」

そんな簡単なことで、安心して夜眠れるなら安いもの。

もし逆の立場ならこいつだつてきつとそうしてくれる。

「……やっぱ、先輩には敵わねえっすよ」

「当たり前でしょ、先輩だもん」

恋は盲目と笑わば笑え。

こいつは生意気で、私とゲームで張り合うやつで、いつつも気だるげで。

一緒にいると犬みたいに傍に来て、私と一緒にいてくれる。  
そんな、私が一番愛する人なのよ。  
欠点まで全部愛してて、好きじゃないところなんて一つもない。  
そんな大好きな、大切な人なの。  
今だって私の肩に顔を預けて、下手くそに涙を隠してる。  
愛した人が私に身を預けて泣いている。  
それを愛おしいと言わずしてなんと言うの。  
依存？好きなだけすればいい。私もするから。

「今日は……いい夢見て、眠れそうです」

「あら、添い寝はいる？今みたいに泣いちゃわない？」

「泣かねえし添い寝もいらね。でも泊ってくならどーぞ」

「じゃお言葉に甘えるわね」

さつきまでの情けない顔はしやつきりとしてて、吹っ切れたようにも見えた。

きつと、これからは大丈夫。

大丈夫じゃなくても大丈夫。

私がつつと傍にいて支えるって決めたから。

その代わり……

「ごんだけ女に言わせたんだもん。絶対幸せにしてよねっ！」

「……なあに当たり前のこと言ってるんすか。ほら、行きましょ」

お互いにししと笑い合う。

うん、やっぱり私達はこうじゃないとねっ！

そうと決まれば早速向かわないとっ！

「愛佳さん」

「んー？なに？」

「愛してます」

「知ってるわよ。……志賀っ！」  
「はいはい」

「……多分これから、色々大変だと思うけど、頑張ろうね」  
「俺ならもう、大丈夫。だって、愛佳さんがいるから」

どんなに苦しくつても、どんなにつらいことがあっても。  
どんな場所だって、二人一緒なら幸せになれる。  
信じてるからね、志賀。

「いや職質とか。私連れて歩いてたらほぼ確実に捕まるわよ」  
「……いやそこは自分で否定しろよ!？」

「ぼーぼー♡」

I F : f e a t . 東 夕貴  
I F : 俺はただ東へ向かう

今日の俺は疲れていた。

一、二限の授業の後、たまたま残ってたところを教授に頼まれて次の講義に使う資料運び。

しかも教授の長話に付き合わされて昼飯食い損ねた。教授と仲良くするに越したことはねえけど、流石に昼食えないのは困る。

「腹減った……」

さてどうしたもんか。外のベンチに座って考える。

今の時間は1時半。うちの学食は2時には閉まる。

今から学食というのも、担当のおぼちゃん達に悪い気がする。

かと言って外食……大学構内から出たくねえ。

こないだ知り合いつぽいやつがメスガキに手を引かれていたのが脳裏にチラつく。

「……チツ」

その手を引いて行った事象メスガキに苛立つ。

そいつに声をかけてやれなかった自分に苛立つ。

誰が悪い訳でもなく、ただそういう事象が起きているだけとは分かっている。苛立ちが抑えきれずに舌打ちが鳴る。

そういえば前に、お前はいつも眠そうな目だなんてダチには言われたっけか。

今の俺は、どんな目をしてるんだろうな。

鏡を見るのが嫌になったのはいつからだ？

そんなどうでもいいことを考える。

(……考えるな、考えるな、考えるな……)

メスガキ事象のことなんて考えても無駄だ。

そんなことをしても俺の環境は何も変わらない。

なら考えない。考えないで、これからどうするかを模索するべきだ。

そう自分に言い聞かせることで、辛くて苦しい現実から時間稼ぎが出来る。

(……助けてくれ)

俺はいつまでこんな世界で生きていかなきゃいけない？

この世界から出ていく方法はないのか？

俺を取り巻く全てが、俺を追い詰めるためにあるんじゃないかとすら思えてくる。

(誰か、助けて、くれよお……)

疲れと苦しきから、気持ちの悪い本音が胸の渦巻く。

馬鹿馬鹿しい。誰が信じるってんだよ、こんな状況。

仲がいい……いや、仲が良かった友人の顔が思い浮かぶ。

テメエの都合で離れていった癖に、都合のいい頭していると自嘲する。

「——おや。おやおやおや、随分久しぶりじゃあないか」

項垂れた俺の頭に影が差す。

誰だよ、今の俺に構うやつなんかいんのか……？

そう思い顔を上げると、懐かしい顔があった。

「……東か」

「まったく、久しぶりに交わした言葉がそれかい？ 散々僕を無視して回っておいて」

「……わりい」

東 夕貴。

俺の、大学に入ってできた初めての友人。

学外で吐いて倒れてたところを助けてくれた、友達思いな男。

——『大人』の疑いがある、友人。

「ここ数か月随分……いや、もうこれ以上は言うまい」

「……言いてえこと、山ほどあんだろ。聞くよ」

「バーカ。そんな顔して言う言葉じゃないよ。鏡見る？」

いらねえ、とだけ伝えて突っ返す。

こんな時にあれだけど、手鏡持ち歩いてんのかこいつ。

女子か。

「……なあ、今は関わんねえでくれねえか」

「はあ？ そんな余裕のない顔でどこ行こうって言うのさ」

「分かんねえ。何も、分かんねえ、けど」

煮え切らねえことは分かってる。

東の言う通り、今の俺には全く余裕がねえ。

だけど、誰かに頼ることもしたくねえ。

誰かを信じた結果、そいつがこの世界の法則に従って無様を晒すかもしれない。

友達から距離を取ったのだってそうだ。

さつきまで友達だと思って話してたやつが、次の日にはどこもしれない路地や陰に消えていくかもしれない。

東がそうなるのは、絶対に見たくねえ。

幼稚な現実逃避なのも分かってる。

それでも目の前で起こるよりは、ずっとマシだから距離を取る。

「あのねえ、志賀。君が何を悩んでいるのか知らないけどさ」

「……」

東が俺の隣に座る。

脚を組んで人差し指を立てて、つらつらと自慢げに語りだす。

「僕はこれでも、試験じやいつも上位でき。言うなればすごい頭いいんだよ?」

「……その発言が頭悪そうだけどな」

「うるさいっ!とにかくっ!困ってるなら頼れって話っ!」

ああ、そうだ。

こいつはそういう顔する奴だった。

「だいたい、友達が困ってる時に見過ぎすなんて、そんなのありえないだろう?」

「話したくないのは分かったよ。なら聞かないで置いてあげるからさ」

「……だからさ、また友達しようよ」

「無視とかされるの、結構寂しかったし、さ」

困ってるやつを見過ぎさせない、優しい奴だったな。

「……あー!それにしてもお腹空いたな!誰か友達に無視されて傷



心な友人にご飯奢ってくれる人はいないかなあー！」

「何言ってるんだこいつ」

何言ってるんだこいつ。

そんなやついるわけねえだろ。

「おーごーれーよー！友達寂しがらせたんだから当たり前だろおー  
！」

「……つたく、しょうがねえなあ」

「あつははははっ！ほーらー！飲ーめーよおー！」

「ああああめんどくせえよお前え!!酒癖悪いなら先に言えよマジ  
でえ!!」

どうしこうなった!どうしてこうなった!!

俺はただ昼飯食ってる時に「そーいや最近飲みに行ってるねえな」つ  
て言っただけなのにッ!

そしたら『じゃそれも奢りでいいよ』とかこいつが抜かしやがって。  
まあ今までの行いの分返すと思えばいいだろ……とか思った俺が  
浅はかだったよ畜生があ……!

「どうせえー、僕に隠れて男でも作ってたんらろおー!?今まで何して  
たか吐けえー!」

「それを言うなら女だろ……。あと先に吐きそうなのはどう見てもお  
前だぞ」

「僕あ酔わないんだよお！」

「うぜええええ……！絡み酒かよこいつ……！」

大誤算だ。こいつの酒癖を知ってるなら絶対に居酒屋には来なかった。

幸いなことに今座ってるのは半個室。

背もたれの壁が高くなっていて他の個室は見えなくなってる。しかも廊下側はカーテンがある。

すなわち、このバカの醜態は人目に晒されないし、喧騒に紛れて何言ってるかも聞かれない。

それだけは東にとつて不幸中の幸いかもしれない。

「僕というものがありながらあ！どこの誰にうちゅちゅを抜かしてえ！」

「お前は俺のなんなんだよ。ただのダチだろ。ほら水飲め」

「んくつ……ぷはあー！僕あねえ！君があ教室から出てく時ねえ！ねえー！いっつもさびしそーにしているのを心配してねえ！」

「分かった分かった、悪かったと思ってる……！」

「わかつてなあーいっ！」

もうどうすんのが正解なんだよこれ。

酒癖がおかしい奴は先に酔うのが正解（正解ではない）なんだがこいつ酔うのが早すぎる。

まだ二杯目だぞ。しかもウーロンハイしか飲んでねえ。

「君はいっつもそうだあ！友達思いな癖にい、デリカシーってもんがないよお！」

「それ今言うことか？大体男同士にいるもんじゃねえだろ」

「カッチーン！」

「自分で言うのか……！」

俺の言葉の何が気に食わなかったのか。

それを考える間もなく、東がおもむろに席を立て俺の隣に座る。

「なあーなあー！ほんとにいい？何にも分かんないのかあい!?」

「何がだよ……。ああいや、心配かけたのは悪かったって」

「そこじゃなあーいつ!」

「ハア?」

酔っぱらいの思考回路はもう何も分かんねえよお……。!!

もうあれか? さっさとお勘定済ませて出てった方がこいつの為なんじゃねえのか?

そう思ってた矢先、東が唐突に来ているYシャツのボタンを目の前で外しだす。

「上等だあ。見れろよお……。!!」

「おいやめとけやめとけ。いくらお前でもそんな趣味俺には——」

「……。じゃーんっ！ほらあ！ちゃんて見ろお！僕だってブラくらいつけてんだろがよお！」

脳が、思考を止めた。

俺の目には、薄いピンクの、——

「……。ツ!? バカツ!! 隠せ隠せ隠せツ!!」

「ほぶっ」

脱いでいた上着を頭から被せて東を覆う。  
周りの、そして俺の視界に入らないように。  
急いで周りを見る。  
が、さつきも言ったがここは半個室。  
座席で立ち上がりでもしなければ覗かれる心配はいらない。  
……だが、分かっているても心臓に悪い。

「は……う？え……う？いや嘘だろ……」

信じたくない。

え、俺ってそんなに鈍いことあるか？  
だって、だってこいつとはもう一年近い付き合いがあつて。

「え……う？じゃ、じゃあ俺は今まで……」

少し、考えた。

「女……女ア?!?!?!」

クソバカ過ぎるだろうが俺エ!!  
何が『大人』だよッ！何が『メスガキ』だよッ!!  
俺が勝手に疑心暗鬼になってただけってことじゃねかよーっ!!

「ああああああ……マジで最悪だ俺……。トリプルで最悪だ……」

友人を勝手に疑って勝手に離れたこと。  
その友人の性別を一年間勘違いしてたこと。  
拳句の果てにそれを本人の与り知らぬ所で、しかも嫁にいけないよ  
うな形で知ってしまったこと。

「ヤバいやバいやバいや……！」

脳裏からさつきの光景がチラついて離れない。  
薄いピンクに、大きくこそないが確かにある膨らみ。  
真っ白な肌に映えるピンクが焼き付いて――

(考えるな、考えるな、考えるな……!!)

そののせいか、酒のせいか、アルコールが入った頭では分からない。  
だが頬が熱い。  
心臓がバクバクと音を立てて周りの音が聞こえない。

「……………」

さつきから上着を被った東がしゃべらない。  
細心の注意を払って顔だけ出してやると……

「すうー……すうー……」

勢いよく被せたせいか、そのまま勢いで俺の太ももの上に頭を乗せ  
たらしい。

そして、そのまま寝やがった。

「……………どうすりゃいいんだ」

西へ東へあたふたと

「……………んう……………眩しい」

ぼんやりとした視界、頭。

起きてすぐに僕が感じたのは、布団の温かさだった。

「あれえ……………昨日はあ……………」

昨日は……………どうしたんだっけ。

なんか久しぶりに志賀とお酒飲もうって話になって……………

「いたたた……………うう、頭が……………」

ダメだ、ズキズキと痛む頭で考え事なんかするもんじゃない。

とりあえず水でも飲もうと体を起こす。

……………が。

「……………へ？(っ)どいっ？」

「俺の家」

「んひいっ!!」

意外っ、それは横っ！まったく気づかなかったっ!!

目が覚めて見覚えのない部屋だった困惑も相まって人がいることに全然気づかなかったっ！

座布団に座って呆れた目で見ている志賀はため息を隠そうともしない。

「なっ、ななななんでっ!!」

「おめーが酔いつぶれたからだろ。それに東ん家の場所知らねえし」  
「どっ、どどどどうして!?!」

「ほっとけねえだろ。店の人にも迷惑かけちまうからな」

言ってるあれだけよく伝わるねっ!?!

ってそんなこと言ってる場合じゃないっ!

だって、だってっ! 酔って同級生の男子の家に……っ!!

「……なあ東」

「なっなにいつ!?!」

「声裏返ってんぞ。……昨日のこと覚えてるか?」

昨日、昨日……??

大学出て、家帰って、着替えて飲みに行って……

「……お店入った頃から、覚えてない」

「まあじかあ……」

え、なに怖い怖い怖い。

なんで言い淀むの。なんで顔を手で抑えてるの?

「先に言っとくけどお前が思ってるようなことはねえぞ。俺は床に座

布団とクッション敷いて寝た」

「オイそれどういう意味だよ」

「そういう意味だよ」

「広義的解釈ができる言葉でごまかすのやめろお! 不安になるだ  
ろおっ!?!」

クソオ……なにがあっただんだ昨日の僕う……!!

で、でもひとまず運んでくれたことにお礼言わないとだよね。

ここがどの辺か分かんないけど、大変だったろうし。

「その、運んでくれてありがとう。大変だったろ？」  
「いや別に。軽かったしな」

僕が重いなんてことは万に一つもないけど、それでもお礼は言わなきゃ。

すっかり忘れてた、僕お酒に弱いというか、耐性がほぼ0だった……

……いや待った。

……、志賀の家だよ。

ここまで酔いつぶれた僕を運んだんだよ？

服……変わってない。まあ当然は当然だね。

この感じだとシャワー……は、浴びてない。ちよつと気になる。乙女的に。

「……しが」

「……」

「その、さ。僕が、その……」

うあ、ええ、なんて聞けば……。

なんかほっぺたが熱くなってきた気がする……!!

「単刀直入にき、聞くからね？その、さ」

「見た？」



「……俺は悪くねえ!!」

「開き直りやがったなあ!」

こっつ、こいつう!!

乙女の秘密を垣間見やがったくせにつ!言うに事欠いて『俺は悪くねえ』だとお!?

「あんなんどう避けろつてんだよツ!またバカやってるよとしか思わねえだろ普通ツ!」

「避けるも何も目を逸らすとか……いや待て待て待て聞き捨てならぬ言葉が聞こえたぞ。てことはなにか?君はあれか?僕が自発的に教えたとしても言いたいのかっ!」

「むしろ俺は隠したんだよ……ツ!俺だつてお前が飲んでる真つ最中にいきなり脱ぎだすとか思わなかった……ツ!」

嘘、だろ。

僕が、お酒に酔って脱いだつてこと……ツ!?

この僕が……ツ!?

「いや酒に弱いことは自覚しとけよ」

「うっさいっ!そんなことより責任取れよお……うう……」

……冷静に振り返ると、僕は何を言ってるんだ。

酒の席のことを責任を取れと、むちゃくちゃにもほどがあるよ。

うう、色んな恥ずかしさがこみ上げて顔が熱いし涙が出そうだ

……っ!

「……ああくそつ、分かった。俺にできることならする」  
「……ほんと？」

僕が言うのもなんだけど、志賀はちよつと人が良すぎると思うんだよ。

詐欺には合わないだろうけど、簡単な嘘だったら引つかかっちゃいそうな気がする。

う、ここにきてなんだか付け込んでるみたいで罪悪感が出てきた……。

「女泣かせたんだからそりやまあ、責任取らねえとだろ」  
「むう……」

律儀な男だよ本当に。

酒の席でのこと、流したって責めはしないのに。

……でもちよつと後ろ向きな感じがマイナスポイントだ。

「い、いや。僕もずっと分かってて隠してたし。これまで通りにしてくれれば……それで……」

「……お前がそういうんならあんま言わねえけどよ。ほんとに悪いけど、俺にもどうしたらいいか分かんねえし……」

そう言うとバツの悪そうな顔を上げて、何かを思い出したようにテレビ前の棚を漁りだした。

ガチャガチャ音がするけどあれは……コントローラー？

「詫びになるかは分かんねえけど、面白えゲームならあるぜ。せつかくだしやってかね？」

「……ふーん、面白くなかったらどうしてやろうねえ」

「そんなときや奴隷でもなんでもなってるよ」

「言ったなあ?」

ふふん、これでも僕はゲームやりこんでるんだよ?

やってた機種は古いけど……よく見たらこの家にあるのも結構古いなっ!?

「対戦とRPGどっちがいい?」

「RPGがいいな。うわあ、ゲームするの久しぶりだよ」

「おっ、いいね。んじやこれにすつか、メタルマックスリターンズ」

「これみよがしに見える聖剣伝説やロマサガを勧めない当たり自信があるを見た」

「紋章の謎でもいいぞ」

「名作ラインナップだなあ……」

今やVCがある時代でこれほどのソフトを管理してるなんて正気の沙汰とは思えない。

これゲームソフトだけでも相当な価値があるんじや……!?

「まあ……なんだ。少しでも楽しんでもらえたら、嬉しいんだがよ」

なんとというか、なんだその、いじらしい表情はよお!?

こんなっ、こんなの許すしかないだろうがよ……っ!

「……まったく、気にしないでいいよ。友達だろ?」

「ありがとよ。……っし、早速始めっか!」

「そーいやこれのキャッチコピーってなに? 竜退治はもう飽きた的な」

「『首は貫った』。今作から賞金首狩りが更に捗るぜ」  
「なあこれ女子に勧めるゲームじゃなくない？」  
「め、名作なのは間違いねえから……」

志賀の家でゲームを満喫した次の日、僕は相も変わらず登校する。  
講義に出るのは大学生の義務であり、権利である。  
したがって講義に出るのは当然。

(だるい~~~~~)

すごくだるい。

結局昼前から夕方までぶっ通しでメタルマックスしていたせいで  
その余韻が抜けきらないからかな。

講義に出ている今、ゲームがしたい気持ちでいっぱいでも全く身が入らないよ。

志賀はこの選択単位取ってないし、退屈さに拍車をかけている。

これはあれだな、凄い嫌な予感がする。

ここから成績と単位を落としまくる最悪の未来な予感。

そう考えると少しは気持ちに喝も入る。

にしても志賀にあんな誠実な一面があるとは。

最近まともに話してなかったし、どんな風になってるかと思えば、  
存外普通だったし？

(……つかしいなあ、ここしばらくは一人で勉強してたはずなのに)

こうして一人で講義を受けているとなんか、調子狂う。

まるで気分は小学生だ。

なんだろうな、久しぶりに会えた友達と早く遊びたい、そんな気持ち  
が先走っている気がしてそわそわしている……!!

これ終わったら学食で集合予定だし、それまで気を張らないと。

……よっし、頑張るぞっ。

「——っわけできつき知り合ってレポート教えてくれた。先輩、  
自己紹介どーぞ」

「一ノ瀬愛佳ですっ！よろしくねっ！」

「キッツ」

「表出ろやコラ」

……は？

「は？」

「えなんでキレてんの怖い怖い怖い」

「あんたがなんかやったんじゃないの？」

「今のやり取りでなんかやったように見えんのかよ先輩乙」

「いい加減にしないとぶっわよっ!？」

……面白くない。

僕が、一年かけてやっと友達に戻れたのに、平然とやり取りしてる。

「な、なあ、なんか俺東の機嫌悪くするようなこと言ったか？」

「べつつにー。僕が必死にノート取ってる中他の女子生徒にうつつ抜かしてたなんて気にしてないし?」

「語るに落ちてない? なにこのウルトラかわいい子。友達?」

「かわいいかはさて置き友達。……東、俺はこれが女子だから関わってるわけじゃねえぞ」

「どうだかねえ……」

「これ? この後輩今私のことこれって言った?」

どーせ男なんてみんなこういう、小さくてなんかかわいい人に庇護欲を抱くんだ。

悔しいだろうが仕方ないんだ。

「僕みたいな中性的なのはニツチ層にしか受けないんだあ……!!」

「そんなことないと思うんだけどねえ。東ちゃんって言ったっけ、こんなに素材がいいのに……」

「……こいつが女だって、つい昨日まで気づかなかったやつがいるんですよ。俺なんですけど」

「はあっ!? 嘘でしょこんな可愛い子をお!?!」

「訳あって最近までこいつとの交流絶ってまして。いや誰が悪いかったら100俺が悪いんですけど」

「ふうーん」

ムカつく、ムカつく、なんかムカつく。

僕より後から出てきて、僕と違って『異性』っていう認識をされるのもそう。

そしてなにより、その事にデレデレもせず普通に過ごしてるこいつ!!

理屈もないし理由も思い浮かばないけどなんか腹立つう!!

「それはもうあれね。恋ねっ！」

「なにいつてんだこいつ」

「先輩への敬いとかない感じ？あと東ちゃんは初対面よねっ!」

「そんなけーしてまーす」

「初めまして僕は今不機嫌です」

「二人ともクセが強いのよ……」

一番クセが強い人が何言ってるんだろう。

というかフリル多っ。春先とはいえ暑いでしょ絶対。ある意味尊敬する。

「んまああれだ。言うまでもねえかもだけど、俺はお前と友達やめたわけじゃねえからな」

「……乗り換えようとしてるわけじゃない？」

「友達を乗り換えってどういうことだよっ!」

「友達グループの乗り換えってなんか生々しくて嫌ね。サークラして次行くヤバイやつみたいで」

「志賀は……なんかナチュラルサークラ感あるよね。一人と仲良くなってそのままズブズブ周り巻き込みそうな」

「うわタチ悪っ」

「サークラっぽいつて悪口なの分かってんのかテメー」

……あれ、気づいたら普段通りみたいな空気になってる。

むむむ。この先輩、さては結構志賀と似たタイプと見た。

ほぼほぼ初対面であろうにこの連携の良さ、相性の良さを感じてしまふ。

(そこにいたの、僕だったのになあ)

なんだかちよっぴり、寂しい気もする。

「ねえ、東ちゃんって呼んでもいい？」

「いやです。志賀を取ったので」

「えっ」

「あつ。志賀っ、今のは」

「……あ？わり、昼飯のこと考えてた。なんか言ったか？」

「クソボケがよ」

「ちよつと人生やり直してきなさいよ」

「なんでそんなボロクソ言うん？」



東屋にはノスタルジーが隠れてる

「夏休みすげー暇なんだけどなんかしねえ？」

「はーい、灼熱激辛鍋我慢大会っ！」

「さようなら。東は？」

「んーと……そうだ、父さんが別荘持っててさ。しばらく使ってないから掃除しに行くんだけど一緒に来るかい？」

「……別荘って単語をリアルで聞くの初めてかもしんねえ」

「……東ちゃんちって、ひよつとしてお金持ちい？」

「ここまで来といて今更なんだけどよ」

「ん？なんだい？」

さて、二人を別荘に誘っておいてなんけど、とても大きな問題に直面した。

別荘近くには沢があるからそこで涼めるというのを予期して水着持ってきておいてーと言っておいたんだけど。

「なんでお前の水着買うのに俺がついてく必要があんだよ」

「しょうがないだろ、まともな水着持ってないんだよ」

そう、僕は水着を持っていない。

高校の頃に来ていたスクール水着以外にまともな水着が無いと知ったとき、ここ数年で初めて味わうほどの焦燥感だった……っ！

きっと二人はバツチリ決めてくるだろうことを考えると、僕だけスク水なのはひっじょーにマズい。というか絶対恥ずい。

「だからつつつてなあ、彼氏でもねえ男連れてくのはどうなんだよ。そもそも女の水着選んだことなんかねえぞ」

「うるさいなあ、君は黙って僕が選んだ水着をグツドかバツドかで評価すればいいんだよ、機械のように」

「ネットのレビューと何が違えんだよそれ……」

うるさいジト目やめろ。

くっ、もう水着売り場近いつて言うのに焦る素振りすら見せやがらないぞこいつっ。

普通男子って女性もの売り場とかって忌避するもんなんじゃないのかっ!?

それともさっきの発言はブラフで実は選り慣れているのかっ!?

「休みの日のモールは人が多くていいな」

「人が多くて……っつて、普通逆じゃないか？人がいない方が落ち着いて選りやすいし」

「ん、ああ、いや。賑わってる方が出かけてるって感じがして俺は好きなんだよ」

「そういうもんかなあ……?」

確かに今日のモールは人が多い。

家族連れから友人同士、学生や老若男女問わず人で賑わっている。

休日だし当然と言えば当然かな。

「人は多いほどいいんだよ。隠れる場所がない程な」

「隠れる必要もないのにい？」

「人目に付かない場所がないことが重要なんだよ」

「意味わかんないよ」

「……俺も意味わかんねえよ」

志賀が何を言ってるか分からない件について。

「これとこれなら？」

「右。タンキニはともかくオフシヨルはいまいち合ってねえ気がする」

「じゃあこれとこれなら？」

「そっちだな。水色のセパレート。東のイメージに合うな」

「やっぱそつか。んー、でもなあー」

「露出……って言ってるいいもんか。気になんならラッシュユガードも合わせて買っていんじゃないか？」

「その辺は予算とも相談しないと。んー、悩ましいね」

実際目にしてちよつと驚いた。こいつ女性用水着売り場にいるのに意外と物怖じしない。

少女漫画とかだと男は居心地悪そうにしたり、真っ赤になつてまともに水着選べないとかあるから志賀もそうだと思ってたのになあ。

……女慣れしてる？いやそんな話は聞いたことないな。

「ひよつとしてこういうの慣れてるのかい？」

「いや？水着選ぶどころかこういう売り場に来んのも初めてだぞ。つかさつきも言ったろ」

「む、確かに。いや、にしても物怖じしないなーって思ってたね」

志賀は自分でも気づいてなかったのか、一瞬ぽかんとした後、話し出す。

「……そうだな、そーいや周りの視線とか気にしたことはあんまりねえかも」

「普通気になるもんじゃない？ほら、男が女性物のとこにいていいのかあ？とか」

「おめーが連れてきたんだろ。それに別に人からどう見られてるかは気にしねえよ。東に似合うかどうか考える方が重要だ」

「お、おおっ?!いい、いやまあそーなんだけど……」

「その為に連れてきたんだろ。そこ驚くところか？」

なんつ、こいつつ、平気でそういうことをお……!!

……え、待って、といつかなんて僕は。

「なんで僕、君を連れてきたの……?」

「知らねえよっ!むしろ俺が聞きてえよっ!」

いやだつて、一人で買いに行くのもなんかなーつて。

でも先輩とは知り合ったばっかだし、いきなり誘っても困惑するかもだったし。

で最初に友達の中から声かけようと思ったのが君で……

「……っ!?!」

なんとなしに視線を感じて周りを見れば、店員やお客さんが僕を横目で見ていた。

まるで『彼氏に水着選んで貰ってるのね』とでも言いたげな視線が……っ!!

「ちっ、違うからなあっ!? 君っ、君はあれだっ、そういうんじゃないぞっ!? 勘違いするなっ!?」

「何の話だよっ!? さっきからお前意味わかんねえぞっ!?」

くそお! 最近のコイツなんか変だっ!

距離感っていうか、その辺がなんか変っ!

「うっ、うるさいなあ! これがいいんだろっ!? いいよこれに決めたっ!!」

「待て待て待て色々見たいんじゃないのかっ!? あと俺はいいなんて一言も言っつてねえぞっ!」

「さっき合っつていったろっ! ならこれにするっ! はい意見締めきつたっ。もう聞かないぞっ」

「子供かよ……」

変だ変だ、なんか変だ。

顔が熱い、頭が熱い、心なしか目元も熱い!

感情の整理がつかなくってわけわかんなくなってきた!

「……ハア、決めたんなら構わねえけど」

「けどなに? お生憎様、もう変更はしないで僕はあ!」

「変えろなんて言わねえよ。でもよ」

だからその困ったように笑うのをやめてくれ。  
それを見ていると。

「それ着てるのは見てみてえとは、確かに思った」

「~~~~~っ!!変態っ!!」

「おいそのセリフここで言うな洒落になんねえだろうが東ア!!違いますこいつがテンパってるだけっで深い意味はありませんほんとにい!!」

友達より、ちょっとだけ近い距離な感じ。

なんだかすごく、むず痒いんだよお……!

「さっきはひでえ目にあっただぞ。なあオイ聞いてんのかコラ」  
「ご、ごめんよ……」

お昼はせっかくだし外で取ろうと、モール内のフードコート。  
対面する僕らの表情は怒りと反省で対照的だ。

「ただでさえ場所が水着売り場でよお、しかもお前謝ろうとしてあの後なんて言ったか覚えてっつか?」  
「テンパって覚えてない……」

『この後のお金は全部僕が出すから!』つつたんだよ。何にだよ、なあ。俺は何を払わせようとしてんだよ」

「お昼飯くらいはお詫びに出そうと思って……」

「だろうな、そういう意味だったんだろうな。でもそこ言わなかったから俺が最低最悪のクソ野郎に成り下がってんだよ」

怒ってる、あの志賀が怒っている。

怖くて顔見れないけど分かる、絶対に怒ってる。

うう、嫌われてしまったのかもしれない。

友達、やめようとか言われたらどうしよう、ごめんなさいって言う以外に僕にできることってあるのだろうか。

「……くっ、くっくっ、お前、なんでそんなこの世の終わりみたいな顔してんだよ」

「だ、だってえ……うえ……」

「ああもう俺が悪かったって。意地悪だったよ」

恐る恐る顔を上げればまた、困り笑顔で志賀が僕を見ていた。

怒ってるかと思っただのに、どうして？

「もう怒っちゃいねえよ。ごめんな」

「……ううん、僕こそごめん」

僕の悪い癖。

昔から焦ったり慌てたりすると、途端に周りが見えなくなつて、自分でも何を言ってるか分からなくなつてしまう。

それを治す為にいつも冷静でいるよう心掛けているのに、どうしてか志賀という時はうまくできない。

志賀は僕にとって『友達』の一人でしかない。

なのにこいつは他の『友達』にはないなにかがあつて、僕はそれに調子を狂わせられている。

「なんで君は、そうなのかなあ……」

「あ?なにが?」

「なんでもなあいい」

やめやめ、考えるとまたドツボにはまりそうだ。

だいたい今はその友達と遊びに来ている最中だぞ、失礼にもほどがある。

……さつき特大の失礼かました身で言う言葉じゃないな!?

「せつかくだしこの後どっかで遊ぼうぜ。行きたいところあつか?」

「午後ほつきり空いちやったしね。あつ、映画見たいかも」

「……そっういや東お前、普段どんな映画見てんだ?」

「そんな見る方じゃないけど雑食だよ。邦画、洋画、アニメで興味があつたら見てるね。サメも見るよ」

「俺もそんな感じだな。サメは見ねえけど。せつかくだしあれだな、現地に行つて気になる奴あつたら見てみようぜ。前情報なしで」

「おつ、チャレンジャーだ。いいね、乗った。あとサメを見ろ、日本人の心だぞ」

「そこにあるのは心じゃなくてチェーンソーだろ」

穏やかなお昼ご飯の時間。

友達と過ごすお昼ご飯は、凄く心地よくて落ち着く。

(楽しいなあ)

好きな友達と、好きなものを食べて、好きなものの話をする。

これ以上に心満たされることはないと思うな、僕。



「……ここまで、一回も遭遇してないのは間違いない。モールだからか？いや試着室なんて格好の餌場の筈。てことは東がいるからなのか……いや決めつけるのは早計だ。映画館でどうなるか、それを見てからでも遅くねえはず……」

「そろそろいい時間だね。解散しよっか」

「……もうそんなに経つのか」

「あの後僕らは映画を見て、お茶を飲みながらその感想まで言い合った。

そんなことをしていたら時間はあつという間に過ぎて、そろそろカラスが鳴く時間になってしまった。

「いやあ楽しかったよ。今日は付き合ってくれてありがとね」

「あ、ああ。いや、こちらこそ」

なんだあ？志賀がさつきから妙にそわそわしている。

まるで当てが外れたような、期待しているかのような感じ。

ははあん、さてはあれだね？

「おいおい、勘弁してくれないか？君だって子供じゃないんだからね、あまりわがままを言うものじゃないよ？」

「は？」

「顔を見れば分かるよ、遊び足りないんだろう？ダメダメ、明日は講義もあるんだからね」

流石は男子、夕方まで遊んだくらいじゃまだ遊び足りないんだろう。

でもこの後は僕も帰ってご飯の支度をしなきゃだし、それは志賀だっけと同じだろう。

ならここは心を鬼にして帰宅を促すのが友人というものじゃあないか？

「明日、明日、か。……なあ東」

「なんだい？」

「明日ってさあ。ほんとに来るのかな」

何を言ってるんだね君は。

テンションがおかしくなってるのかな、普段絶対言わないようなポエムみたいなこと言いだしたぞ。

……よくわかんないけど真面目に答えてあげるか。

「そりゃあそうさ。僕らには必ず明日が来る。面倒な講義も、課題の提出期限もさ。必ず来る」

「課題はちゃんとやれよ」

「やってるわいつ！たまに出てること忘れるだけっ！……とにかく、そんな心配なんて必要ないよ」

まるで空が落っこちてくる心配をしているみたいなのを言うなあ。

明日なんて、ご飯食べて寝たら誰にだって来るもんじゃないか。

「心配することはないよ、志賀。また明日、だよ」

「……ははっ、明日か。そうだな、明日もまた、会えるもんな」

なんとなく、志賀の目に光が戻ってきたような気がする。

いつもの気だるげな、苦笑いや呆れ顔が似合う優しい目になった。

「そりやそうだろう？だから今日はおとなしく帰ることだねっ」

「ああ、そうする。……ありがとな、東」

「？……よくわかんないけど、まあお礼なら貰ってあげなくもないかなあー！」

「凶々しいぞ調子乗んな」

「つれないなあ」

なんか知らないけど恩を売ったっぽい。

明日なんでもいいからせびってみようかな。

お菓子の一つくらい奢ってくれるかもしれないからね！

「今日一日、メスガキに会わなかった」

「東と何か関係があるのか、それとも……」

「……明日から、忙しくなりそうだな。はっ、やってやろうじやねえかクソ世界がよ」

東雲はもう近くに

「ふーんふーんふふふーん♪」

「浮かれてんなあ」

「もう無理……死んじやうう……」

「先輩はもうちよい体力つけた方がいいと思います。……おつ、見え  
てきた。思ったより近いな」

浮かれていた。

それはもう、初めて遊園地に来た時くらいにテンションぶち上がった。  
てた。

フロア熱狂だった。

「とーちゃつくっ！あつ！鍵開けといたから！荷物は入ってすぐの部  
屋に置いていてねっ！」

「テンションたけーなあ」

「おもちや買ってもらったワンちゃんみたい」

「次俺の前でワンちゃんって言葉使ったらいくら先輩でも捻じります  
よ」

「後輩の地雷が所在不明すぎる件つと……」

「クソスレ立てんな」

別荘の傍に沢があることは伝えてあるからか、今日は僕含めて全員  
軽装。

先輩も……いや、フリルのたくさん付いた服は着ていない。

白ワンピースがよく映えていて、先輩がいつもとは違う清楚感を出  
している。

……けど、それ以上に主張が激しいそれが目に付く、付いてしまう。

(でっか……)

なん……なんだあれ。でっか。

先輩は小さくてなんかかわいい人だと思ってたのに、先輩の先輩はでかくてなんか凄いものだったよ……

「……」

ギヤイギヤイしてる二人に背を向け、自分の胸に触れてみる。  
硬い。いや硬くはない。

ただあれと比べると、比較するまでもなく、硬い。

ペタ、ペタとすら聞こえてきそうですらある。

なぜか、無性に泣きたくなった。

「……まだ、まだだから。これからだからね、うん」

「なに立ち止まってんだ？」

「うひいっ!!変態!!」

「お前こないだからなんなの？社会的に人を殺してえならそう言えよ」

「後輩そういうところあるわよねえ。社会的制裁を受けやすいというか」

「ねえよっ！っーかあつてたまるかよっ!!」つたく、これから掃除だつてのにお前らはよお……」

ドサリと荷物を降ろし、肩をグルグル回している。

誘った時から思ってたけど、なんか志賀は結構協力的だなあ。

こういうのめんどくさがりそうなものだけだ。

「随分やる気じゃないか。どういう風の吹き回し？」

「ん？別に理由はねえよ。今日が楽しみだったっーのはあつかもし

んねえけど」

「おお？じゃあ今日の働きぶりは期待してよさそうだねえ」

「おうよ。水道と電気は通ってんだろ？さっそく水汲んでくるわ」

そう言うとバケツを二つ持って行ってしまった。

な、なんだ。今日は妙に協力的で気持ち悪いなあ。

普段だったなら「っしや、ゲームしようぜ」とか言うはずなのに。

「東ちゃんの頭の中であの後輩がどういうキャラなのか。とつても気になるわね」

「んひいっ！せ、先輩までっ！後ろから急に来ないでもらえるかなっ！？」

「急に、後輩達が、かわいいことしてたので」

いひひっ、と笑う先輩、控えめに言って絵になる。

白いワンピースも相まって、まるで存在しないはずの青春時代のワンシーンを切り取ったような美少女に見える。

見えるだけ。

「こういうの業者さんに頼むもんじゃないのお？」

「普段はそうなんだけどね。でもせっかくの夏だし、みんなと一緒に過ごしたいって思ってたから」

実は父さんにはちよつと無理言っけて開けてもらっているんだよね

……

懇意にしてる業者さんに今から断り入れるの大変なんだぞーって怒られたりもした。

それでも許してくれるあたり、自分で言うのもなんだけどそれではないのか。

「いい子か。……ん？ちよつと待って。一つしつもん」

「はい。なんだい？」

手を挙げて質問するその姿は幼女にしか見えない（一部除く）。  
しかし質問？今更何を質問するとうんたい。

「持ち物の中に着替え一式って言ってたわよね？」

「言ったよ。汚れたらお風呂入りたйдらう？」

当然だろう？これから大掃除して、少し休んだら沢で遊んだりご飯  
食べたりするんだから。

「今日ここで泊るの？」

「え、うん。みんなでおしゃべりしたり夜更かししたい」

「かわいいか。……あのさ、確認なんだけどさ」

「志賀、男。私、東ちゃん、女。オーケー？」

「？ オーケー」

「オーケーじゃねえのよ。なにもオーケーな要素ねえのよお!!」

先輩が急に発狂した。

なに？何が問題だつていうのっ!?

友達とお泊りなんて誰でもしてることだよ!?

「おバカっ！このかわいい生き物っ!!そのままできてっ!!」

「おいおいおいなにくつつちやべってんすか。オラ水汲んできたから掃  
除すんぞ」

「はいはい。部屋はそんな多くないからちやっちやと手分けして  
やっちやおうか」

「オーケーじゃねえのよお……えっ、これどうするべき？別室は当然としてもひとつ屋根の下よ？後輩達の倫理観どうなってるんのお??」

「はいお掃除しゅーりよーっ！着替えて遊びに行くぞーっ！」

「うーい」

「……そうねえ！いきまっしょかあ!!あー楽しみねえー!!」

「どしたんすか急に」

「もうヤケクソよお!!ふっつうーに楽しむって決めたのよおっ!!」

「はあ、そっすか。よくわかんねえけど」

「そういえば晩御飯どうするのぉ？なにも買ってきてないけど」

「あっ」

「バカがよ……」

「冗談だって。カレーの材料買ってきてあるから作るっか。みんな  
で」

「東お前料理できんのか?」

「努力はするっ!」

「……はい、そこに座っててちようだいねえ」

「なんでえ……」



ふふふふふ、マズいな笑顔が止まらないや。  
楽しすぎるなあこれ！

「……人が洗いもんしてるときになにニヤついてんだてめ」  
「じゃんけんだから仕方ないよねえ。いやごめんって、そんな目で見ないでくれよ」

ジト目の志賀がシンクから顔を上げてこっちを見ている。  
僕はそれを横目に悠々自適にソファでくつろいでいるってワケ。  
さつきまでエプロンをつけてガチャガチャと洗い物を進めていた  
が粗方片付いたのかな。

……エプロン似合うなあ。

「作るのも片づけすんのも嫌いじゃねえしいいけどな。先輩は？風呂  
？」

「だよ。……あつ、覗くなよ」

「ハッ、金積まれたって行かねえよ」

お、思ったより強烈な拒絶。

んん？あんまり人のこと悪く言う奴じゃないはずなんだけどな。

ちよつとその辺聞いてみるか。

「嫌いなもの？あたり強くない？」

「……嫌いってわけじゃねえ。レポートとか助けられてるし、すごい  
いい人だよ」

「どうしてかって聞いて大丈夫なやつ？」

食器を拭く手を止めて考えこんでいる。

悩んでいるし、使う言葉を慎重に選んでいるといったようにも見えない。

「あの人は俺にとって重要な……なんて言やあいんだろっうな、証明？ 証拠？ みたいなもん、だと、思う」

「証明い？ なんのさ」

「俺が……まともだつてことなの、だと思っう。すまねえ、どういえば伝わるか……」

吐き捨てるように言う志賀の顔はひどく歪んでいる。

泣きそうとも、怒っているとも、悩んでいるとも取れる表情だ。

僕は一度だけこの表情を見たことがある。

あの時、ベンチに座つて項垂れてた君に声をかけた時だ。

「誤解されたくねえんだが、友達やつてんのは自分の意思だ。それは」

「分かつてる分かつてる。打算だけで人付き合いできるほど君は器用じゃないだろ」

「……うつせえよ」

心配りできるくせに、変なところで不器用なんだからな君は。

しかし証拠と来たか。存在そのものが証拠……。

この男が幼児性愛で悩んでいるとは考えにくい。

もしそうだとしたら僕にその片鱗を打ち明けたりはしない。

いやされても困るけども。

「ここに誘つてくれたこと、本当に感謝してる。……ここは、静かだ」

「静かなのは大事なこと？」

「大事だ。俺にとっては」

結局よく分かんないな。

この間は人は多い程いいとか言ってたはずなのに、今は静かなのがいいという。

引つかかるのは、まるで誰かから逃げ回ってるみたい意識の割き方ってことくらいか。

流石に借金してるってわけではないだろう。バイトしてるし、そもそもお金借りるほど生活に困ってるわけじゃないだろうし。

……ないよね？

「心配すんな、今は割と持ち直してるからな。……ケリもつけてえと思ってたところだしな」

話ながら、いつの間にか洗い物を拭き終わっていたみたいだ。

するとつかつかと歩いてきて、おもむろに僕の隣に座る。

手には……あつ、こいつしれつと冷蔵庫のお酒持ってきてやがる。

「あん時お前に声かけられなかったら多分、俺はあそこで終わっちゃまってたかもしれねえ」

「縁起でもないこと言うなよ……」

「わりいわりい。でも、ありがとうな」

改めて言われると、なんか、恥ずかしいなあ……！

僕は別に何もしてないからおおさらに。

にしても人に感謝を述べながら飲む酒はうまいか？

見たことないラベルだ、さてはこいつ持ち込んで早々に冷蔵庫入れてやがったな……!?!

「……僕も飲む」

「やめろ。お前が俺に何したかわかってねえのか」

「覚えてないからノーカン!!」

「俺が覚えてんだよおっ!!」

ひゃあーっ!ガマンできねえ、お酒だーっ!

「いいお湯でしたあーっとお。次どつちいー?」

「だあーかあーらあー!君はあ、僕の魅力をなあんにもわかってなあ  
いっ!!」

「っだあああ!!分かったから手え放せっ!!つか組み伏せようとすん  
じゃねえ!ブラウスのボタン外れてんだよ前開いてる隠せええ!!」  
「んふふふ、なに?気になっちゃう?気になっちゃうの?しょうがな  
いなあ、君ならまあ……いいよ?」

「いいわけあるかどつとしまえやバカがあ!!……あつ先輩!助けて  
ください襲われてるんですっ!!このままだとソファから落つこち  
ちやうー!」

「めんどくさ。寝ていい?」

「隠しもしねえよこの幼女」

「うわっ、先輩でつか。ヤバ……」

「ふふん、触ってみる?」

「うん」

「……疲れたんで俺は寝ます。おやすみなっさい」

「「おやすみなさーい」」

「……」

「同級生の、首から腹にかけてまで真っ白な肌見てさあ  
寝れるわけなくね？」

東へ。(最終話)

「ねえそれ一口ちょうだい?」

「やーだよ。かき氷じゃなくて普通のアイスにすればよかったじゃないか」

なんと女子らしい話題だろうか。

男装して過ごす日々からは想像もつかない程に平和だなあ。

「だって買ってほしそうにしてたんだもんっ!」

「かき氷があ?」

「かき氷がっ」

それジョークかな?面白いこと言うなあ、この合法ロリは。

何言っても可愛いなこの先輩は、今までよく犯罪に合わなかったな

……

……ちよつと、相談してみてもいいかな。

「ねえ、先輩」

「なにい?」

「その、さ。この間話したことでさ。……責任、取ってもらえると思う?」

以前から先輩には僕が男装をしていたこと、それを志賀には隠したこと、お酒の席で酔って暴露したことを話していた。

それはそれは綺麗な呆れ顔をされてしまい恥ずかしくなったのは記憶に新しい。

で、でもね!?!異性に二回も裸を見られてしまったんだよっ!?

こ、これはもう責任を取ってもらわないといけないんじゃないか

なあ!?!と僕は思うわけだね!?!

「具体的にはこう……永久就職的な……その……」

「話は聞いて考えたけどねえ……。とりあえずお酒の席のことで責任持ち出すのはよくないわよ」

「ううっ」

「お酒飲んだのは自分でしょ?ならその結果は自分が起こしたことからねっ」

分かってる、頭では分かっているんだっ!

でも、でもお……!!

「だってだってえっ!け、結婚もしてないんだよ!?!なのに……っ!!」

「それを言ったら男女でお酒飲みに行くのも泊まりもダメでしょ?」

「うう……っ」

先輩は、はあ、とため息をついて呆れかえっている。

その正論には何も言い返せないし、自分の軽率さを呪うばかりだ。

そんな僕を見てか、先輩は苦笑いをやめ、真面目腐った顔で問いかけてきた。

「ねえ東ちゃん。責任云々よりもっと、もおーっと大事なことがある

と思わない?」

「大事なこと……?」

「志賀のこと好きなの?嫌いななの?」

「……う」

「好きじゃない相手に酒の席の責任だけ取れーっっていうのもちよーっ  
と先輩的にはどうなの?っと思っっちゃうわねえ?」

痛い痛い痛い。

センパイの正論がとてつもなく痛いっ!

「……その、先輩はさ、志賀のこと好きだったりする?」

「男として?なら別に。ねえどうして?ねえねえどうしてそんなこと聞くのお?私聞きたいなあ♡」

「やめてえ……そんな目で僕を見ないでえ……!」

違う筈なんだよお。

最近の僕はどうにもおかしい、おかしいんだよ。

いくら友達といえど二回も肌を見られているんだぞっ!?

なのに……なのに……!!

「なんであんまり悪い気がしないんだよお……!」

「重傷ねえ」

私だったらそうはならん自信あるわあなどと先輩は嘯くが断定してもいい。

この人は同じ穴の貉だ。僕と同じ状況になったら絶対コロツといくに違いない。多分きつとそう。

「私まだちゃんと質問に答えてもらってないわよ?ねえ好きなの?嫌いな?」

「うっ、ううん……」

好きか?嫌いか?

間違いなく嫌いではない。口が裂けてもそんなこと言うものか。

かと言って好き……好きって言葉にするのも……なんというか

……

「恥ずかしい?」

「……うん」



逡巡している僕を見かねたのかもしれない。

先輩は唐突に僕の唇に人差し指を当て、片眼を閉じてこう言った。

「それでいいの。乙女心はひけらかすものでなく、秘めるものだもの」

「その想いを大切にね。……がんばれ女の子っ」

そのままぐるりと前を向き、先輩はまた歩き出した。

「……っつよ」

(最近は一人で考え事する機会も減ったな)

その辺の石ころを蹴っ飛ばしながら道を歩いていて思う。

東とまたつるみだしてからというもの、ありがたいことにメスガキ事象への息苦しさから逃れられている。

東といることで『ストック』が溜まる分、一緒にいればいるだけ俺にとつていい影響になるからな。

さもありませんと言ったところか。

(東には感謝しねえとな)

後ろめたさこそあるものの、それでも気兼ねなく友達と遊べるのは楽しい。

あの日東と話せたことは、こんな世界で過ごす俺のなけなしの幸運が引き寄せてくれたに違いない。

今日は先輩と女子会だそうだが。

……会いたかったな。

(にしてもその幸運、この世界からの離脱って感じで働いてくんねえかなあ……)

さつき寄ったコンビニで買ったコーヒーを開け、飲む。

歩きながら飲むのは行儀が悪いがしつたこっちゃない。

こちらとらこんな理不尽な同人な世界で犯罪の一つもしてない模範生だぞ。

バチなんか当たってたまるか。

(……最近は、いつもあいつというな)

こここのところ家でゲームしたり出かけたりと、我ながらアグレッシブに動き回ってると思う。

あいつと一緒になら事象の発生は無いし、なにより楽しいからかもな。

もつとも、さつきとこの世界からおさらばしたい現状、時間稼ぎにしかなくてねえのも事実だが。

なんとなしに壁に寄りかかり、考える。

歩道の端っここから人もまばらな道路を見やる。

こういう時間帯には奴らが出るもんだが、『ストック』にはまだ余裕があるはずだ。

そこまで心配はいらねえはず。

思い返すのは最近の出来事だ。

こここのところあいつ(ついでに先輩)と遊んでたから楽しくて仕方がねえ。

『なあなあ、この辺にクレープ屋さんの屋台来てるらしいよ?行かな

「手はないよっ!? ねえ! 先輩もそう思うよね! ……なんだいその目は。ほほえまな目で僕を見るんじゃないよ!」

『僕には許せないことが二つある。約束を破ること、そして決算直後にベビキュラー使う奴だオイやめろごめんなさい刀狩りカード使ったこと謝るからっ! やめてよおっ! うわーっ!!』

『うるさいなあ、君だっと思ってるんだろ? 僕だっって好きでこんな貧相な体なんじゃ……華奢で綺麗だなんて、物は言いようだなあ。……えへへ』

『今度の土曜日暇かな。その、家のあれで、水族館のチケットがあつて。も、もし君さえよければなんだけど……いや三人じゃなくて。……うん、二人で』

『……お待たせ。その、あんまりヒラヒラしたのは似合わない、僕も思うんだけど』

『先輩が着ていけて。似合うからって。……ありがとう、ね』

『うわあ……！ほら見てっ！おっきい水槽だよ！すっごいなあ、綺麗だなあ……！』

『えへへ、僕水族館好きなんだよ、言ってなかったよね？』

『父さんの趣味がアクアリウムでさ、そこから好きになったんだあ』

『本当に、綺麗だねえ……』

目を瞑るだけで、次から次へと思い出が脳裏に湧いて出てくる。  
あの時の東はテンション高かったなあだの、楽しそうだったなあだのとりとめのないことばかり。

（――ああクソツ、柄じゃねえな）

あいつは同じ年で、貧乳で、つり目がちで真面目な奴。  
俺の好みとはこうも正反対な奴いるのかって改めて思った。

思った、筈なのになあ。

(こればかりはどうしようもねえんだな)

これはもう俺の負けだ。あの日東にあった日から、俺は負けが決まっていたんだろう。

……しゃーねえ、どっちにせよ責任取らなきゃと思ってたところだ。腹あ括るか。

「——おにーさんっ♡」

「……あ?」

いるはずのない甘ったるい声が、嫌に耳に響いた。

「はよーっす」

「おは……おいおいどうしたんだいその隈あ!?!」

「色々あつて眠れなくてよ……」

よっこいせと向かい席に座る志賀からは凄まじい疲労の気配がする。

けど表情だけは晴れやかで、憑き物が落ちたような、でもなんか憑かれてるんじゃないか？とすら思わせる顔色で混乱しそうだ。

普段通りならその気だるそうな姿もちよつとこう、グツとくるものがあるが今は流石に心配が勝つ。

それくらい今の志賀はヤバい。

「心配いらねえよ。クソ長い因縁にケリがついてテンション上がっちゃまってよ。寝てねえんだ」

「君の大丈夫宣言は何一つ信用しないって決めてるからね僕は。……怪我とかない？」

「ああ。別に喧嘩になったわけでもねえしな。勝てるとも思えねえけど」

そう言うも持ってきたハンバーグ定食を食べだす。

ひどく眠そうではある……けど、どこか雰囲気が変わった気がする。

前までは人間を警戒していた猫が、今は日差しの下でくつろぐ猫みたいなの……そんな感じ？

僕が好きな気配なのは間違いないな。

「むぐ……そうだ東。今度行きたいところがあんだけど付き合ってくれるか？」

「へ？いいよ別に。いつ？どこ？」

「今度の土曜で。遊園地に行ってみたくってな」

思わずお茶を嘔き出してしまった。

「うおお!!おいなに笑ってんだ東あ!!」

「いつ、今のは絶対君が悪いっ!!なに?そんな、世の中ダリイ〜みたいな顔して遊園地行きたいとかズルだろっ!」

「顔は余計だ顔はあ!!つかお前それ絶対バカにしてんだろ!!」

「ご飯を食べ進めつつ、ぽつりぽつりと話し出した。

「行ったことねえんだよ、遊園地。物心つく前はわかんねえけど」

「んまあ、確かに僕もしばらく行ってないしそういうもんかもだけど……。で、でもいいの?先輩とかといっしょに行った方が」

いや、それはもちろん僕としては願ったり叶ったりだけでも。

最近はずっと君のことばかり考えてるんだぞ?分かってるのかこいつは。

「うるせえお前と行きたいんだよ察しろ」

「……そ、そう?なら行くよ。うん、絶対行くから」

帰ったらカレンダーに印付けなきや。

それから洋服も選んで、あつ、この間一緒に買いに行ったの着るチャンスかも。

似合ってるって言ってくれるかなあ。言ってくれるよね君なら。

ひよっとしたら、か、かわいいって言ってくれるかな。

「(好きになってくれたり、しないかな)」

「(勢いで誘っちゃったが……どうやって伝えたもんか……)」

僕はまだ、何も知らない。



とりとめのない後日談編  
後日談1 東夕貴の不安

「ねえ、僕ここにいていいの?」

狭いアパートの一室でカードゲームに興じる二人に投げかけてみる。

盤面がいい感じに固まっているのか二人共むむむと言ったまま動かない。

そんな状況、お喋りがしたくて声をかけたんだけど、どうにも話題を選びを間違えた。

そんな言葉に一ノ瀬先輩が振り向いて、志賀は手元を睨んだまま返事を返してくれた。

「エンド時粉砕機で捨てた魔法を回収。いていいって、まるでいちやいけない理由があるみたいに言うじゃない」

「ターン貫きます。ねえだろそんなもん。来たい時に来りゃいいじゃねえか。俺がいる時ならいつ来ても構わねえし」

「いや……だって君ら付き合ってるじゃん。僕邪魔じゃん」

志賀から付き合い始めましたの報告を受けてから二週間。

今の所僕の、僕らの生活に大きな変化はなかった。

いつも通り志賀の家に集まってゲームしたりしなかったり、たまに外でお酒飲んだり。

先輩とは一緒におでかけするし、志賀の家にゲームだけしに来る日もしばしば。

そんな日常の中で、ひよっとして僕邪魔してるんじゃない?と思ったのは当然だろう。

「だからってお前友達やめることには繋がんねえよ。今までと同じだ  
同じ。門とスノウコストに一滴で」

「それ右手光ってるって。そーそ、今まで通りよ。これからも一緒に  
遊ぼ？」

「二人がそう言ってくれるのは嬉しいけどさあ……先輩はいやじゃないの？ほら、一応僕も女だしさ」

「あーね。全然嫌じゃない、むしろ気を遣わずこいつ足蹴にしてい  
いのよ。そこ泡影で」

「終わったくせえこれ……。まーなんだ、俺らも劇的に変わったって  
わけじゃないからな。いつも通りにしてくれっと助かる」

今もこうして僕は読書、二人はカードゲーム(曰く紙をしばいてる)  
に熱中している。

志賀の家で過ごす三人の時間は心地いい。

好きなものを見て、好きなこととして、好きな話をするのはとても楽  
しい。それは間違いないよ。

その関係を崩したくはないし、でも二人っきりの時間だって欲しい  
筈。

二人に気を使わせてしまってるのではないのかと思うと、ちよつと  
心苦しい気がするんだよね。

「はい勝ち〜！ジュース貰うわねえ」

「あーくそつ、次は勝つ。東やるかー？」

「ううん、やめとく。今のカード分かんないし」

ちよつとだけ、二人の距離感が羨ましかった。

勝手に気遅れてるだけって分かってるのにね。

すると突然すくつと立ち上がった先輩が僕の隣に腰掛け、テーブル  
を挟んで志賀も向かい側に座った。

「というわけで、もう一度東ちゃんとの距離を詰める作戦会議をします」

「いえーい先輩流石だー」

「本人が目の前にいるのにつ!?あと志賀の棒読み酷いな!?」

本気で困惑するんだが!一体全体なんだってんだって話だよ!

先輩は僕の肩に頭を預け、猫などで声で喋り始めた。

「だってえ、かわいいかわいい私の後輩が疎外感でナイーヴなんて見逃せないもーん♡」

「先輩肩に頭乗ってねえぞ。それじゃ電車で寄っかかってくる人だ」

「うるせえ!私的にはセクシーにしなだれかかってんのよおっ!」

「セクシー(笑)」

「きいーっ!生意気な後輩がよお!」

肘をついてニヤついた志賀と、キシヤーツと猫のように威嚇する先輩。

突然始まった茶番についていけない僕。なんなんだこれは、どうするのが正解なんだ!?

「友達のやることに正解もクソもねえだろ。っーか好き好き言ってる先輩から距離置く方が無理だと思っぜ俺は」

「そうよお?私こーんなに東ちゃんのこと好きなのに、東ちゃんは私からのラブを受け取ってくれないなんて……私悲しい!」

「ラブの発音がファステイバのそれなんだよな。まあなんっーの、俺達はもつと東と遊びたいって話。大学生活まだまだ長えし、これから面白いこと山ほどあんだろ」

「このコウハイイとの時間はそれこそ卒業後でも作れると思うの。でも東ちゃんと遊べる時間は在学期間中だけ。だからさ、もつと一緒に遊ぼ?ね?」

まるで断られるとは思ってない程ニコニコな先輩に、それを見て言外に「諦めろよ」と言いたげな志賀。

二人はいつつもそうだ。自信満々に、こっちへの気遣いとかそういうのも分かってて僕の手を引っ張っていくんだ。

そういう所が……

「……ふふっ、後輩の発音キモいよ。二度としないでね」

僕は大好きなんだよな。

「返事が強火過ぎない!？」

「いや今のはキモかった。発音がコークハイのそれだったよ」

「俺もそう思う。コウハイってなんだよ、普通に名前で言えば雑魚が!」

「言ったなテメー!!上等だそこ座ってなさい今から桃鉄引っ張り出してボコボコにするから覚悟しなっ!」

「上等だよ!言っとくけど僕強いかんね?鍛えた僕の収益計算能力と物件把握術、勝てると思わないことだねっ」

「この家でゲーム上手い発言は普通にフラグなんだよな」

「あーっ!!牛歩使うのやめてよおーっ!!」

「あーっはっはっはっは!私の前で隙を見せるのが悪いのよおっ!ボンビー変化に怯えなさい!!」

「だから言ったのに……安心しろ、借金までいったら徳政令使ってやるよ。まあ借金になるまではなんもしねえけどな、へへへ」

やっぱり君達の事嫌いかもしれない!

「ただいまー」

「おかえり。今日はこっちなんだね」

「明日から連休だからね。色々準備もあるから」

激闘の桃鉄20年を過ごしてたらすっかり日が落ちちゃった。

まさか最終手段泣き落としを使う程になるとは思ってもみなかったけど、最終的な収支は僕が勝ったからよしとする！

二人の苦笑いを極力無視して着いた帰路、家に帰るとソファに座った兄さんが出迎えてくれた。

スーツ姿だがジャケットは脱いでいてネクタイも緩い、ついさつき帰ってきたみたいだ。

「母さんはなんて？」

「今日は女子会だから遅くなるってき。父さんは帰ってきてる」

「めずらし。まあいいけど」

若くして重役らしい父さんがこの時間に帰ってきてるなんて珍しいな？

まあなんでもいっか。それよりお風呂とご飯にしないと。

そんな風に考えてたら座ってた兄さんが首だけコチラに向けてきた。

「夕貴、帰りが遅くなるのはいいけどちゃんと連絡してね？迎え行くから」

「大丈夫だよ、こことアパート近いし。それに兄さんも疲れてるで

しよ」

「家族の安全の為ならなんてことはない。むしろ頼ってほしいんだけどね、夕貴はちょっと手がかからなさすぎるよ」

「それは兄さんでもしよ」

「だからこそ、ね。いやあ自分で言ってるんだけど、可愛くない子供だったろうねえ僕達は」

変に『大人』びてるところがあった僕達は、昔から周りの人気が極端な子供だった。

大人びたその雰囲気がいいという子もいれば、子供らしくない変な子供だっていう人もいる。

ちよつとだけ周りを見て、ちよつとだけ気を使いがちな僕達は変なところで生きづらかった。

兄さんは女性関係で、それも本人が望まない形で酷く苦勞したらしいし、僕も次第に性別を誤魔化すようになった。

志賀に関しては面白そうだったからだけど、元々どつちに取られても適当に返せるようにしてる。

男だと、女だと思っただと言われるのがとても面倒だったから。

「ところで友達とは上手くやれてる？仲直りしたって聞いたけど、ちよつと不安で」

「心配ない、今日も遊んで帰ってきたよ。明日はバーベキューする予定」

「おつ、大学生してるね。にしてもバーベキューかあ、いいなあー僕も行きたい。お邪魔しちゃダメ？」

「ダメでしょ、友達の兄が来るとか普通に気まずいよ……と言いたいけど兄さん普通に馴染みそうで嫌だな」

「嫌はひどくない？傷つくよ僕も。……冗談、楽しんで来てね」

「コミュ力高いから兄さんは……と言っても志賀と一ノ瀬先輩相手にどうなるかは想像がつかない。」

あれで初対面に対してかなり警戒心の高い志賀と、自分に近づく男は志賀以外全員下心有りきだと思ってる先輩だ。

そんな中兄さんがどれだけやれるのか、正直に言えばちよつと見てみたい。

とはいえ流石に、今から飛び入りで兄が参加するよ！とは言いつらい。今回は無し！

「まっ、女の子達の中に僕が行くのも流石にね。いや自意識が高いとかじゃなくてコンプライアンス的にね!？」

「誰もそんなこと思っていないよ、気にしすぎ。あと男女混合だから」「ごめん、つい癖で……」

兄さんも僕も中性寄りな顔をしているせいか、時折そういうアップローチを受ける。

特に兄さんは家族としての鼻肩目抜きで、顔立ちが整ってる。その苦労は僕の比ではないと思う。

多分僕の5倍くらい苦労してきたと思う。学生の頃は二週間に一回くらい校舎裏呼び出しがあったとか。

先輩後輩から絶えず届くそれに耐えきれず担任に泣きついて、ようやく改善されたと聞いた時は我が兄ながら魔性を感じずにはいられなかったよね。

「とりあえずお風呂入ってくる。それと今日は早めに寝るから」

「ああ、うん。行ってらっしゃい……ちよつと待って」

「なに？僕明日の準備したいんだけど」

さつさとお風呂入ってご飯食べて準備に取り掛かろうと思ってた矢先、また呼び止められる。

こんなこともあるのかと準備しておいた家に眠るキャンプ用品の数々を纏めておこうと思ってたのに。

しかし兄さんの顔はさつきと違い、表情が無い。あの顔は知って

る、頭の中で何か凄い速さで考えてるときの癖だ。

「……男女混合？」

「うん。同級生の男と先輩の女子の三人」

「その同級生って、仲直りした子？」

「そうだよ。あれ、言っただけじゃなかった。入学当初から交流してるのそいつだよ」

「……こんな質問してごめん、その人はいい人？兄として聞いておきたい」

そう言えば学年始まった当初から付き合いがあつて、一年近く疎遠になつた友達がいるとしか言つてないや。

やっちまつたね。兄さんの心配そうな眼が心に痛い程突き刺さる。本当に申し訳ない。

「心配要らないよ。あいつ二年間の間僕が女つて気づかなかつたら。しかも僕からカミングアウトするまで気づかなかつた」

「ええ……でも知つた上で掌返したりしなかつた？」

「ううん、全然変わんなかつた。それに今は彼女いるし。あつ、僕もお世話になつてる先輩だよ」

「そっか、ならいいんだ。いやまだちよつと心配だけど、夕貴がそう言うなら僕がこれ以上口を出すのは野暮だしね」

妹の男友達つて言葉に強く警戒心を抱いてしまうのは、とても当たり前なことだと思う。

僕としては兄さんをこれ以上不安がらせたくはない。

というかここまで言いそびれてたせいで心労をかけてるから、むしろ罪悪感がある。

どうにかして兄さんを安心させたい……そうだ！

「兄さん明日休みだよ？なら一緒に行こうよ」



「えっ。いやいやいや、お友達からしたら嫌でしょ。友達の兄だよ？普通に気まずいって」

「大丈夫大丈夫、ちよつと待っててね。……もしもし志賀？先輩もそこにいるよね」

『いるぞ。ひよつとしてエスパーパータイプか？』

「これがメンタリズムさ。ウソ適当言った」

どうせ二人のことだ。今日も遅くまでゲームしながら帰るのがめんどくさくなつて志賀の家に泊まるんだろう。という読みだ。

爆ぜろ。いや爆ぜたら困るな、程ほどになんか困れ。

兄さんに口を挟ませない為に手早く用件を片付けよう。

「急でごめんなんだけど、明日兄さんも連れてつていい？羨ましそうにしてたから連れていきたいんだ」

『いいぞ。いつすよね？先輩もいって』

「ありがとー、じゃそういうこと。……いって」

「スピード感っ！えっ、行くの決定!?だ、大丈夫なの？二人共嫌がつてなかった!？」

流星兄さん、人としての良識やモラルが守れていてとても偉い。

けど今の僕には関係ないんだなこれが。少し強引かもしれないけど、兄さんの憂いを取っ払う為だ。

それに二人共乗り気だった。多分、僕が連れて来る人だから変な人は連れてこないって信頼してくれてるんだと思う。

二人のそういう所が、僕は好きなんだよなあ。

「材料は各自持ち寄りだから、明日合流前に買い物済ませよう。いいよね？」

「……夕貴って、そんなに行動的だったっけ？」

「ふふん、二人に影響されてるかもね」

「東ちゃんのお兄さんかー。どんな人か知ってる？」

「東から聞いた程度っすけど、いい人そうですよ。ついでに苦労が多い人だと」

「へえ。面白い人だといいわねっ」

「先輩より面白い人そうそういないんじゃないすかね」

「どういう意味よコラ」

「なんでもねーツス。電気消しまーす、おやすみなさい」

「もうっ！……おやすみっ」

## 後日談2 優しさの味は絆から

風の少ない快晴。気温も秋口らしく快適に涼しい。  
絶好のアウトドア日和であるっ！

「やっと着いたね河川敷っ！二人は……まだ来てないなあ」  
「そりゃあ僕ら車で来てるからね。先に準備だけでも済ませておこうか」

兄さんが後部座席に積んでた折り畳み椅子や机を手際よく組み立て始める。

一時期アウトドアグッズを集めるのが趣味だったらしくて、やたらとこの手のグッズを持っている。

昨晚はむしろ僕よりウキウキして道具を揃えていたんじゃないかな？

22時ごろに「積める物は車に積んじやおうか」とか言い出した時はやる気すぎるとちよつと引いた。

そんな準備を始めて紙皿やコップを並べ終わったころ、遠くから手を振って二人が現れる。

「早えって、まだ約束の時間まで20分あんど」

「先んずれば人を制すってね」

「何を制すつもりなのお……？あつ、こんにちはお兄さん」

「こんちはっす。今日はよろしくです」

二人共意外なことにしつかり動きやすい軽装だった。

志賀は動きやすいカーゴパンツにYシャツ、先輩は半袖のシャツだけど相変わらず胸元にはフリルがたくさんついている。

えっ、先輩のスカート分厚っ。流石に暑くないそれえ？

「こんにちは。いつも妹がお世話になってます、兄の東都生あずまどきです。今日はすみません、飛び入りで来ちゃって」

（最も華麗な技を持つ男……）

（この二人が何考えてるか手に取るようにわかるな……）

ゴリ押しで参加させてしまったのは僕なのに、それをおくびにも出さず兄さんは綺麗な礼をする。

頭がナギツしてる2人はまず間違いなく違う人物を連想していると思う。

それにしても少々かしまりすぎな気がする。こういうのを見ると二人はきつと……

「いや全然。んで、俺らとしては東……夕貴さんがゴリ押しして誘ったんじゃないかって疑ってるんですけど、どうです？」

「えっ。どうしてそういう風に思ったのか聞いても？」

「急な連絡ではありませんでしたしい、多分東ちゃんのことだから志賀が男だって言っただけじゃなかったんじゃないかなあと。だから不安で着いて来たかったんじゃないかなって」

「……夕貴？」

「以心伝心、友として誇らしいよ。これが日頃の行いって奴かなあ！」  
「褒めてないよ？」

嘘、今の褒められてるんじゃないの？うわ凄いジト目。

僕達の友情、その以心伝心っぷりに兄さんが感動する流れじゃなかったの!?

「ご安心ください、コイツは私に跪く為に生きてるので東ちゃんには指一本触れさせませんっ！」

「おう足でも舐めて差し上げましょうかボケが。初対面の人にかましていいジョークライン超えてんぞ。ちよつとは取り繕ったらどうですか愛佳さんやい」

「どうせお行儀なんて美味しいもの食べたならその内剥がれるのよ。な

ら初手から空気感掴んでもらう為にもトップスピードよ」

「掴ませる気ねえだろ。トップスピードは腕ごと吹き飛ぶわ。……だが面白れえ。ついて来れるか——?」

「……なるほど。面白い人達だね夕貴」

「でしょ? 兄さんの周りにいないでしょ? こういう人つて」

「うん。僕もこんな人達と友達になりたかった」

速攻で始まった二人の茶番を見て、兄さんの口から笑みがこぼれる。

さつきまでの心配はどこへやら、突然始まった掛け合いを笑顔で眺めてる。

「おつと脱線。何はともあれ俺らは大歓迎です。あと敬語とかも気い使わなくていいんで、俺ら年下ですし」

「そうだそうだ。君ら相手に敬語使う兄さんなんて僕あ見たくないぞ」

「東に言われるとなんかムカつくな……お兄さんいるとまどろっこしいな、今は夕貴呼びでいいか?」

「私というものがありませんながら下の名前で女を呼ぶのねっ。か弱い乙女の純情を弄んで、ひどいっ」

「か弱い乙女はストV時代から本田で俺を固め殺さねえと思うんだよ」

おしやべりしながらも二人が持ち込んだ荷物を傍に置き、忙しなく動き始める。

志賀は炭を置いて火を付け始めている。ガスバーナーである程度火をつけてうちわでバタバタと扇ぎ始めた。

一度火がつけば後は空気を送り込むのに徹した方がいいらしくて体力仕事になる。兄さんも志賀と代わりばんこに火を見てる。

僕は先輩に付いて食材の準備だ。お肉や野菜、海鮮まで持ってきてる!

「志賀がねー、せつかくなら輪切りにしたイカをホイルして焼きた  
いって」

「いいね、すごくいい。あれ？そのタツパーなに？」

「塩おむすび。バーベキューと言えば焼いたお肉、塩おむすびじゃなあ  
い！お酒はお兄さんもいるし今日は無しで」

「お気遣いありがとう。ほんとに楽しみだなあ、そう言えば僕バーベ  
キューって初めてかも」

思えば家族でそういうのしたことないなあ。

父さんも母さんも忙しくて兄さんと二人でいることが多かったか  
ら、火を使うようなことできなかったし。

兄さんも兄さんで家に友達呼んだりとかは少なかった。

友達いないの？と聞いたら「い、いるよ!？」と食い気味に返って  
来て以来聞けてない。

聞いちゃいけない気がするんだ。

「ふふっ、なら今日は最高の一日にしないとねっ」

「頼りにしてまーす」

「そろそろ代わろうか？」

「うす、お願いします。網と飲み物用意しますね」

動き始めたら自然と男女に別れたのはまあ、普通なことだと思っ

いや気軽にいいよとは言ったものの、初っ端友達の兄と二人つきり  
は結構キツいが!？」

ずっと笑顔なのがかえって怖え。何を考えてるかさっぱり分から

ん。

何の話題振りやいいんだよ、先輩と違つて社会人だぞ相手。

サブカルの話題は当たり前外れあるし、無難な話題振つても進展しねえし。

「志賀君つて言ったね。夕貴から聞いてるよ、いつも仲良くしてくれてありがとう」

「えっ、いやいやこちらこそ」

「僕もあんまり口が回る方じゃなくつてね。単刀直入に聞くけど、夕貴とどんな関係？」

ぶっこんで来たなあ。そう来るとは思つてた。

いや今日どつかで聞かれるだろうなと思つてたけど早えよ！

一応答えも用意してはいたが、変に誤魔化したらめっちゃ怒りそうだなこの人。

「友達つすね。分かんるところ教えてもらつたり、面白いもん見つけたら共有するくらいには」

「ちよくちよく家にお邪魔してるつて聞いたけど本当？」

「あー……本当つす。誓つて手は出してません。俺には先輩、愛佳さんしかないんで」

「しかないない？それつてどういう……」

ヤベ、口が滑つた。まあいいか。

久しぶりに男同士で安心して話せる機会が来たんだ。多少本音吐き出したつて構わねえだろ。

本当に、安心して会話できる男つていうのも久しぶりだ。

「夕貴さんを蔑ろにしてるわけじゃないです。ただ、俺が人生か命掛けて誰かに尽くすとしたら、それは先輩だけなんですよ」

「家族でもなく個人かあ……重いね？」

「仰る通りで。けど一生掛けて俺を肯定してやるって言ったのは向こうなんですよ。地獄も一緒に歩いてやるって言われたら、そりや惚れません?」

「……今、心の底から君が羨ましいと思ったよ」

「あげませんよ。あの人は俺のもんで、俺はあの人のもんなんです」

都生さんの顔には先程のニコニコとした笑顔はなく、どことなく哀愁を感じる顔になった。

今の所ちやんと腹割って話せてる気がする。

ありがとう先輩。先輩のお陰です、多分。

「いや僕も夕貴も顔いいでしょ? いいことだけど、そのせいでトラブルとかしがらみも多くなってね。迂闊な事言えないんだよ」

「まあド直球に言えば面以外見られることなさそうなくらい顔いいですね」

「辛辣だなあ! まあそうなんだけど。いいなー、僕も一緒に幸せになりたいって人と添い遂げたいよ。どうやったら会えるの?」

「俺の場合は超レアもレアなケースなんで当てにしない方がいいです。強いて言うなら運と忍耐ですかね」

言えねえよ……おかしなパラレルワールドに閉じ込められた挙句そこで出会って心を救われましたとか。

書いてるレポートに文句つけられた挙句酔い潰されてゲームしたのがきっかけですとはさあ……言えねえよ。

「身も蓋もないなあ。馴れ初めとか聞いてもいい?」

「男二人で火い炊きながらするのがコイバナ!? 他になんかあるだろ! というか夕貴さんとの関係聞きに来たんでしょ」

「それはもういい、君を信じるから。教えておくれよー、真実の愛はどこにあるんだよー。あと友達になろう? 敬語もいいよ、そこまで歳変わんないでしょ?」



「早い早い距離の詰め方エグいんすよ！いくらなんでも急接近しすぎだろ！」

しかも真実の愛とか言い出したぞこの男。心中お察しするが、俺に言われてもふつつーに困る。

それにこの口調といい距離感と言い、なんとなく東と似ててやりづれえ！

こつちが素か？にしても悩みに直面するとダル絡みするところまで似なくてもいいだろ。

「僕だつてコイバナしたいんだよ？でもさあ、僕がそういう話題振つても『お前は困らないからいいよな』としか言われないんだよ。失礼じゃない!?!」

「それは……ちよつと嫌っすね。都生さんにも未来のお相手の方にも」

「でしょ？いいことと同じくらい嫌なことも起こってるよ……あつ、そろそろ火着いた？」

「ん、炭パチパチいつてますね。そろそろいけつかも。せんぱーい！」  
「はぁーい。今持つてくわねえ」

都生さんが今日の為に用意したという大きなテーブルに食材が乗っていく。

折り畳み式だつてのに四人で囲むには十分なほど大きい。なんでこんなもん持つてんだ？

と思つたが運動会の時とかに使うテーブルに椅子かと思ひ当たる。運動会、あんまりいい思い出がねえなあ……。

都生さんは結果がどうでもすげえキヤーキヤー言われてたんだろ。うな。嫌そうなのが目に浮かぶぜ。

「んじや都生さんに音頭取ってもらいましよう」

「なんで？初対面が半分な上に発案者でもないよ!?!」

「さんせー」

「さんせえ」

「賛成、これが民意つすね」

「言うこと聞かない民衆を滅ぼす時が来たか。まあいいや、僕もお腹空いたしささつとやろうか。じゃあ飲み物持って、今日という何でもない幸せな日に」

「「「かんぱーい！」「」」

「しーがー！ご飯ばつかじやなくてお肉食べなさいよお！」

「焼肉と言ったら白い飯でしょうが。俺は人間火力発電所だ」

「肉を！魚を！食べ！減らないでしょっ！あつ都生さん人のおにぎりとか大丈夫な人……？」

「大丈夫。中は何も入ってないよね？」

「そこはかとなない含みを感じるよ……兄さん……」

「都生さん意外と食いますね。肉取りますよ」

「ありがたい。普段外回りが多い体力仕事だから、食べれる時に食べる社会人の習慣だねえ」

「兄さんは朝昼しっかり食べるけど夜はそんな食べないんだよ。食べる時はストレス抱えてる時だから分かりやすい」

「そういう事言わなくていいの東ちゃん。それにしてもモデルみたい

な生活してるのね、すごおい……」

「コソコソ……」

「何をコソコソしてやがる。つーか口で擬音言うとか……おまつ、酒はダメだつつつたる！隠れて持ち込みやがって！」

「い、いいじゃん！僕は兄さんの車で帰るもん！誰にも迷惑かけないもん！」

「そういう問題じゃねーから！ケアが必要な時点で迷惑に……あーっ！速攻で開けて飲みやがった！お前介抱すんのが誰だどっ！」

「夕貴……僕の前でお酒飲まないのに二人の前では飲むんだ……」

「都生さんそんなこと言うてる場合じゃないんだけど!？」

「くあー……」

「やっぱりこうなのかよ……先輩そっち持って。都生さん後部座席開けてもらって。放り込むんで」

「はいはい。んもー、東ちゃん飲むといっつも大暴走して電池切れちゃうんだから」

「ははは……妹がご迷惑おかけしてます……」

大満足、後大暴れした東を先輩が寝かしつけて宴も酣。

幸せそうにぐーすかしてる東を車に放り込み、さっさと後片付けに移る。

炭もトングでつつけばボロボロと崩れる、楽しい時間だっただけにあつという間だった。

楽しいな、何の不安も無い生活ってのは。後片付けまで楽しく思えてくる。

いややつぱ普通に面倒くせえな……

「つっても紙皿紙コップに割りばし纏めたらもうあんまりやることねえな。先輩そっちは？」

「……開けてないビール缶が4本あった」

「バカがよ……とりあえず持ち帰ってもらおう。いつすよね都生さん」

「うん。ひよつとして夕貴って外じゃいつもこんな感じなの？実家だと真面目というか……そんな感じなんだけど」

「ハメ外す時はいつもこうっすね。ゲームするときには高笑いとかしますよ」

「高笑いっ!?!そ、想像できないなああの夕貴が高笑いなんて」

手際よく片付けていく中で不思議と、自分が笑顔だったことに気付いた。

別に楽しいことをしてるわけじゃない、むしろ楽しいことは終わった後だ。

なんだかな。日常を噛み締めるっていうのはこういうことなのかもしれねえ。

そんなことを考えてたからか、ふと隣を見れば先輩がじつと顔を見てた。

「じー……」

「口で言うなや。なんすか」

「別に？楽しそうだなあって」

にこにここと、何が楽しいのか俺の顔を見ては先輩も笑顔でいる。

かなりむず痒いが、不思議と嫌じゃない。むしろそのまま近くにいると欲しいとすら思ってる。

おかしいな。俺はこういうキャラじゃなかったはずなんだ。もつと硬派で……硬派？だった。

「先輩が近くにいると安心する」

「どうした急に」

「言葉にしておきたいんだよ。こんな当たり前が、当たり前に過ごせるんだから」

「そういうもん……そういうもんね。おっけ、私はずっと傍にいるから」

理解が早すぎるぜ先輩。そういうところ本当に好きだよ。

訳も分からんのになぜか笑いが出てくる。先輩も笑ってる。

幸せだよ、本当に。

「夕貴がはっちゃける理由が分かったよ。これはそうなる」

ジャリジャリと足音を立て、都生さんが歩いてきていた。

自分には当分回ってこないであろう玩具を見た子供の様な顔をしててちよつとウケる。

「都生さん。積み込み終わっただんですか、早え」

「慣れてるからね。そりゃこんな空気感の近くにいたらアグレッシブにもなるね。嫉妬で気が狂いそうだ」

「都生さんもいつか出会えますよっ」

「だといいいけどね。しばらくは仕事と妹の世話で手いっぱいだよっ」と

都生さんの車のドアが閉まる。残った食材と飲み物は東の希望もあつて持ち帰ることにもしてもらった。

こつちは徒歩なこともあつてあんまり多く持つて帰れないしな。

都生さんは東を連れて一度実家に戻るらしい。お酒との付き合い方には家族会議も辞さないという。

大正解だと思う。むしろ一人暮らしの男の家で酔い潰れたりしてた今までがおかしいんだ。

そこんところちゃんと相談してもらいてえ。一応、一応な。

俺には先輩がいるわけだし間違いは起きないと思うが。

「それじゃ僕らは帰るよ。二人を乗せてあげられたらよかつただけど……」

「荷物多いししゃーないっすよ。後部座席夕貴さんが寝て埋めてますし」

「ほんとごめんね……今度から夕貴が出先で潰れたら遠慮なく連絡してね」

「了解っす。また遊びましょ」

「今日はありがとうございました〜!」

「こちらこそ楽しかったよ、またね!」

都生さんの車を見送りつつ、いくらかの手荷物を持つて俺達も帰路に着き始めた。

「ちよい疲れたな。眠い」

「分かる。私も帰つてお風呂入ったらちよつと寝ようかな」

「飯食った後で身体に悪いとは分かつてんだけどなあ。この眠気に抗える奴は無条件で尊敬する」

「じゃあ一緒に寝ちやう? 私も家帰るのめんどいし」

「あー……いつすね、寝ちやいましょう。不摂生、皆で寝れば、怖くない」

何の味もしない会話ではあるが、それが無性に心地いい。

人生で一番楽しいバーベキューの時間だった。

「お、おはようございます……」

「おはよう夕貴、家のソファで酔いから覚める気分はどう？これから家族会議すつ飛ばして家族裁判だよ」

「すみませんでした……うう、ついにバレた……」

「隠してたんだ？それならしばらく禁酒ね。ちよつとハメ外しすぎ」

「そんなあつ」